

平成 27 年度 文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究」
調査研究テーマ「自治体における幼児教育の推進体制の在り方に関する調査研究」

幼児教育アドバイザーの育成プログラムの開発

『奈良市立こども園カリキュラム』に基づく質の高い幼児教育の促進に向けて



平成 28 年 3 月
奈良市

はじめに

奈良市は、平成 27 年 3 月に『奈良市立こども園カリキュラム(バンビーノ・プラン)』を策定し、子ども・子育て支援新制度の時代に適う、幼児教育の質の向上に取り組んでいます。このカリキュラムの策定には約 2 年間をかけ、奈良市の保育者の総力を結集して進めました。策定中のカリキュラム案に基づき、モデル園が十数回の公開保育研究会を開催し、並行して、各保育者は研修に事例を持ち寄り、履歴としてのカリキュラムを検討することを繰り返しました。熱心な事前研修の成果があつて、このカリキュラムは、平成 27 年度より市立こども園・幼稚園・保育園の全園で円滑に導入されました。

しかし、いざカリキュラムを手元に置き開始してみると、新たな課題が見えてきました。文言について個々には理解されているように思われても、保育者間で共通理解に至っているとは言い難いところがありました。カリキュラムをいかに実践に反映させ、また、実践からいかに履歴としてのカリキュラムを作成するのか、実践研究はどのように進め蓄積するのか、など、全園を見渡すと、提供される幼児教育の質の確保や向上に問題が散見されました。

こうした課題への対処として、幼児教育の推進体制を構築し直す必要に迫られました。そこで、文部科学省委託事業に応募し、推進体制構築の一環として、「幼児教育アドバイザー」の計画的な育成と活用を目指すことになりました。「幼児教育アドバイザー」とは、カリキュラムを熟知し、研修を通して実践指導や実践研究の統括ができる高度な専門性を有する保育者を指します。本研究では、体制構築の端緒として「幼児教育アドバイザー」の育成プログラムを開発しました。

本研究においては、本格的なプログラム開発手順を採っています。最初に、幼児教育アドバイザーとして必要な資質・能力を指定し、それを踏まえて「試行版」の育成プログラムを編成、実施し、多方面から評価を得ました。そして、試行版育成プログラムの改善点を明確にし、「完成版」の育成プログラムを策定いたしました。いずれも特徴は、①15 講座からなるセミナー(講習)と、②自園や他園における活動実習と、③途中経過を振り返る 3 回のスーパーバイズから成り、これらがあざなわれて幼児教育アドバイザーを育成していく点にあります。

育成プログラム開発に当たっては、受講者のみなさまには約 8 ヶ月間、厳しい研修に臨んでいただきました。当初は自信がなく不安の渦中にいたと言う多くの受講者が少しずつ変化し、2 月末の最終面接ではどなたも達成感と充実感に満ち、スーパーバイザーまでも感動させる力量をつけられました。このように本格的な育成プログラムの開発と実施ができること、そして、優秀な幼児教育アドバイザーを輩出できること、これらのこと自体が、現在の奈良市の幼児教育の地力を表しています。今後は、「完成版幼児教育アドバイザー育成プログラム」によりアドバイザーの育成を継続するとともに、認定されたアドバイザーの活用によって、幼児教育の推進体制の構築を進められることを願っています。

平成 28 年 3 月

奈良市幼児教育推進委員会委員長

本 山 方 子 (奈良女子大学)

目 次

はじめに

| | |
|--|-----|
| 第 I 部 研究の目的と方法 | … 1 |
| 1. 奈良市における質の高い幼児教育の推進体制に関する課題 | … 2 |
| 2. 本研究の目的 | … 3 |
| 3. プログラム開発の方法 | … 3 |
| 1 幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力の指定 | … 3 |
| (1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | … 3 |
| (2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | … 4 |
| (3) 保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | … 4 |
| (4) 実践研究を推進・統括する能力 | … 4 |
| 2 【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラムの編成と試行 | … 4 |
| (1) 幼児教育アドバイザー講習 | … 5 |
| (2) 幼児教育アドバイザー活動実習 | … 6 |
| (3) スーパーバイズ | … 7 |
| (4) 市外研修 | … 7 |
| 3 【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラムの評価 | … 7 |
| (1) 受講者の取組と成長 | … 7 |
| (2) プログラム開発関係者による評価 | … 7 |
| ① 受講者の自己評価 | |
| ② スーパーバイザーによる評価 | |
| ③ 研究協力園の実践者による評価 | |
| ④ 外部評価 | |
| (3) 総合評価と改善点 | … 8 |
| 4 【試行版】育成プログラムの修正と【完成版】育成プログラムの編成 | … 8 |
| 4. 研究組織 | … 8 |
| (1) 奈良市幼児教育推進委員会 | … 8 |
| (2) 研究部員 | … 8 |
| (3) スーパーバイザー | … 9 |
| (4) 研究協力園 | … 9 |

| | |
|--|------|
| 第Ⅱ部 【試行版】 幼児教育アドバイザー育成プログラムの編成と実施 | … 11 |
| 1. 幼児教育アドバイザー講習 | … 14 |
| (1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識 | … 14 |
| 講座1 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ | |
| 講座2 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容 | |
| (2) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上 | … 18 |
| 講座3 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上① | |
| 講座4 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上② | |
| (3) 実践の指導：実践者・実践園への指導・助言 | … 24 |
| 講座5 実践の指導①：実践者・実践園への指導・助言 | |
| 講座6 実践の指導②：実践者・実践園への指導・助言 | |
| (4) 実践の指導：カンファレンスの進行と統括 | … 34 |
| 講座7 実践の指導③：カンファレンスの進行と統括 | |
| 講座8 実践の指導④：カンファレンスの進行と統括 | |
| (5) 実践研究の計画と実施 | … 42 |
| 講座9 実践研究の計画と実施①：研究テーマと方法の設定 | |
| 講座10 実践研究の計画と実施②：記録とデータ収集と分析 | |
| 講座11 実践研究の計画と実施③：考察と報告 | |
| (6) 研修の企画・運営 | … 46 |
| 講座12 研修の企画・運営①：事例報告会の企画 | |
| 講座13 研修の企画・運営②：事例報告会の運営 | |
| 講座14 研修の企画・運営③：研究集会の企画・運営 | |
| (7) 総括 | … 49 |
| 講座15 総括：研究集会における研究成果の発表と評価 | |
| 2. 幼児教育アドバイザー活動実習 | … 51 |
| (1) 実習の概要 | |
| (2) 活動の実際 | |
| 3. スーパーバイズの実 | … 57 |
| (1) スーパーバイズの概要 | |
| (2) スーパーバイズにおける評価シート | |
| (3) 評価の変化にみる受講生の課題と学び | |

1. 受講者の取組と成長 … 70
 - (1) S保育者の取組と成長
 - (2) T保育者の取組と成長
 - (3) U保育者の取組と成長
 - (4) 受講者の成長の過程
2. 受講者の自己評価
 - (1) 幼児教育アドバイザーとしての専門性
 - (2) 育成プログラムへの取組
 - (3) 自らのキャリア形成
 - (4) 自らの成長
3. スーパーバイザーによる評価
4. 研究協力園の保育者による評価
 - (1) 幼児教育アドバイザーの資質・能力に関する・評価
 - ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識
 - ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力
 - ③保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力
 - ④実践研究を推進・統括する能力
 - (2) 受講者勤務園への影響：園長及び保育者の評価
5. 外部評価
6. 【試行版】 幼児教育アドバイザー育成プログラムの総合評価と改善点 … 89
 - (1) 総合評価
 - ①受講者の成長
 - ②幼児教育アドバイザーの必要な資質・能力の適切性
 - ③幼児教育アドバイザープログラムの有効性
 - (2) 【試行版】 育成プログラムの改善点
 - ①「講習」「実習」「スーパーバイズ」によるプログラム編成
 - ②幼児教育アドバイザー講習
 - ③幼児教育アドバイザー活動実習
 - ④スーパーバイズ
7. 成果の公表 … 92
 - (1) 研究集会
 - (2) リーフレットの作成と配布

| | |
|---|-------|
| 第Ⅳ部 【完成版】幼児教育アドバイザー育成プログラム（バンビーノ・マスター）の提案 | … 93 |
| 1. 幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力 | … 94 |
| (1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | |
| (2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | |
| (3) 保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | |
| (4) 実践研究を推進・統括する能力 | |
| 2. 奈良市幼児教育アドバイザー育成プログラム（バンビーノ・マスター） | … 95 |
| 1 講習 | … 96 |
| (1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識 | |
| 講座1 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ | |
| 講座2 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容 | |
| (2) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上 | |
| 講座3 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説の内容選択と資料作成 | |
| 講座4 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説の実際 | |
| (3) 実践の指導：実践者・実践園への指導・助言 | |
| 講座5 実践者・実践園への指導・助言の要点 | |
| 講座6 実践者・実践園への指導・助言の実際 | |
| (4) 実践の指導：カンファレンスの進行と統括 | |
| 講座7 カンファレンスの進行と統括の要点 | |
| 講座8 カンファレンスの進行と統括の実際 | |
| (5) 実践研究の計画と実施 | |
| 講座9 実践研究のテーマと方法の設定 | |
| 講座10 実践研究における記録とデータ収集と分析 | |
| 講座11 実践研究における考察とレポート | |
| (6) 研修の企画・運営 | |
| 講座12 研修の企画 | |
| 講座13 研修の運営 | |
| 講座14 公開保育研究会の企画・運営 | |
| (7) 総括 | |
| 講座15 受講の取組における熟達過程の省察 | |
| 2 幼児教育アドバイザー活動実習 | … 111 |
| (1) デイリー・アクティビティ（日常的に行う自園での実習） | |
| (2) ゲスト・アクティビティ（他園における保育参観を伴う実習） | |
| 3 スーパーバイズ | … 112 |
| 3. 受講者の評価と幼児教育アドバイザーの認定 | … 113 |

本報告書における用語について

本報告書においては、奈良市の現状を踏まえ、下記のように用語を用います。

保育者 幼稚園・認定こども園・保育所に勤務する幼稚園教諭・保育士・保育教諭等の資格・免許状を有する者のうち、それらの資格・免許状を有することを必須条件とする任につく者を総称して「保育者」と記す。幼稚園教諭等とほぼ同義であるが、有資格者・免許状保有者であることと、その資格・免許状を要する任に就くこととは別であることを踏まえ、「保育者」の表記を用いる。

実践者 実践を行う保育者。実践に係わる表現がなされる場合、参観する保育者や指導・助言する保育者等と区別して、実践者の呼称を用いる。

担任 クラスを担当する保育者。幼稚園や幼保連携型認定こども園では担任教諭と同義であるが、本報告書においては保育所におけるクラス担当者を含むため、「担任」と表記する。

教育 断り書きを特段付さずに「教育」を単独で用いる場合、学校教育法に定められる「教育」を指す。

教育・保育 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に示される「教育及び保育」を指す。

ねらい 幼稚園教育要領等で用いられる教育用語として用いる場合、「ねらい」とひらがな表記を行う。

園児 幼稚園・認定こども園・保育所に入園・入所し在籍する子供。受け入れ年齢に係わらず、在籍者を総称して「園児」を用いる。

幼児 園児のうち、3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスに在籍する者。

こども／子ども／子供 一般的な意味で用いる場合は「子供」と表記する。法律やそれに伴う制度の名称として用いる場合や、既に公刊されている『奈良市立こども園カリキュラム』などとの統一を図る場合、「こども」や「子ども」の表記を用いる。「認定こども園」「こども・子育て支援制度」など。

第 I 部

研究の目的と方法



1. 奈良市における質の高い幼児教育の推進体制に関する課題

奈良市では「発達と学びの連続性を踏まえた教育の推進」を教育のビジョンに掲げ、「子ども・子育て支援新制度」が開始される平成 27 年度から順次、市立の幼稚園・保育所・既設の認定こども園を新たな「幼保連携型認定こども園」に編成する計画を進めている。既に幼保連携型認定こども園を 7 園開園し、幼稚園・保育所・認定こども園いずれにおいても、質の高い幼児教育を実施することを目指している。

平成 22～26 年度まで、文部科学省から「幼児教育の改善・充実調査研究」の委託を受け、幼保一体化を視野に入れて、幼稚園教諭等実践者の、幼児教育の実践に関する資質向上を積極的に図ってきた。具体的には、一つには、実践者の研修の在り方を改善し、幼児の遊びや行動の見取りと評価の技能を高めるなど、実践知の向上を図ってきた。二つには、幼保合同保育の実践開発などを通し、実践者の協働と教育的意思決定の浸透を図った。三つには、自主交流を促す幼保小連携の実践と研修を通して、子供の育ち合いに向けた、教師・実践者の非指示的指導の在り方を明らかにした。いずれも、質の高い幼児教育の在り方を念頭に、実践と研修と研究を並行して進めてきた。その成果として、幼保合同の研修体制の充実や幼保の相互理解が格段に進むと共に、幼児期の教育と小学校教育の接続の在り方を定められた。

上記の成果を活かし、平成 25～26 年度において『奈良市立こども園カリキュラム』の策定を進め、平成 26 年度末に完成した。このカリキュラムは、キーコンピテンシーの機能を有する三つのコンセプト（【判断と行動】【結い】【表現と反応】）に基づいて構成されている。幼児期の教育については、年齢と期に応じた教育課程に加えて、5 歳児における「こども園から小学校につながるプログラム」やプロジェクト活動などを示し、多様な学びを可能にする多層的な編成となっている。平成 27 年度当初から、本カリキュラムの研修を重ね、本格的に実施している。

本市における喫緊の課題は、400 名を超える実践者がいかに新しいカリキュラムの理念や内容を十分に理解し実践を行うのか、すなわち、本市全域にいかに質の高い幼児教育を普及、提供するのか、ということである。そのためには、従来の研修体制を見直し、今後の幼児教育の推進体制を構築することが急務となっている。

これまでの取組において、園内研修と、市が企画・主催する研修は徐々に充実してきた。カリキュラムに関する研修に絞っても、平成 26 年度には 10 回を超える公開保育研究会や合同研修会が開かれている。しかし、各実践者の実践に十分適用可能な程度にカリキュラムの浸透を図るには、きめ細やかな指導・助言を可能にする研修体制を構築する必要がある。そこで、その一翼を担う存在として、「幼児教育アドバイザー」に着目し、その育成と活用を目指すことにした。奈良市においては、幼児教育の推進体制の在り方として、地域ブロックごとの研修を充実させ、幼児教育の質の向上と実践者の力量形成を図っていくことを考えている。幼児教育アドバイザーには、その際に、高度な専門性に基づき、実践や研究、修養を牽引する役割を期待している。その役割を果たすためには、本市における幼児教育アドバイザーは、今後の市全体の実践者の年齢構成の変化を念頭に、現在、副園長か上級のミドル・リーダーである層を想定している。将来的には、園長職者の多くが、幼児教育アドバイザーの資格を有することを目指す。

以上より、本研究においては、幼児教育の推進体制の構築の一環として、幼児教育に関する指導的役割の中核を担う「幼児教育アドバイザー」を育成し、カリキュラムの推進と普及に向けて活用する方途を明らかにしたい。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、平成 26 年度末に策定した『奈良市立こども園カリキュラム』に基づく質の高い幼児教育を推進する体制づくりの一環として、幼児教育アドバイザーの育成と活用の可能性を明らかにすることである。

本研究において「幼児教育アドバイザー」とは、『奈良市立こども園カリキュラム』を熟知し、適切に解説し、それに基づき幼児教育の実践について建設的で専門的な助言・指導を行い、実践者の力量形成に資すると共に、研修の企画・運営や、実践研究の統括・指導を行い、幼児教育の改善と充実に資する者とする。

本研究においては、幼児教育アドバイザーの計画的な育成に向けて、必要な資質・能力を措定し、育成プログラムを開発、試行する。

具体的には、次の課題に取り組む。

- ① 幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力を措定する。
- ② 幼児教育アドバイザーの育成プログラムを実際に試行し、開発する。育成プログラムは、「幼児教育アドバイザー講習」と、担当園における「アドバイザー活動実習」と、「スーパーバイズの実施」の三つによって組織され、反省的主体的な学修を促すものとして開発する。
 - 1) 「幼児教育アドバイザー講習」は、「カリキュラムに関する専門的知識」「実践場面での適切な指導・助言」「研究の企画・運営」「実践研究の推進・統括」に関する内容を内容とし、内容に応じて「講義」「ワークショップ」「実習」「演習」によって編成される。
 - 2) 「アドバイザー活動実習」は、研究協力園において、保育実践の助言・指導、園内研修の企画・運営、園の実践研究の統括と推進を行う。
 - 3) 「スーパーバイズ」は、教員養成に携わる学識経験者、園長職者、行政職者をスーパーバイザーとし、1名の育成プログラム受講者の相談と助言にあたる。

3. プログラム開発の方法

幼児教育アドバイザー育成プログラムの開発は、以下の①～④の手順に従って行った。(図 1 参照)

① 幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力の措定

幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力として、次の 4 点を措定する。この資質・能力に基づき、育成プログラムを編成する。具体的には、幼児教育アドバイザー講習の講座編成や、スーパーバイズ等における省察や評価の観点などに反映させる。

(1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有

カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識については、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』並びに『奈良市立こども園カリキュラム』に関して、次の点を十分に理解し、その上で精確に解説する技能を有することが、求められる。

- ① カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について、その意味するところを十分に理解している。
- ② カリキュラムにおける幼児期の教育の位置づけと必要性について、発達の観点と教育的意義から十分に理解している。
- ③ 上記①及び②に関して、実践に照らした理解と、実践への活用の在り方の理解を有し、実践に照らして解説することができる。

(2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力

実践上の課題に応じて指導・助言する能力については、指導計画の作成から実施、評価に至るまで、下記の諸点を踏まえて、実態に応じて複合的輻輳的に指導・助言することが求められる。

- ① 実践者の実践上の課題について、実践者個人と、学年と、園のそれぞれの次元から勘案している。
- ② 実践者の熟達を見極め、短期的長期的な課題を把握している。
- ③ 実践者の作成する指導計画について、年齢や期、子どもの状態を反映しているか、また、各項目の記述は適切かつ簡潔であるか、などについて把握している。
- ④ 実践について、指導計画と整合しているか、保育の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が実施されているか、などについて把握している。
- ⑤ 実践者による保育の記録と評価について、指導計画に対応しているか、具体的事実を踏まえているか、十分な省察が行われているか、改善への方策が見いだされているか、などについて把握している。

(3) 実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力

園内研修や合同研修（公開保育を含む）は、実践者の資質・能力を高めるのに有効な機会であり、幼児教育アドバイザーには研修の場を活用して、適切で効果のある指導・助言を行うことが期待される。下記の点において、研修参加者の課題を捉え、研修を企画・運営する能力が求められる。

- ① 時宜に応じた教育や保育の課題や、実践者自身の課題など、各種のニーズや課題に応じてテーマを掲げ、進行や人員配置などの計画を立てる。
- ② 参加者の経験を踏まえ、学びの在りようを勘案して、計画を立てる。
- ③ 研修の実施の際は、参加者の経験や課題、参加の目的に応じて、進行や展開を工夫する。
- ④ 研修の実施の際は、参加者同士の学び合いや相互の啓発を促したり、状況に応じてテーマや問いを絞ったりして、研修を深める工夫をする。
- ⑤ 研修の終了後には、研修を評価し、次の研修に活かすための改善点や参考点を得る。

(4) 実践研究を推進・統括する能力

各園において、1年間を通じて研究課題に基づき実践研究が進められる。園における実践研究の遂行の際、統括的役割を果たし、生産的な研究となるように、下記の諸点を踏まえ、適切に助言・指導を行うことが求められる。

- ① 適切なテーマと研究上の問いが立てられているか、把握し、指導や助言を行う。
- ② テーマに即して、適切な方法が採られているか、把握し、指導や助言を行う。
- ③ 上記②に即して適切で十分な記録が採られ、事実が捉えられているか、また、記録に基づき解釈や評価が行われているか、把握し、指導や助言を行う。
- ④ テーマに応じた結果や考察が得られているか、研究の成果は何であるのか、把握し、指導や助言を行う。

2 【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラムの編成と試行

前掲の「幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力」を踏まえて、その習得・向上と、アドバイス活動の実質化を図るために、幼児教育アドバイザー育成プログラムを開発する。そのために、まずは【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラム（以下、「【試行版】育成プログラム」）を編成、試行し、その

プログラム評価を受けて、【完成版】幼児教育アドバイザー育成プログラム（以下、「【完成版】育成プログラム」）を提案する。

【試行版】育成プログラムは、「幼児教育アドバイザー講習」と、「アドバイザー活動実習」と、「スーパーバイズ」から構成される。相互に影響し合って、幼児教育アドバイザーの育成が促進される。

育成プログラムの開発に当たっては、12名の研究部員が【試行版】育成プログラム受講者として参加し、全プログラムを受講する。実習として、研修の企画・運営や、自園や他園でのアドバイザー活動が組み込まれ、プログラム開発と並行して、幼児教育アドバイザーの活用の可能性を探る。

（１）幼児教育アドバイザー講習

幼児教育アドバイザー講習の目的は、前掲のアドバイザーに必要な資質・能力を総合的に偏りなく向上させ、アドバイザーとしての基礎的で必須な力量を形成することである。

幼児教育アドバイザー講習は、表１のように全15講座から成る。講習のねらいは次の通りである。

- ①『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識を習得し、解説技能を向上させる（No.1・2・3・4）。
- ②保育実践に関して、実践者・実践園に対する指導及び助言の技術を向上させる（No.5・6）。
- ③保育実践研修におけるカンファレンスの進行と統括に関して、知識を習得し、技能を向上させる（No.7・8）。
- ④実践研究の計画と実施、分析と考察に関して、実証的に実施するための知識を習得し、研究を指導し統括する技能を向上させる（No.9・10・11）。
- ⑤異なる種類の研修を企画し、実際に運営することを通して、課題に応じた研修の企画・運営に関する総合的な技術を向上させる（No.12・13・14・15）。

以上の①～⑤のねらい毎に、講義やワークショップ、実習などを組合せ、幼児教育アドバイザーに求められる高度な専門性、すなわち、均整のとれた四つの資質・能力を習得することを可能とする。なお、講座実施日は、受講者や研究協力園などの状況に照らして必ずしも講座番号順ではなく、柔軟に再編成を行った（個別に行われた実習の日程については表2を参照）。例えば、No.9～11は、研究協力園の実践研究の進展を鑑み、日程を分散させた。

実施に当たっては、1講座90分を単位とした。ほとんどの講座で事前準備や事前打ち合わせが課された。例えば、No.1～2では、『奈良市立こども園カリキュラム』と『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』と同解説の熟読、No.3～4では解説用のプレゼンテーション用の資料作成、No.9～11では研究レポートの作成が求められた。

少人数による講習とし、きめ細やかで徹底した教育を提供することを目指した。講義と個別の実習以外は、小グループに分かれて活動した。グループ毎の活動や個別実習には、スーパーバイザー兼幼児教育推進委員会委員の園長職者が指導者として関与した。

表1における「主要な資質・能力」の4項目は、前掲の「幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力」として措定した（1）～（4）の資質・能力に対応する。いずれの講座でも、すべての資質・能力を必要とするが、【試行版】育成プログラムにおいては、特に向上が期待される資質・能力について、◎＝必須で十分に育成される資質・能力、○＝十分に育成される資質・能力、として、仮説として示した。【完成版】育成プログラムでは、【試行版】の結果を踏まえて、修正し、提示する。

表1 【試行版】育成プログラムにおける幼児教育アドバイザー講習

※WS：ワークショップ

| No | テーマ | 形態 | 主要な資質・能力 | | | | 実施日 |
|--|---------------------------------|-------|----------|----|----|----|-------|
| | | | 知識 | 指導 | 研修 | 研究 | |
| (1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識 | | | | | | | |
| 1 | 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ | 講義 | ◎ | | | | 7/30 |
| 2 | 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容 | 講義 | ◎ | | | | 7/30 |
| (2) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上 | | | | | | | |
| 3 | 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上① | WS | ◎ | | ○ | | 8/5 |
| 4 | 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上② | 実習 | ◎ | | ◎ | | 個別 |
| (3) 実践の指導：実践者・実践園への指導・助言 | | | | | | | |
| 5 | 実践の指導①：実践者・実践園への指導・助言 | 講義・WS | ○ | ◎ | ○ | | 8/5 |
| 6 | 実践の指導②：実践者・実践園への指導・助言 | 実習 | ○ | ◎ | ○ | | 個別 |
| (4) 実践の指導：カンファレンスの進行と統括 | | | | | | | |
| 7 | 実践の指導③：カンファレンスの進行と統括 | 講義・WS | ○ | ◎ | ◎ | | 8/27 |
| 8 | 実践の指導④：カンファレンスの進行と統括 | 実習 | ○ | ◎ | ◎ | | 個別 |
| (5) 実践研究の計画と実施 | | | | | | | |
| 9 | 実践研究の計画と実施①：研究テーマと方法の設定 | 演習 | ○ | | | ◎ | 7/30 |
| 10 | 実践研究の計画と実施②：記録とデータ収集と分析 | 演習 | ○ | | | ◎ | 12/10 |
| 11 | 実践研究の計画と実施③：考察と報告 | 演習 | ○ | | | ◎ | 1/27 |
| (6) 研修の企画・運営 | | | | | | | |
| 12 | 研修の企画・運営①：事例報告会の企画 | WS | ○ | ○ | ◎ | | 8/27 |
| 13 | 研修の企画・運営②：事例報告会の運営 | 実習 | ○ | ○ | ◎ | | 個別 |
| 14 | 研修の企画・運営③：公開保育研究会の企画・運営 | 実習 | ○ | ○ | ◎ | | 2/16 |
| (7) 統括 | | | | | | | |
| 15 | 総括：研究集会における研究成果の発表と評価 | 実習 | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | 2/6 |

(2) 幼児教育アドバイザー活動実習

アドバイザー講習において習得される専門的な知識や技能について、園の実情や実際に即して応用し統一的に活用するために、各受講者は「幼児教育アドバイザー活動実習」として、勤務する自園及び他園においてアドバイザー活動を行う。他園での活動実習には前掲の「講習」における実習を含む。

アドバイザー活動実習は、主に以下の四つの活動から成る。

- ① 『奈良市立こども園カリキュラム』などカリキュラムに関する解説と指導
- ② 実践者の保育実践や、園の保育実践に関する指導・助言
- ③ 園内研修や合同研修（市内実践者対象）に関する企画・運営
- ④ 園の実践研究の計画と実施、分析とレポート作成に関する指導・助言

以上の活動においては、前掲の「講習」で向上させた高度な専門的知識や技能を、自園・他園におけるアドバイザー活動で適用、応用し、そこで新たな課題を受講者自ら発見し、その課題を携えて講習や研修に臨む。すなわち、アドバイザー講習とアドバイザー活動実習との往還によって、幼児教育アドバ

イザーとしての専門性を高めていくことを目指す。

(3) スーパーバイズ

12名の受講者の学修過程には、他の実践者の実践への指導・助言や、研修の企画・運営など、種々の実習が組み込まれている。そのため、実際に遭遇する課題はそれぞれの受講者によって異なる上、指導・助言など実際の対応には選択可能性があり、即応的一義的に是非を判断することは難しい。

そこで、受講者一人一人に対しスーパーバイザーのチームを配置し、講習や活動実習と並行して、スーパーバイズを実施する。スーパーバイズは、受講者の学修過程や指導・助言等の場面を省察し、指導・助言の在り方や別の選択可能性を含めて検討し、受講者自ら課題に気づき、資質や技能の向上にむけてその後の取組の優先性を知ることが目的とする。

本育成プログラムを通して、各受講者に3回のスーパーバイズを実施した。第1回は9月24日、10月1日、10月5日のいずれか、第2回は12月11日、第3回は2月26日であった。

スーパーバイザーのチームは、受講生一人あたり、学識経験者、園長職、行政職または行政職経験者の3～4名で編成する。職種の異なる専門家をチームとすることで、多面的な検討を可能にした。

スーパーバイズでは、自己評価や、反省と課題を記入したシートを事前に提出した。スーパーバイザーはそれを踏まえて一人当たり30分の面接を行い、終了後、所見を提出した。

(4) 市外研修

育成プログラムの重要なオプションとして、受講者（研究部員）のうち6名が、市外研修を行った。高知県教育委員会が主催する公開保育研究会に参加し、高知県が構築している研修体制について情報と資料の収集を行った。加えて、カンファレンスの実際を参観し、高知県の実践者を熟達させるシステムについて情報収集を行った。市外研修の成果は、幼児教育推進委員会で全研究部員を含めて報告され、講習のNo. 14の公開研究会の企画・運営の実習に活かされた。

3 【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラムの評価

上記のように実施した【試行版】育成プログラムの評価については、複数の評価主体による資料と、複数の方法を組合せ、総合的に実施した。

(1) 受講者の取組と成長

【試行版】育成プログラムの受講において、具体的な取組との関係において、どのように自らの課題を認識し、取組において工夫し、自信を得てアドバイザーとして熟達していったのか、受講者自身が自らの熟達過程を振り返り、記録する。

(2) プログラム開発関係者による評価

① 受講者の自己評価

講習については、各講座の終了後、自らの学修について振り返りシートを作成する。

講習における実習と、アドバイザー活動実習については、実習記録を作成する。自らの指導・助言や、計画・実施や、企画・運営について、対象となる実践・実践者や研修参加者などについての状況把握と問題設定、指導・助言上の課題と方法の設定、実施時の状況と留意点、実施に関する評価などを記録する。

スーパーバイズ実施時には、各回毎に、事前に自己評価と反省・課題の記述を行う。

プログラム終了時に、上記の記録を振り返り、総合的な自己評価を作成する。

②スーパーバイザーによる評価

スーパーバイザーもまた、スーパーバイズの実施記録を作成した。また、受講者一人当たり3回のスーパーバイズのほか、受講生の実習状況や、自園での活動状況について、評価を行った。

③研究協力園の実践者による評価

受講者による指導・助言は、実践した実践者にはどのように受けとめられたのか。実践の研修などにおいて指導・助言を受けた実践者について、園毎にその意義と課題について所見を作成した。カンファレンスや事例報告会、公開研究会の研修に参加者については、研修の成果に関してアンケートなどに協力を得た。

アドバイザー活動実習については、園内において、カリキュラムに関する解説、実践上の指導・助言、研修の企画・運営、実践研究の遂行に関して、それぞれ評価を行う。

④外部評価

学識経験者を招聘し、幼児教育アドバイザーの資質向上に関する指導・助言と問題提起を受ける。また、本育成プログラムの開発過程と実施状況について指導と助言を受ける。

(3) 総合評価と改善点

上記、(1)と(2)の評価資料を集約し、【試行版】育成プログラムの総合評価を実施する。

さらに、課題について見直しを行い、【試行版】育成プログラムの改善点を明確化する。

4 【試行版】育成プログラムの修正と【完成版】育成プログラムの編成

【試行版】育成プログラムについて、総合評価と改善点を踏まえ修正し、【完成版】育成プログラムを編成する。加えて、【試行版】における各受講生の評価方法を見直し、【完成版】においては、幼児教育アドバイザーの認定方法を策定する。

4. 研究組織

(1) 奈良市幼児教育推進委員会

本研究全体を統括するために、学識経験者、園長職、行政職合わせて19名から成る奈良市幼児教育推進委員会を組織した。委員の内訳は以下の通りである。

- ・幼児教育を専門とする学識経験者 4名（うち委員長1名、副委員長1名）
- ・市立幼稚園・保育所・こども園園長 8名
- ・奈良市子ども未来部こども園推進課 7名

(2) 研究部員

市立幼稚園、保育所、認定こども園の副園長または上級のみドル・リーダー合わせて12名が研究部員となり、【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラムに受講者として参加した。この層のキャリアを対象としたのは、実践者の世代構成上、貴重な中堅～ベテラン層であり、奈良市において指導的役割を担う世代であるからである。表2に、経験年数と、プログラム受講日を記す。

表2 研究部員の実践者経験年数と個別スケジュール

| 研究部員 | 経験年数 (他での経験) | 講習（他園実習日） | | | | スーパーバイズ | | | 市外 研修 |
|------|-----------------|-----------|-------|-------|--------|---------|-------|------|----------|
| | | No. 4 | No. 6 | No. 8 | No. 13 | 第1回 | 第2回 | 第3回 | |
| A | 35 | 12/8 | 12/8 | 10/31 | 9/17 | 10/5 | 12/11 | 2/26 | 参加 |
| B | 26 (6) | 11/4 | 11/4 | 10/31 | 9/17 | 10/1 | 12/11 | 2/26 | |
| C | 20 | 11/4 | 11/4 | 10/31 | 12/21 | 9/24 | 12/11 | 2/26 | 参加 |
| D | 20 | 11/19 | 11/19 | 11/19 | 9/17 | 10/1 | 12/11 | 2/26 | |
| E | 6 | 1/19 | 1/19 | 1/19 | 9/17 | 9/24 | 12/11 | 2/26 | 参加 |
| F | 20 | 9/29 | 9/29 | 9/29 | 12/21 | 10/5 | 12/11 | 2/26 | |
| G | 34 | 12/15 | 12/15 | 12/15 | 9/17 | 10/5 | 12/11 | 2/26 | |
| H | 30 | 10/16 | 10/16 | 10/16 | 12/21 | 10/1 | 12/11 | 2/26 | 参加 |
| I | 33 | 11/9 | 11/9 | 11/9 | 12/21 | 9/24 | 12/11 | 2/26 | |
| J | 30 | 10/21 | 10/21 | 10/21 | 9/17 | 10/1 | 12/11 | 2/26 | |
| K | 36 | 12/14 | 12/14 | 12/14 | 12/21 | 9/24 | 12/11 | 2/26 | 参加 |
| L | 33 | 1/7 | 1/7 | 1/7 | 12/21 | 10/5 | 12/11 | 2/26 | 参加 |

（3）スーパーバイザー

スーパーバイザーは、本育成プログラムの内容と経過を熟知している奈良市幼児教育推進委員会委員及び事務局より、15名が担当した。内訳は以下の通りである。

- ・幼児教育を専門とする学識経験者 3名
- ・市立幼稚園・保育所・こども園園長 8名
- ・奈良市子ども未来部こども園推進課 4名

（4）研究協力園

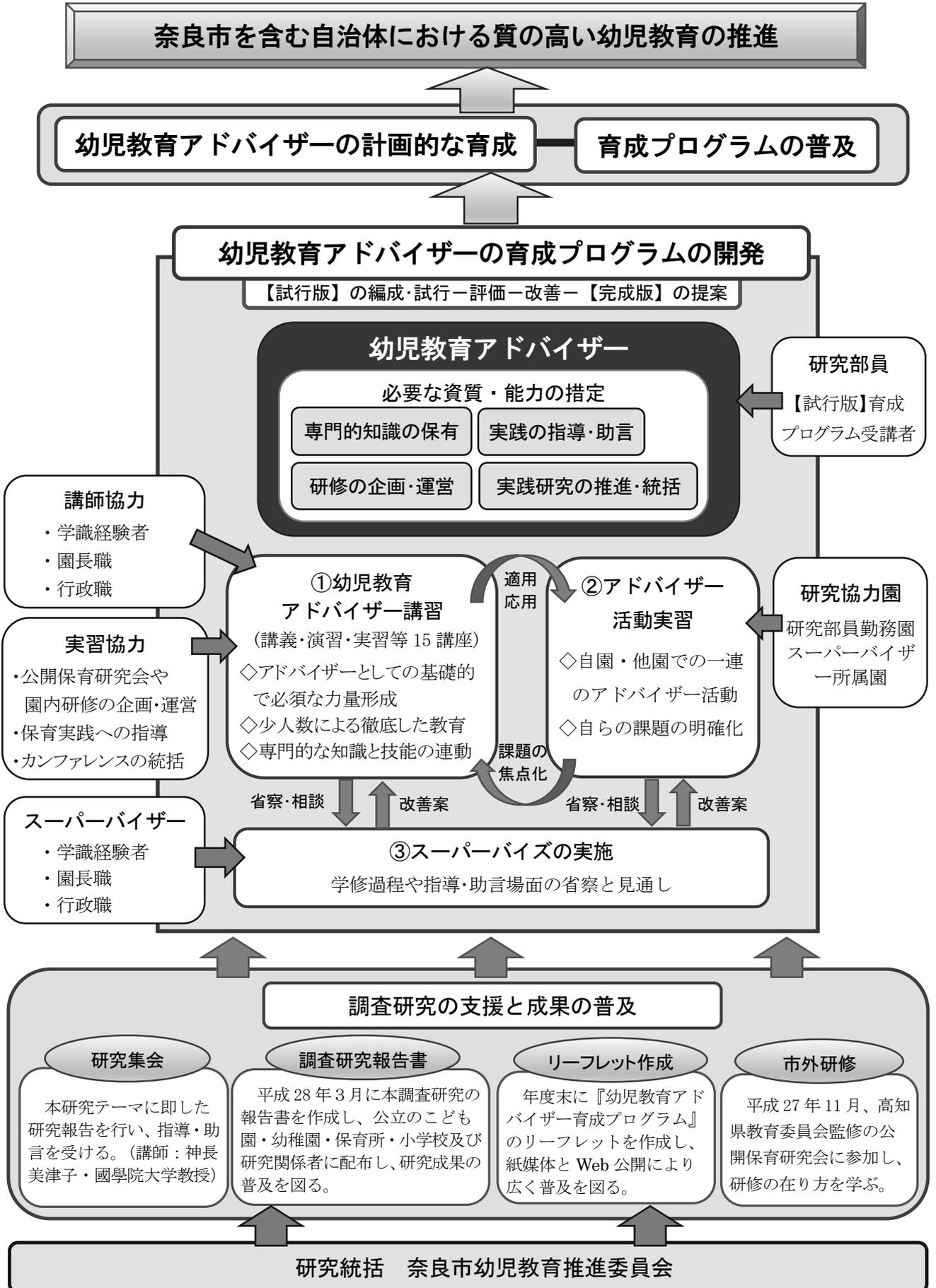
研究協力園として19園を指定した。研究協力園においては、園内研修や公開保育研究会の際に、幼児教育アドバイザー講習の実習園やアドバイザー活動実習の実習園として、受講者の受入を行った。

大宮幼稚園／大安寺西幼稚園／富雄北幼稚園／平城幼稚園

大宮保育園／右京保育園／春日保育園／京西保育園／神功保育園／朱雀保育園／高円保育園／
布目保育園／伏見保育園

帯解こども園／左京こども園／青和こども園／都祁こども園／富雄南こども園／都跡こども園

図1 本研究における取組の全体



第Ⅱ部

【試行版】

幼児教育アドバイザー育成プログラムの
編成と実施

第Ⅱ部



本研究において、【試行版】育成プログラムは研究部員を受講者として、実施された。第Ⅱ部では、試行の実際と、試行から得られた成果について、記述する。

【試行版】育成プログラムは、第Ⅰ部に示した「幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力」を踏まえて、編成された。前掲のように、第一に「幼児教育アドバイザー講習」、第二に「幼児教育アドバイザー活動実習」、第三に「スーパーバイズ」から成る。

「幼児教育アドバイザー講習」については、表1（再掲）に示すように、（1）～（7）の領域に応じて、15の講座で構成される。各講座は、目標や内容に応じて、講義、ワークショップ、演習、実習の形態をとる。本章では、領域を単位として、各講座の実施状況や、受講者の振り返り、習得可能な資質・能力（成果）、改善点などの課題を示す。

「幼児教育アドバイザー活動実習」については、受講者の自園における実習と、他園における実習から成る。いずれにおいても、保育参観を行い、カリキュラムの解説、実践への指導・助言、カンファレンスの統括、研修の企画・運営、その他必要に応じて種々の指導・助言を行う。他園での実習は、「講習」の実習を兼ねている。この「活動実習」も、活動の実施状況に続いて、受講者の振り返り、習得可能な資質・能力（成果）、改善点などの課題を示す。

表1（再掲） 【試行版】育成プログラムにおける幼児教育アドバイザー講習

※WS：ワークショップ

| No | テーマ | 形態 | 主要な資質・能力 | | | | 実施日 |
|---------------------------------------|---------------------------------|-------|----------|----|----|----|-------|
| | | | 知識 | 指導 | 研修 | 研究 | |
| （1）『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識 | | | | | | | |
| 1 | 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ | 講義 | ◎ | | | | 7/30 |
| 2 | 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容 | 講義 | ◎ | | | | 7/30 |
| （2）『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上 | | | | | | | |
| 3 | 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上① | WS | ◎ | | ○ | | 8/5 |
| 4 | 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上② | 実習 | ◎ | | ◎ | | 個別 |
| （3）実践の指導：実践者・実践園への指導・助言 | | | | | | | |
| 5 | 実践の指導①：実践者・実践園への指導・助言 | 講義・WS | ○ | ◎ | ○ | | 8/5 |
| 6 | 実践の指導②：実践者・実践園への指導・助言 | 実習 | ○ | ◎ | ○ | | 個別 |
| （4）実践の指導：カンファレンスの進行と統括 | | | | | | | |
| 7 | 実践の指導③：カンファレンスの進行と統括 | 講義・WS | ○ | ◎ | ◎ | | 8/27 |
| 8 | 実践の指導④：カンファレンスの進行と統括 | 実習 | ○ | ◎ | ◎ | | 個別 |
| （5）実践研究の計画と実施 | | | | | | | |
| 9 | 実践研究の計画と実施①：研究テーマと方法の設定 | 演習 | ○ | | | ◎ | 7/30 |
| 10 | 実践研究の計画と実施②：記録とデータ収集と分析 | 演習 | ○ | | | ◎ | 12/10 |
| 11 | 実践研究の計画と実施③：考察と報告 | 演習 | ○ | | | ◎ | 1/27 |
| （6）研修の企画・運営 | | | | | | | |
| 12 | 研修の企画・運営①：事例報告会の企画 | WS | ○ | ○ | ◎ | | 8/27 |
| 13 | 研修の企画・運営②：事例報告会の運営 | 実習 | ○ | ○ | ◎ | | 個別 |
| 14 | 研修の企画・運営③：公開保育研究会の企画・運営 | 実習 | ○ | ○ | ◎ | | 2/16 |
| （7）統括 | | | | | | | |
| 15 | 総括：研究集会における研究成果の発表と評価 | 実習 | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | 2/6 |

「スーパーバイズ」については、実施状況を記し、スーパーバイズ実施上の課題等を記す。

以下、「1. 幼児教育アドバイザー講習」と「2. 幼児教育アドバイザー活動実習」における、構成と凡例である。

振り返り

各受講者による振り返り記述を集約した。講座や実習に参加し、受講者は「どのようなことを感じ学んだのか」、次への目標や課題解決について「どのように取り組んでいけば良いか」ということについて振り返った。

成果

受講者の振り返りから、カリキュラムに関する「気づき」や「アドバイザー活動において必要な点」を、資質・能力別に集約し、受講者の学びを成果として示した。さらに、受講者の学びから、本講座で向上が期待される資質能力について、「育成可能性」として、◎＝必須で十分に育成される資質・能力、○＝十分に育成される資質・能力、を示した。

課題

「振り返り」や「成果」を踏まえ、改善点等の課題がある場合に、記している。

資料

配付資料や実施時に取りまとめた資料などを、補足資料として掲載した。

1. 幼児教育アドバイザー講習

(1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識

| | |
|----|--|
| 講座 | 講座1 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ 講座2 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・『奈良市立こども園カリキュラム（バンビーノ・プラン）』について、その理念と編成原理、構造、内容、特色などについて、専門的知識を習得する。 ・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』や認定こども園法などに照らして、『奈良市立こども園カリキュラム』の特徴を十分に理解する。 |
| 種別 | 講義 |
| 実施 | 平成27年7月30日（木） 講座1：9:00-10:30、講座2：10:40-12:10 |
| 内容 | <p>1. 幼児教育アドバイザーとしてカリキュラムを理解する</p> <p>(1) 幼児教育を理解し、総合的に指導する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『奈良市立こども園カリキュラム』について、発達を踏まえて理解する。 発達の各期にどのような特徴があるのか、なぜ必要なのか等、教育的な意義や発達の視点から幼児期の教育の位置付けや必要性を理解する。 ・「奈良市立こども園カリキュラム」に沿った、子供理解に基づいた適切な指導をする。 “△△先生に聞けばよく知っているから、△△先生に聞こう” “カリキュラムのことをよく知っている人は、△△先生である”等、カリキュラムの特徴や構成、理念、内容を十分に理解する。 ・実践と照らし合わせ探ることのできる「履歴としてのカリキュラム」を構築できる。 実践に活用するとどうなるのか？具体的に指導できる 等 例：3歳2期の時期なので、□□のような発達の姿が見られる 等 ・大学教員や他の幼児教育アドバイザー、スーパーバイザーより、様々な知識を得る。 <p>(2) 実践や研修を構想する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイザー園や自園、公開保育研修などの実践現場での指導助言を通して、日頃の実践を省察する力を身に付ける。 <p>(3) 幅広い人間性や感性を身に付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・迷いや不安が生じたときに自分の心の内を打ち明け、園長や他の実践者と共に共感しながら、明日の教育・保育の質向上に向けた取り組みのための、課題や解決策を考える。 等 <p>上記の内容を組み込みながら、幼児教育アドバイザー講習受講者が下記のことについて取り組めるようにする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 実践を振り返る。 ② 自己目標を具体的に持ち取り組む ③ 自己研鑽をつむ。 ④ キャリアに応じた研修を企画・運営・実施する。 |

2. 幼児教育アドバイザーに求められる『奈良市立こども園カリキュラム』の理解のポイント

(1) 全体について

- ①カリキュラム全体の「構成と内容」について熟知する。
- ②カリキュラムの編成や運営、更新にかかわる「システム」を理解する。
- ③「バンビーノ・プラン」が何を指しているか、知る。

(2) 乳幼児教育・保育に関する奈良市の取組について

- ①奈良市のまちづくり——めざす教育——めざすこども園の教育・保育、の相互関係を理解する。
- ②幼保の再編統合、及び、こども園化に向けた課題がどこにあったか、理解する。
- ③奈良市における幼保連携型認定こども園の役割を理解する。
- ④約10年に及ぶ、外部資金獲得に伴う研究・修養の努力と成果が今日につながっている。

(3) カリキュラムについて

- ①バンビーノ・プランにおける「カリキュラム」の定義を熟知し、活用する。
- ②カリキュラムにおける用語を正確に理解し、使い分ける。
- ③策定のシステムを知っておく。
- ④カリキュラムの構造を熟知する。
- ⑤カリキュラムの理念についてそれぞれの内容を熟知する。
- ⑥図3「カリキュラムの理念とコンセプト」について、正確に理解する。
- ⑦「コンセプト」とは何か、なぜ必要であるのか、どのような機能があるのか、熟知する。
- ⑧各コンセプトの趣旨と内容について、どのような特質を示しているのか、熟知し、活用する。
- ⑨「年齢に応じたカリキュラム」について、年齢毎のポイントや用語の使い方を熟知し、活用する。
- ⑩「年齢に応じたカリキュラム」とは別に、「特色ある活動」が編成されている理由を理解する。
- ⑪「特色ある活動」における各活動の定義と目的をよく理解する。
- ⑫「特色ある活動」について、コンセプトで捉え、説明することができる。

※補足：『奈良市立こども園カリキュラム』について

1) カリキュラムの理念

(1)「生きぬく」子どもの育成 (2) 乳幼児期に必要な経験の保障 (3) 小学校教育への接続

2) コンセプト

【判断と行動】自ら考え、判断し、行動する。

【結い】 <もの><ひと><こと>とかかわり、関係を結ぶ。

【表現と反応】思いや気付きや感じたことを表し、認め合う。

- ・『奈良市立こども園カリキュラム』における「コンセプト」は、0～5歳までの人格的、社会的、認知的な育ちを保障するために必要な、カリキュラムを貫く柱であり、子供の長期的な発達と各年齢における育ちを捉えていくために必要な観点である。

3) 年齢に応じたカリキュラム

- ・3歳児未満児の保育
- ・幼児期の教育
- ・幼児期の長時間保育

4) 特色ある活動

- ・こども園と小学校をつなぐ
- ・テーマに即して探究する（プロジェクト活動、世界遺産学習）
- ・育みを促す（食育、特別支援）
- ・生活を記録する（絵日誌、奈良型ドキュメンテーション）

〔1〕カリキュラムの編成内容や活用方法等についての気付き

- ①年齢別・特色ある活動とともに子供の発達の全体像を踏まえ、「作るシステム」「維持するシステム」「更新するシステム」がセットになっている。
- ②0歳児から始まり、就学以降も適用可能な育ちが一貫して捉えられており、発達の連続性を踏まえながら幅広く長期にわたって活用できる。
- ③子供が自ら「生きぬく力」を育んでいくために、子供の「経験」を重視することで、経験と子供の発達へのつながりの明確化やねらいに対する評価・反省の具体化ができる。
- ④今まで知らなかったこと理解していなかった点等を再確認し、カリキュラムの成り立ちが理解できる。
- ⑤理念、年齢に応じたカリキュラム、これまでの経過について等、「コンセプトの考え方」について学べる。
- ⑥カリキュラムの理念である「生きぬく子ども」を育てるために、0歳児からの育ちを一環として捉える教育・保育の重要性と、読解きの手法が学べる。
- ⑦『奈良市立こども園カリキュラム（バンビーノ・プラン）』の策定過程における、気付きやねらい実施について、具体的に知ることができる。

〔2〕具体的なカリキュラムの活用方法について

- ①実践と照らし合わせて活用し、「園独自のカリキュラム作りへと反映させる。
- ②現場と共有することで、全実践者がかかわれるような取り組みや実践に直結させる。
- ③カリキュラムを中心に据えた子供の発達を捉えながら、実践者間で気楽に話し合える環境作りに努める。
- ④その期の子供の発達の姿や「めざす子どもの姿」を理解し、今後、実践の指導・助言の場で活用する。
- ⑤プレゼンテーションという視覚的な表現を用いて、学んだこと・指導計画・指導案等を照らし合わせ、指導助言を行う
- ⑥他の実践者に、自分の言葉で解説したりカリキュラム活用について伝えたりする。
- ⑦育ちを見取ることや育ちにあった援助・環境構成をする等、カリキュラムの重要性について知らせる。
- ⑧奈良市の目指す教育・こども園への再編、バンビーノ「カリキュラム」の定義を熟知し、活用する。
- ⑨実践の計画への接続等の学びを生かし、自園でのカリキュラム会議、事例研修等の場で活用する。
- ⑩園内での日誌の書き方や助言に生かす。
- ⑪自園、他園での研修で、実践者に伝えたり指導計画に取り入れたりする。
- ⑫必要な時・場・課題に焦点当てて整理し、「自分も一緒に学びたい」という姿勢を伝えながら指導・助言を行い、互いに力を付ける。

〔3〕理解への方法

- ・繰り返し読解くことでカリキュラムの全体像、一つ一つの語句の意味、コンセプト等について再度理解を深める。



◇受講者の振り返りにみる学び

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|--|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | <ul style="list-style-type: none"> ・期の子供の発達の姿やめざす子供の姿を理解する。 ・カリキュラムを中心に据えた子供の発達を捉える。 ・自分の言葉での伝達できるようにする。 ・カリキュラム活用方法や重要性について伝達することや確認をする。 ・繰り返し熟読し、理解を深める必要がある。 | ◎ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践者間で気楽に話合える環境作りをする。 ・学んだことと指導計画、指導案等と照らし合わせる。 ・育ちを見取ること・育ちにあった援助・環境構成を構築する。 ・伝え方の工夫（パワーポイントなどの表現方法の活用）をする。 ・経験と発達へ、指導計画へのつながりを明確にする。 | ○ |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・学びを会議や研修、園内での日誌、指導に活用する。 | |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・焦点整理と、共に学ぼうとする姿勢を保持する。 | |

(2) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上

| | |
|----|---|
| 講座 | 講座3 『奈良市立こども園カリキュラム』解説技能の向上① |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識に基づき、解説技能を向上させる。 ・視覚的な表現（プレゼンテーション）を用いて、その資料に基づいて解説を行うという経験を通して、受講者の解説技能を向上させる。 ・各グループのテーマ（①幼児期（3～5歳児）の教育と長時間保育、②幼児期（3～5歳児）の教育と特色ある活動、③乳児期（3歳未満児の保育）に基づいた資料作成や解説準備を通して、カリキュラムの特徴や子供の育ちを深く理解した、解説技能の向上を図る。 |
| 種別 | ワークショップ |
| 実施 | 平成27年8月5日（水） |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・3～5歳児の幼児期の教育を基本として、長時間保育及び特色ある活動、0～2歳児の保育について、その発達の特徴や関わりの視点等について、グループ間で互いに意見を出し合い探ることで、奈良市立こども園カリキュラムの理解と解説する能力を身に付ける。 ・より理解しやすい解説方法の追究と実践を把握する力を身に付け、的確な根拠を基にした解説及び指導・助言を行う。 |
| 方法 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 3つのグループに分かれ、テーマに基づいた『奈良市立こども園カリキュラム』の読解を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ①互いの気付きを出し合い、話合の中で、カリキュラム活用方法や重要性についての確認を行う。 ②繰り返し熟読し、各年齢の特徴などについての理解を深められるようにする。 2. 第1回、2回講義での気付きや第3回講義の内容を踏まえ、意図して伝えたいことや伝え方について話し合う。 <p>カリキュラムの理念と内容に関して、次の内容を含め考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①期の子供の発達の姿や「めざす子どもの姿」について、どのように伝えるのか。 ②カリキュラムを中心に据えた子供の発達を捉え、内容についての的確に伝えられるようにする為に、策定過程で出されたポイント等を振り返る。 ③自分の言葉で伝達できるように、解説を工夫する。 ④伝えたいことを共通理解したのち、内容の精選やグループ内での分担を行いながら、パワーポイント作成等、伝え方を工夫する。 3. 作成した資料を基に報告し合い、内容について再確認する。 4. 全ての資料を共有し、自園、他園での実践で活用する。 |



| | |
|----|--|
| 講座 | 講座4 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上② |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・講座3のワークショップで作成した『奈良市立こども園カリキュラムの視覚的表現資料と解説文を用いて、カリキュラム研究大会や研究協力園（他園）園内研修会で、実際にカリキュラムの解説を行い、講義での学びと実践での経験との往還を図る。 ・アドバイザー講習とアドバイザー活動実習とを往還させることによって、幼児教育アドバイザーとしての専門性を高め、より確かなカリキュラム理解へとつなげる。 |
| 種別 | 実習 |
| 実施 | 平成27年9月1日（火）～12月22日（火） |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム研究大会（10月31日、青和こども園、参加者：全国の幼児教育関係者）やスーパーバイザー勤務園において、講座3で作成した資料と解説文を持参し、『奈良市立こども園カリキュラム』について、聞き手が理解を深められるよう、解説を行う。 ・講座3で作成した資料を受講者間で共有し、園のニーズに応じて、①幼児期の教育と長時間保育、②幼児期の教育と特色ある活動、③3歳未満児の保育のいずれかについて、解説できるようにする。 ・カリキュラム研究大会においては、前掲の①～③のテーマに分かれて、各分科会で解説を行う。 ・スーパーバイザーは、受講者を「見通しをもって側で見守る」存在であり、受講者に適切かつ具体的に助言や指導を行う存在である。本育成プログラムについても熟知している。したがって、初めての他園での解説実践は、原則としてスーパーバイザーの勤務園の園内研修で行うこととする。 ・園内研修では、少人数で密な議論が可能となる。受講者にとって他園の園内研修に参加することは、想定を超える質疑応答等を経験する可能性がある。受講者は講義やワークショップでの学びと、カリキュラム解説を通して「知識と技能の連動」を図る。 <p>【参考】園内研修の意義（最終的には平成23年度の文部科学省委託研究の報告書を出典とする予定）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育を相互に見合い、検討することを通して、自らの課題を明確化し、よりよい方途を探る。 ・専門的知識と実践とが往還し、実践の在りようが変わることに学びの意義がある。 ・記録を基に実践を見直し、実践者同士が共有し、実践者の協働でよりよい実践の在り方を探る。 ・外部の実践者や幼児教育の専門家の参加を受け、検討を通して実践を大きな視野で捉え直す。 |
| 方法 | <p>以下の手順にて取り組む。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 実践を参観する。 ② 実践者と、実習者（育成プログラム受講者）、スーパーバイザー、研究協力園の他の実践者がカンファレンスを行う。本日の実践についての振り返りや課題の共有を行い、期の発達を交え研修する。 ③ カンファレンスで実習者は、実践者の課題を共有し、課題に即して、指導・助言を行う。【講座6】 ④ 実習者は、『奈良市立こども園カリキュラム』について、解説する。【講座4】 ⑤ 実習者は、カリキュラムの視点から本日の実践について解説し、指導・助言を行う。【講座4、6】 ⑥ 実習者は実習後、担当のスーパーバイザーより『奈良市立こども園カリキュラム』の解説や本日の実践指導について、指導を受ける。ここでは、実践者の年齢や経験の理解の違い、実践者の解説や伝わり方について等、実習者自身のキャリアに応じた具体的な指導を受ける。 ⑦ 実習者は、本日の実習を振り返り、次回への課題や改善点、手立ての工夫等を明確にイメージし、新たな課題を携えて次の講習や実習に臨めるようにする。 |

| スライド | 解説 |
|--|--|
| <p>表の見方は… p.20</p> <p>・期や年度の終わりに育ってほしい子どもの姿を記している。 ・次の4つの視点でとらえ、順に表記している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生活する姿 ○ 遊びへのかかわり ○ 人とかかわり ○ 集団や全体での姿 <p>・3つのコンセプトがバランスよく含まれるようにしている。</p> <p>「めざす子どもの姿」を受けて、上記の4つの視点の順に「ねらい」を設定。 「めざす子どもの姿」と「ねらい」は必ずしも1対1対応にはならない。</p> | <p>・表の見方ですが、「めざす子どもの姿」では、「めざす」としたのがポイントです。</p> <p>・「子どもの姿」にするとその期の途中なのか、期の終わりなのか、明確になりません。誰が見てもこういう姿を目指すとしておくほうが分かりやすいと考え、期や年度の終わりに育ってほしい子供の姿を記入しています。</p> <p>・四つの視点から子供の姿を捉え、順に表記しています。視点は、①生活する姿、②遊びへのかかわり、③人とかかわり、④集団や全体での姿、です。3つのコンセプト（判断と行動・結い・表現と反応）がバランスよく含まれるようにしています。</p> <p>・「ねらい」では、（略）子供の姿との対応がしやすいように順に表記しています。しかし、「めざす子どもの姿」と「ねらい」は必ずしも1対1対応にはなってはいません。</p> |
| <p><3歳児> p.50、p.62、p.74</p> <p>集団の中での情緒の安定を図りながら、経験の繰り返しと積み重ねを大切に、依存的な生活から自立的行動へ促します。</p> <p><4歳児></p> <p>遊びを自ら創り出していくとする意欲を引き出し、やり遂げた喜びと自信を積み重ね、友達と一緒に多様な経験をされるようにします。</p> <p><5歳児></p> <p>今までの経験や自信を生かし、遊びを進める中で、協同的な遊びや体験の充実を図り、学びを楽しむ力と学びに向かう力を育みます。</p> <p style="text-align: center;">年齢の特徴的な姿、育みたい姿を表している</p> | <p>・それぞれのページが一番初めには、年齢の特徴的な姿、育みたい姿を表しています。</p> <p>・3歳児：集団の中での情緒の安定を図りながら、経験の繰り返しと積み重ねを大切に、依存的な生活から自立的行動へと促します。</p> <p>・4歳児：遊びを自ら創り出していくとする意欲を引き出し、やり遂げた喜びと自信を積み重ね、友達と一緒に多様な経験をされるようにします。</p> <p>・5歳児：今までの経験や自信を生かし、遊びを進める中で、共同的な遊びや体験の充実を図り、学びを楽しむ力と学びに向かう力を育みます。</p> |
| <p> 3歳児 p.50～p.61</p> <p>★ 3歳児から5歳児共通として「生き物」・「小動物や虫などを総称</p> <p>★ 乳児期から幼児期への移行 クラス人数や職員配置人数</p> <p>★ 1期 ・2歳児クラスから進級した幼児への配慮事項 ・3歳児クラスから入園した幼児への配慮事項</p> | <p>・3歳児では、乳児期から幼児期への移行に伴い、クラス人数や職員配置人数が変わるなど、生活環境が変化していく時であり、進級児と新入園児がいるので個人差への配慮が大事です。</p> <p>・1期2期では、「実践者との信頼関係を基盤に」という視点を持ち、生活習慣や遊びを見直して作成しています。2歳児からの進級児は、今までの経験があり環境に慣れている分、できることも多いです。しかし、育ち急がず、その年齢だからこそ経験させたいということを見直し作成しています。1期には、進級児と入園児のそれぞれの配慮事項をあげています。</p> |
| <p> 4歳児 p.62～p.73</p> <p>★ 好きな遊び</p> <p>・経験の積み重ねにより好きという評価を持つ。 ・好むことに基づき一つを選択する ・日を超えて継続する</p> <p><事例 p.174、p.175> 「動くバスをつくらう」</p> | <p>・4歳児では、いろいろな経験を積み重ねて遊びに対して「好き」という評価を持ち、「好み」や「こだわり」に基づき、いくつかある遊びから1つ選択したり、日を超えて継続したりすることから「好きな遊び」と捉えています。しかし、実際の遊びの状況に応じて、期や年齢にかかわらず摘要していくものだと考えています。</p> <p>・冊子の172ページから175ページ、実践事例「いっしょにおいのジュースができた」「動くバスをつくらう」をご参照ください。</p> |
| <p>★ 「友達」…どのような友達であるか</p> <p>「気の合う友達」 「同じ遊びの場にいる友達」 「大勢の友達」</p> <p>★ 「きまり」と「約束」</p> | <p>・そして4歳児は、遊びや集団において友達とかかわりが広がっていく時期であると捉え、どのような友達であるかということを示すために、「気の合う友達」「同じ遊びの場にいる友達」「大勢の友達」などいくつかの表現を使い分けています。</p> <p>・また、「きまり」と「約束」の使い方では、「きまり」とは遊びを含めて園生活を送る上で様々なきまりのこと、「約束」とは、友達とは、実践者などと話して決めたことで、柔軟に変化するもの、ルールや約束などと捉えています。</p> |
| <p> 5歳児 3期 p.80</p> <p>新しい遊びや活動に進んで取り組もうとしたり、自分たちでルールをつくったりして、意欲的に遊びや生活を進める。(判断と行動)</p> <p>運動遊びに興味を持ち、自分なりのあそびで向かって繰り返し挑戦し、意欲を持って取り組む。(判断と行動)</p> <p>秋の自然に触れて遊ぶ中で自然の変化に気づき、好奇心や探究心を持って積極的に自然にかかわる。</p> <p>同じ目的を持った友達同士で集まり進ぼうとする傾向が強まり、仲間意識を持つようになる。(結い)</p> <p>友達と互いの考えを伝え合う中で、相手の考えを受け入れたり、自分の気持ちに折り合いを付けたりして遊ぶ。(表現と反応)</p> <p>自分の気持ちに折り合いを付けたりして遊ぶ。(表現と反応)</p> <p style="text-align: center;">協同性が反映 <事例 p.190～p.192> 「トイやパイプを使ったコース遊び」</p> | <p>・5歳児3期をご覧ください。</p> <p>・「めざす子どもの姿」では、「新しい遊びや活動に進んで取り組もうとしたり、自分たちでルールをつくったりして、意欲的に遊びや生活を進める。」「同じ目的を持った友達同士で集まり遊ぼうとする傾向が強まり、仲間意識を持つようになる。」「友達と互いの考えを伝え合う中で、相手の考えを受け入れたり、自分の気持ちに折り合いを付けたりして遊ぶ。」と協同性が反映されています。冊子の190ページの実践事例「トイやパイプを使ったコース遊び」をご参照ください。</p> |
| <p>★ 小学校との接続・連携 p.75</p> <p>視点 ア 生活における自律や集団を意識した行動に関すること イ 自然現象・文化事象・社会事象的な面 ウ 自然現象・文化事象・社会事象的な面 エ 地域・身近な人とかかわりに関すること オ 状況に応じた言語の使用や対話に関すること</p> <p>例 5歳児 5期 生活における自律や集団を意識して、遊びや生活を進める。ア 生活における自律や集団を意識して、遊びや生活を進める。イ 生活における自律や集団を意識して、遊びや生活を進める。ウ 生活における自律や集団を意識して、遊びや生活を進める。エ 生活における自律や集団を意識して、遊びや生活を進める。オ</p> | <p>・「小学校との接続・連携」について、5歳児では、「接続」「連携」について分けて記載しています。「接続」では、日々の遊びや生活の中で就学以降に向けて必要な経験を記載しています。</p> <p>・学習指導要領と対応して表記しており、各期の内容と重なる部分もあります。次の5つの視点でとらえて記載しています。</p> <p>・「ア. 生活における自律や集団を意識した行動に関すること」「イ. 数量・図形・文字への関心や、簡単な使用や操作に関すること」「ウ. 自然現象・文化事象・社会事象的な面」「エ. 地域・身近な人とかかわりに関すること」「オ. 状況に応じた言語の使用や対話に関すること」です。</p> <p>・例えば、5歳児5期をご覧ください。</p> <p>・「友達同士約束やルールを確認し合って遊びや生活を進める。」→ これはアの視点です。</p> <p>・「ものの性質や形、数量、文字などへの関心が高まり、積極的に遊びや生活に取り入れる。」→ これは、イとウの視点です。</p> <p>・「身近な人やお世話になった人に、感謝の気持ちを持つ。」→ これはエの視点です。</p> <p>・「言葉や動きなど複数の表現を組み合わせ、まとまったお話遊びを友達と協同してつくる。」→ これはオの視点となります。</p> |

〔1〕プレゼン資料作成に際しての要点

- ①「養護」を大切にした実践的な保育の取組や解説について学んだ。
- ②3歳～5歳幼児期のカリキュラム策定過程を振り返り整理したことによる、実践や発達の見方の再確認
- ③自分の中で十分に理解し“どれから伝えるか、どのように伝えるのか”等、“伝えたいことをどのようにまとめ・構成するか”等について考えることができた。
- ④指導や具体的なアドバイスによる効果的なシートの作成を行うことができた。
- ⑤他のグループと一緒にアドバイスを聞くことによる、様々な角度からの捉えや作成手順・方法を学んだ。
- ⑥プレゼンテーションを実際に作成し伝えたい視点を整理し表現することによる、カリキュラム自体の理解を行うことができた。
- ⑦意図を明確に伝えるための言葉の選び方やプレゼンの基礎について学んだ。
- ⑧言葉や画面で、簡潔にまとめ伝える技術について学んだ。
- ⑨解説ポイントの見付け方や作成の仕方について学んだ。
- ⑩実践者と受講者とのプロセス・願いの違いの理解及び知見の広がりを持てた。

〔2〕参加して得られたこと

- ①グループでの話し合いやスーパーバイザーに相談しながら進める方法は、安心できる。
- ②自身の能力や技術を振り返り、自覚できた。
- ③資料作成をする中での、内容や担当制保育についての理解ができた。
- ④3歳から5歳児の教育、長時間保育、特色ある活動についての具体的な理解ができた。
- ⑤作成した資料が各園で活用されることや作成過程に参加できたことが、次への意欲となる。
- ⑥1グループ（4～5人）で話し合うことで、アドバイザー講習経験やスキルに関係なく、より確かな実践力と指導の手立てについて、探索し確認することができた。また、スーパーバイザーが参加し、適時、話し合いの視点などについて助言を受けられたことは、受講者が見通しを持ち、進めることにつながり効果的であった。

〔3〕解説やプレゼン資料作成にあたり意識した点

- ①カリキュラムでの聞き手に理解してもらえるような視点やポイントについて。
- ②カリキュラム策定過程での工夫した点や課題点等の明確化について。
- ③思いや考えが伝わるような表記や伝え方について。
- ④カリキュラムを策定過程での迷いや、読んでほしい視点、各年齢の特徴的な姿を抽出について。
- ⑤カリキュラムの内容の再現について。
- ⑥わかりやすい言葉や画像での表現、正確な内容の伝え方の工夫について。
- ⑦明日の実践に生かせる内容について。
- ⑧初めて聞く方にも分かり易い、図や表等を用いた視覚的な表記について。
- ⑨どんなキャリアや年齢の人にも分かり易い伝え方やインパクトのある表現について。
- ⑩参観者の視点や感じ方や見てほしい意図等“どこを強調し伝えるか”、そのための表記の仕方について。
- ⑪プレゼンテーションの作成の手順について。

〔4〕解説を実施した際に意識した点や工夫した点

- ①初めて奈良市立こども園カリキュラムを手にした方にも、全体像として理解してもらえるような説明の仕方を考案した。
- ②自園や他園では、ポイントを絞ったわかりやすく、具体的な説明を行った。

- ③奈良市立こども園カリキュラム研究大会』では、報告分を読むだけにならないようにカリキュラム策定時の過程を確認し、自分なりに内容を理解できるように努力を行った。
- ④『奈良市立こども園カリキュラム研究大会』での課題を基に、後日、他園での説明は質問事項を組み、込み改善を行った。

〔5〕技能の習得

- ①よりわかりやすく実践事例と照らし合わせた発表の仕方等、聞く側にわかりやすい視点での文字や写真の入れ方、話し方、間の取り方等がある。
- ②自園、他園での説明は、参加者がある程度内容を理解している環境であり、趣旨やコンセプトについて一定の理解が得られた。その日の子供の姿と照らし合わせると、経験年数の少ない実践者にもより伝わり易い。
- ③カリキュラムの理解を深めることで、実践と照らし合わせながらポイントを絞り伝えることができる。

〔6〕その他

- ①スライドを使用した説明は視覚的に訴えることができ話しやすかった。
- ②自分が作成したカリキュラムのところは、深くかかわっていたので伝えやすい。
- ③見直すことで改めて知ることができ、自分自身の学びとなった。
- ④『奈良市立こども園カリキュラム研究大会』で、他府県から来られた方よりわかりやすいという意見をいただいたことが励みになった。
- ⑤自園以外の実践者の前でプレゼンテーションを使用し解説することは初めてで、少し手間取った。
- ⑥自分の言葉で伝えたかったが、覚えるまではできず、説明文を見ながら行った。パワーポイントを動かしながらの話は難しい。
- ⑦自園での研修ではカリキュラムを使い、“もっと知りたい、理解していきたい”とみんなが高め合える場になった。
- ⑧解説の機会を重ねるごとに理解が深まった。バンビーノ・プランについての解説を継続して行っていくことが、教育・保育の質を高め維持していくには大切なことであり、機会があれば続けて行っていきたい。

成 果

◇受講者の振り返りにみる学び

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|--|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | <ul style="list-style-type: none"> ・養護を大切に実践の大切にする。 ・発達の見方を再確認する。 ・カリキュラムの理解促進の必要性について自覚する。 ・各年齢の発達についての内容や担当制保育について理解する。 | ◎ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・伝えたいことのまとめ方や構成の仕方を知る。 ・パワーポイントを使った解説の作成の手順や方法を知る。 ・意図を明確に伝えるための言葉の選び方やプレゼンの基礎について理解する。 ・伝えたいことについて、ポイントの精選の仕方を知る。 ・説明する側と聞く側、双方のプロセス・願いの違いを理解することについて、その必要性を実感する。 ・簡潔にまとめ、伝えることの大切さについて、再確認する。 | ◎ |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・効果的なシートの作成を考える。 ・数名のグループでの話合うことで、様々な角度から捉え取り組むことができる。 ・すぐに質問できるスーパーバイザーの存在は、安心感につながる。 | ○ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | _____ | |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・自身の力不足、資質や能力のなさを痛感し、作成作業が長時間化する。 | |

課 題

| 現 行 | 改善点 |
|---|---|
| ○ 講座を受講後、グループで話し合い、カリキュラムに対する読み解きと、解説に使用するパワーポイントを作成する。 | ○ 短時間での読み解きとなったので、資料を作成し、話し合う時間を十分確保する。 |

(3) 実践の指導：実践者・実践園への指導・助言

| | |
|----|---|
| 講座 | 講座5 実践の指導①：実践者・実践園への指導・助言 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践に関して、実践者・実践園に対する指導及び助言の技術を向上させる。 ・実践者自身が実践への見方や考え方を自覚し課題を明確化させることで、改善への糸口を得るためには、幼児教育アドバイザーはいかに指導・助言を行うべきか、根拠の把握と伝える技術の点から考え、実行できるようにする。 ・指導の方法や表現の仕方等について工夫を施し、各年齢の保障する育ちやカリキュラムのねらい、子供の姿、内容、援助、環境構成について、実践に即した指導や助言ができるようにする。 |
| 種別 | 講義・ワークショップ |
| 実施 | 平成27年8月27日(木) |
| 内容 | <p>以下の内容について講義を受けた後、ワークショップにおいて指導・助言の実際を経験する。</p> <p>1. 実践上の課題に応じて指導・助言する際の要点</p> <p>指導計画の作成から実施、評価に至るまで、下記の諸点を踏まえて実態に応じて指導・助言を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①実践上の課題について、実践者個人の次元と学年や園の次元の双方を勘案している。 ②実践者の熟達を見極め、短期的、長期的な課題を把握している。 ③実践者の作成する指導計画について、“年齢や期、実際の子供の状態を反映しているか” また、各項目について、“適切かつ簡潔に記述しているか” 等について把握している。 ④実践において“指導計画と整合しているか” “実際の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が行われているか” 等について把握している。 ⑤保育の記録と評価・子供の活動・実践者自身の援助・環境構成の在り方について、“指導計画と対応しているか” “具体的事実と照らしてなされているか” “十分な省察が行われているか” “次への改善の糸口を見出しているか” 等について把握している。 <p>2. 指導・助言に向けて実践を把握する =指導・助言の根拠</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 実践の事実を捉える <ul style="list-style-type: none"> ・時間の経過に沿う。 ・活動の流れ、子供の様子、環境構成、実践者の援助、等 ・誰にとっての事実であるか、把握する：子供なのか、実践者なのか、助言者自身なのか (2) 評価する（事実の把握と並行して） <ul style="list-style-type: none"> a) 円滑ー停滞：活動の流れについて b) 工夫：子供の工夫、実践者の工夫 c) 課題：子供の課題、実践者の課題（環境構成や援助等） d) 実践者の意図を推測する (3) 別の対応の選択肢や解釈を考える <ul style="list-style-type: none"> ・自分ならどうするか。それは、なぜか。 ・別の対応や解釈はあるか。 ・他に必要な対応はあるか。 <p>3. 指導・助言の内容をまとめる =伝える技術</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 内容を焦点化する <ul style="list-style-type: none"> ・全てを言い切ろうとはしない、今、必要な内容や意味のある内容を選択する。 ・内容を絞る、あるいは統一された課題やテーマを持たせる。 (2) 順序立てて、話を組み立てる <ul style="list-style-type: none"> ・思いつくままには提示しない。根拠や理由を示しながら、丁寧に論じる。 |

方法

上記の内容について講義（30分）を受けた後、次のようにワークショップを行う。

1. ビデオ映像の視聴

素材映像は、神長美津子解説・監修『3年間の保育記録第2巻：4・5歳児編』（岩波映像、2005年作品、文部科学省特別選定）の「④育ちあい学びあう生活のなかで（5歳児）」より、5歳男児が自由遊びとしてレストランごっこに携わる約10分を用いた。次の解説が付されている。

5歳児は、幼児の生活や遊びに主体的に取り組もうとする。実践者は、こうした姿を受け止めながら保育を展開し、幼児一人一人が充実した園生活を送るようにすることが大切です。そのために実践者は、幼児たちの「自分たちの生活」を「自分たちの遊び」という主体的な気持ちを大切に受け止め、ある時には遊びの仲間の一員として幼児と共に活動する。またある時にはものや人、こととのかかわりを深めるヒントを提供するなどの様々な役割を果たし、幼児の活動が豊かなものとなるようにしていくことが必要である。
(神長美津子氏による解説)

2. 指導・助言の立案とグループ討議

ビデオ視聴後、受講者それぞれが、自分なりの指導・助言の立案を行う（10分）。その後、4名ずつのグループにおいて、各受講者が映像の実践への見立てとそれぞれの指導・助言案を報告し、どのような指導・助言が適切か、グループ討議を行った（表3）。作業は、次の観点に沿って行われた。

実践の事実を捉える

- ・活動の流れ、子供の様子、実践者の援助、環境構成の視点から、ビデオを視聴する。
- ・誰にとっての事実かを把握する。

評価する

- ・円滑、停滞、工夫、課題、実践者の意図の推測の観点より、評価する。

別の対応の選択肢や解釈を考える

- ・同じ場面での解釈の違い等。
- ・自分ならどうするか。
- ・別な対応や解釈はあるか。

指導助言の内容をまとめる

内容を焦点化する

- ・今、必要な内容や意味のある内容を選択する。
- ・内容を絞ったり、統一された課題やテーマを持たせたりする。

順序だてて、話を組み立てる

- ・何故それが必要なのかという、根拠や理由を示しながら、丁寧に論じる。

伝える技術の習得

グループ討議後、スーパーバイザーの園長職者より、下記の指導があった。

※指導・助言技能向上の具体的なポイント

- ・指導する実践者の個人の力量やキャリア、年齢に応じて、指導の内容や方法を工夫する。
- ・園のテーマや課題に合わせて、どのように実践を進めていくのか、各実践者にアドバイスする。
- ・研修の司会をしながら、他の実践者と一緒に園としての課題や幼児個人の課題を明らかにし、解決方法を探る。“ここで迷った、どこまで伝えるとよいのか、どのような手立てが必要であるのか”等現場の実践者へのかかわりや戸惑いなどを記録し、分析する。



| | |
|----|---|
| 講座 | 講座6 実践の指導②：実践者・実践園への指導・助言 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践に関して、実践者・実践園に対する指導及び助言の技術を向上させる。 ・講座5の講義とワークショップの経験を踏まえ、研究協力園（他園）の園内研修会に赴き、参観した実践を踏まえて、実践者への指導・助言を通して、実践者の課題に即した指導・助言の技術を向上させる。 ・アドバイザー講習とアドバイザー活動実習とを往還させることによって、幼児教育アドバイザーとしての専門性を高め、より確かなカリキュラム理解へとつなげる。 |
| 種別 | 実習 |
| 実施 | 平成27年9月1日（火）～12月22日（火） |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・本講座では、受講者がスーパーバイザー勤務園における園内研修に参加し、実践者への指導・助言を行い、その技術を向上させる。 ・指導・助言に当たっては、次の点に留意する。 <ul style="list-style-type: none"> 1. 指導・助言の内容 <ul style="list-style-type: none"> ①実践上の課題について、実践者個人の次元と、学年や園の次元の双方を勘案している。 ②実践者の熟達を見極め、短期的長期的な課題を把握している。 ③実践者の作成する指導計画について、“年齢や期、実際の子供の状態を反映しているか” また、“各項目について、適切かつ簡潔に記述しているか” 等について把握している。 ④実践において、“指導計画と整合しているか” “実際の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が行われているか” 等について把握している。 ⑤実践の記録と評価についての活動と、実践者自身の援助と、環境構成の在り方について、“指導計画と対応しているか” “具体的事実と照らしてなされているか” “十分な省察が行われているか” “次への改善の糸口を見出しているか” 等について把握している。 2. 指導・助言の根拠 <ul style="list-style-type: none"> ①実践の事実を捉える ②評価する（事実の把握と並行して） ③別の対応の選択肢や解釈を考える 3. 内容伝達の技術 <ul style="list-style-type: none"> ①内容を焦点化する ②順序立てて、話を組立てる ・スーパーバイザーは、受講者の活動の見通しをもって側で見守り、受講者に適切かつ具体的に助言や指導を行う。 ・園内研修は、日々の実践現場以外での大切な指導の場であり、少数人数での指導を実施できる場である。受講者が講義やワークショップでの学びを生かし、指導・助言の実践と、その省察を循環させ、実践指導についての「知識と技能の連動」を図る。 <p>【参考】園内研修の意義（最終的には平成23年度の文部科学省委託研究の報告書を出典とする予定）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践を相互に見合い検討することを通して、自らの課題を明確化し、よりよい方途を探る。 ・専門的知識と実践とが往還し、実践の在りようが変わることに学びの意義がある。 ・記録を基に実践を見直し、実践者同士が共有し、実践者の協働でよりよい実践の在方を探る。 ・外部の実践者や学識経験者の参加を受け、検討を通して実践を大きな視野で捉え直す。 |

| | |
|-------------------|---|
| <p>方 法</p> | <p>以下の手順にて取り組む。</p> <p>①保育実践を参観する。</p> <p>②実践者と、実習者（育成プログラム受講者）、スーパーバイザー、研究協力園の他の実践者でカンファレンスを行う。</p> <p>③カンファレンスにおいて、実習者は、実践者の課題を共有し、課題に沿って指導・助言を行う。 【講座6】</p> <p>④実習者は、『奈良市立こども園カリキュラム』について、解説する。 【講座4】</p> <p>⑤実習者は、カリキュラムの視点から本日の実践について解説し、指導・助言を行う。 【講座4、6】</p> <p>⑥実習後、担当のスーパーバイザーより、『奈良市立こども園カリキュラム』の解説や本日の実践指導についての指導を受ける。ここでは、実践者の年齢や経験の理解の違い、実践者の解説や伝わり方について等、実習者自身のキャリアに応じた指導についての具体的な指導を受ける。</p> <p>⑦実習者は、本日の実習を振り返り、次回への課題や改善点、手立ての工夫などを明確にイメージし、そこで発見した新たな課題を携えて、次の講習や実習に臨めるようにする。</p> |
|-------------------|---|

| 観 点 | 事 実 | 評 価 | 別 の 選 択 肢 や 解 釈 |
|--------------------|---|---|--|
| レストランごっこの準備 | <ul style="list-style-type: none"> 見やすくメニューを張り出す(実践者作成) 幼児が、メニューに値段を書き足す。 | <ul style="list-style-type: none"> 幼児の意欲を引き出せていた。 イメージの共有化というところで、メニューの可視化はよかった。 幼児のイキイキとした表情がよく見られた。 幼児は、ものに値段があることに関心があり、数字のみに意味があるわけではない。 5歳児なので、文字や数字を無理なく自然な形で遊びに取り入れる環境も大切である。 | <ul style="list-style-type: none"> 5歳児であれば、提案の後は、全て任せてもよいのではないかと。 可視化することで、途中から参加した幼児達も見て分かるということが大切であり、遊びの広がりを持つ。 固定されたままでメニューに書き足していたが、書きにくさはなかったのか。移動させてのコーナーなのか、固定されたコーナーなのか分からない。 |
| レストランごっこへの実践者の援助 | <ul style="list-style-type: none"> 部屋から廊下(テラス)へと遊びの場所を移す。 | <ul style="list-style-type: none"> 環境が変わることで、戸惑いが生まれ、遊びのイメージを作り直そうとする。 廊下ですること、他人の目にもつくことができる。 幼児が一人一人の思いで動いている姿が見られた。 | <ul style="list-style-type: none"> 丁寧なかわりが必要であり、遊びの広がりにつながっている。 前日に話し合っただけかどうか、知りたい。 レストランの場を広げるために移動することを、みんなで共通理解していたら、トラブルに発展していなかったのではないかと。 もう少し部屋でじっくりと遊んでからの移動でもよかったのではないかと。 どのような遊びの広がりや狭く感じ移動していったのか、幼児の話し合いがなされたのか不明である。話し合いがなされていれば、レストランへのイメージが共有されており、幼児同士の協力している姿も見られたのではないかと。 遊びの場を移す中には、実践者の広い場で多くの友達と考えを出し合っただけでレストラン遊びを展開して欲しいという意図が伺えた。 実践者の感じ方と幼児の感じ方の違いはなかったのか考える必要がある。 遊びに参加する幼児が増えたことで、遊びの場が狭くなったと推測できる。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 幼児のアイデアを認め、言葉で伝えるかわりをする。(レストランごっこのメニューに値段を書き込む) | <ul style="list-style-type: none"> メニューと値段との、1対1対応できている。 | <ul style="list-style-type: none"> 遊びの意欲につながることができたのではないかと。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 5歳児にとって、お金のやりとりは、どこまで成立するのか。 | <ul style="list-style-type: none"> 値段には、あまり意味がない。 | <ul style="list-style-type: none"> 幼児と実践者との数字の意味が違う。幼児の決めた値段に対するお金のつくりにつなげるとよい。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 遊びをどのように進めるのか。 | <ul style="list-style-type: none"> 自分なりに、友達と進めていく姿を見守り、まずは、幼児の思いに寄り添い、何を實現したいと考えているのかを見極めることが必要。 | <ul style="list-style-type: none"> 予想される保育と今日の保育の違いはどこにあるのか、子ども達の意図している方向を探り立て直したり速やかに対応していくことが必要である。 実践者の援助、環境構成で遊びの流れが変容していく。幼児の発達や様子を読み取り、実践者との意図とを絡み合わせた援助や環境構成の適切なタイミングを考えることが大切である。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> レストランごっこに必要なものを作る。 おわんを斜めに滑らせる。 | <ul style="list-style-type: none"> 自信と意欲をもって取り組めるようになる。 | <ul style="list-style-type: none"> 丁寧に拾い上げ、その姿を十分に認めることが必要であり、そのことを周りの幼児にも伝えることが大切である。 |
| トラブルへの対応 (人間関係) | <ul style="list-style-type: none"> 実践者の大切にしようと思ったものは何か。 | <ul style="list-style-type: none"> お互いの意見を伝え合う子どもの関係 一人の幼児の意見表明(子どもの自己主張) | <ul style="list-style-type: none"> 幼児が自分の思いを相手に伝えられるようにすることが大切である。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 喧嘩を止めるタイミングは、どうであったか考える。 | <ul style="list-style-type: none"> 遊びの環境、周囲の幼児の遊びの意欲等に与える影響が大きくなってしまったので、もう少し早い段階での仲立ちが必要である。 自分の思いをおもいきり出せていてよかった。 | <ul style="list-style-type: none"> 幼児が場の変化への対応が出来ていなかったのではないかと、実践者はなぜそこまで見守っていたか知りたい。 5歳児で、周りの子がかわらなかつたのには、理由があるのか考えるとういと思う。様子が気になった。 自分達で遊びを進めていけるように、幼児自身 |

| | | | | |
|-------------|--|--|---|---|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・展開が早く、先生の意図が強いように感じる。幼児のアイデアや必要なものを、その都度たりない状況で準備したほうが、幼児の興味が持続する。 ・当人達や様子を見ていた幼児の話をよく聞いているが、幼児から出るようにもう少し話し合いを続けたり、思いを引き出すことが必要である。 | <p>の言葉で話し合えるようにするとよいのではないかと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉で伝えにくい場面では、教師が仲介していきけるようにしたほうがよい。ぶつかる機会を次に活かせるようにすることも必要である。 ・トラブルを想定し悔しい気持ちをさせるように考え、仲裁に入ることや、周りを巻き込みみんなで考えることが出来る機会を持つことで、幼児が自分のこととして捉え、考えようと出来るのではないかと。 ・実践者を介して話を聞いてもらったことで、幼児は納得しているかどうか、相手の反応はどうかなどが気になる。 ・幼児の意見を反復し、どうしたらいいかと投げかけ、解決方法を探るなどの方法もある。 ・実践者が友達関係を見ながらどこまで見守るのか、答えや解決方法を提案していくタイミングを見極めることが難しいので、実践者の願いをしつかりと整理することが必要ではないかと。 | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・仲介の仕方はどうであったのかを考える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの幼児が遊びに加わるが、実際には、思いはバラバラである。 ・しばらく様子を見て、それからしっかりと幼児の話を聞いて、一つ一つ確認するという援助はよかった。 ・実践者が仲裁をしていて、周りの子は、傍観していたのはなぜか考えることが必要ではないかと。 ・落ち着かせて、友達のことを考えさせようとした言葉かけがあった。 | | |
| の気付き | カンファレンスへ | <ul style="list-style-type: none"> ・気になる点を全て上げて指導するのではなく、要点や焦点をしぼり、教師のねらいや考えを聞いたうえでこちらの意見を伝える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・より明確な理解につながる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・その年齢の発達や時期と照らし合わせながら伝えられるように、カリキュラムと対応させながら考える。 |
| な方法 | カンファレンス後 指導・助言の具体的 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践者の思いを聞きながら、「〇〇をねらいとしていたのか」「普段の幼児の姿を見てこういう対応をした」などの、助言を入れる。 ・幼児の動きに視点をあてて話し合ったり、実践の事実を捉える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・部分的に保育を見ているので、それまでの経過や実践者の意図等を把握しにくい為、実践者のねらいや意図を十分に聞きながら進めることが大切である。 ・ねらいをしっかりと読み取ることが大切である。実践者の思いを色々聞き、「私はこう思ったんだけど」「私だったらこうするかなあ」など、助言することが大切である。 | |
| 言葉かけ | | <ul style="list-style-type: none"> ・「ピーマン載ってるの、先生大好き」という言葉を聞いて、折り紙を取りに行く。「食べやすい大きさがいいな」「おかわりを食べたいな」と言う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・意欲をかきたてられたり、次へとつながっていた。 ・幼児の姿をよく捉えた言葉かけをしたり、アイデアを出していた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・5歳児という年齢で、実践者が幼児わからなくても発展していくのではないかと。 ・今後、どうしていきたいかと提案してみることもよいのではないかと。 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・「いいね」などの言葉かけ。 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが気付けるように言葉かけする ・必要な時に心に響く言葉かけをする。 ・同調する言葉が素敵だった。 | |
| 変化 | 遊び見つけ （気持ちや姿の | <ul style="list-style-type: none"> ・ハサミでトマトを切り、ピザやメニュー、お金を作り、金額を書く。 ・ピザの形をカットしたことで、形が変わる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分から進め、次の日にまたしたいと登園することができた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・幼児のしたい気持ちやイキイキと楽しそうな姿となっている。 ・遊びに必要なものを用意できるように声をかけ、共に準備できるようにする。 |
| レストラン遊びへの展開 | | <ul style="list-style-type: none"> ・メニューの中からお客さんの注文を受け、画用紙や色紙などを使って細かな作業を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの継続を楽しみこして登園する姿が見られた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・遊びを継続していく中で、お店に必要なものを考える時間、必要なものに幼児が気付くようなヒントを会話の中に入れることが必要である。 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・メニューを書いて貼ったり、値段を自分で決める。 | <ul style="list-style-type: none"> ・5歳児としての姿が出ており、楽しそうにピザを作っていた。 ・素敵なレストランを作りたいという目標を共有しながら、幼児一人ひとりが自分を発揮して遊ぶことができた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ピザをハサミで見ることを楽しんでいて、作った側の気持ちもあるので、切る道具を作ってはどうか考えることもあるとよい。 |
| 振り返り・話し合い | | <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの振り返りと次につなぐ保育の話し合いをする。 ・子どもの思いや考え、遊びへのイメージが作っていきけるようにする。 ・幼児同士で大きな構成や方向性の話し合いをする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・幼児が主体となり遊びを展開していきけるようにすることが大切。 | <ul style="list-style-type: none"> ・遊びのイメージや思いに共感し考えるきっかけを投げかけたり、時宜を得て必要な用具を提供していくことが必要である。 |

| | | | |
|------------------|--|---|--|
| 遊びの場所 展開できるもの | <ul style="list-style-type: none"> ・レストランごっこや工夫できるような素材があったかどうか考える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ピザや端末機など、遊びに使っている素材の種類を増やして、選択肢を広げてもよい。 ・ピザの皿やレストランの雰囲気にするものなどが必要である。 | <ul style="list-style-type: none"> ・幼児が次に必要としているものや自分で用意したり、探したりする環境になっていたかどうか考える。 ・積み木以外のものでもよかったのではないかな。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・広い場所に、椅子やテーブルを出す。 | <ul style="list-style-type: none"> ・作ったものをお客さんに売って食べてもらうという活動に移行できた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・木の積み木は必要かな。5歳児なら、工夫してレストランに見立てることが出来るのではないかな。子ども同士で、もっと話し合いをしてレストランの環境を整えていけるのではないかな。 ・周りの幼児にもして欲しい、かかわって遊ぶようになって欲しいという意図があると思う。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・視覚的な環境の設置について探る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・発達に応じて、自分で出来ることと実践者がさりげなくおいておくことを踏まえ、考える必要がある。 | |

〔1〕「実践の指導」に求められる能力や技術

- ①子供の遊びから「どのような経験をしているのか」を読み解き、実践を組み立て実践していく力。
- ②ポイントを絞って参加者に投げかける話合うテクニック。
- ③意図をしっかりとった明日の環境構成や、タイミングの良い援助の仕方。
- ④様々な方法や見方、幅広い考え方。
- ⑤様々な視点から見た実践の捉え方。
- ⑥短時間で「何を議論の柱にしてカンファレンスを進めていくか」という課題を見付け出す力。
- ⑦ポイントを具体的に知らせる等、参加者の意欲を高める手法。
- ⑧順序を追う見方や様々な評価の仕方、焦点化した簡潔な伝え方。
- ⑨順序立てた話の組立て方。
- ⑩ねらいや意図等を把握する力。
- ⑪質疑応答しながら指導・助言する仕方や子供の育ちの姿を把握する力。
- ⑫自分の考えをしっかりと持つ。
- ⑬実践者の年齢、経験年数、熟知度を測り進行する力。

〔2〕捉えの深化と拡張

- ①自分の見方だけでなく他の実践者の意見を聞くことで子供の見方が広がる。
- ②必要性和それを定めることで、より議論の展開や参加者の内容の捉えが明確になる。
- ③カンファレンスのポイントを絞りあらかじめ参加者に具体的に伝えておくことが、効果的である。
- ④グループ協議の形をとったので自分とは違う視点での話を聞くことができ、視野が広がった。
- ⑤課題が定まると話合いの方向性が見え、参加者の意見がより明らかになる。
- ⑥遊びや活動の姿の捉えにはいろいろな視点があり、自分の実践の経験だけでは気付かない所に気付くことができる。
- ⑦他の研究部員の意見を聞き、いろいろな見方に触れることで捉えが広がる。
- ⑧学んだことは自園で実践し、意見をもらうことが自己向上につながる。
- ⑨ビデオを用いることは振り返りに効果的であり、自ら提案・実践をする等実践者の資質向上につなげていける。

〔3〕課題

- ①カンファレンスのロールプレイでは、自分が協議をまとめていく具体的なイメージや絞るべきポイントを見出せず、結論に至ることができなかつた。前もってある程度視点を決め協議に臨むべきだった。
- ②“一つの遊びを進める”“興味関心を持っている遊びを広げる”という大切さを再認識した。また、指導・助言の大変さ、難しさを痛感した。
- ③子供の姿を読むのは難しいし、時間も限られているので焦ってしまった。
- ④講義と実践を交えて進めるとわかりやすいが、実際に実習すると難しさを感じる所があった。
- ⑤課題を読み取り焦点を絞ったり、参加者の「気付き」を引出したりする力量不足等、自分への課題が深まった。



◇受講者の振り返りにみる学び

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|--|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | <ul style="list-style-type: none"> ・子供の遊びからの読解きや、実践を組立てる力が求められる。 ・意図をしっかりと持って、明日の実践の環境構成をすることやタイミングの良い援助をしていくことが必要である。 ・自分の見方だけでなく他の実践者の意見を聞くことで子供の見方が広がる。 | ◎ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践を様々な視点から見えていくことが重要である。 ・短時間で「何を議論の柱に、カンファレンスを進めていくか」という課題を見付け出す必要性、それを定めることでより議論の展開や参加者の内容の捉えが明確になる。 ・順序を追い見えていくこと、評価の仕方にも、いくつかの種類があること、それらを焦点化して簡潔に伝える、順序立てて話を組立てるなどの進め方への工夫が必要である。 ・ポイントを絞って参加者に具体的に投げかけることが重要であり、意欲が高まる。 ・質疑応答しながら指導・助言を進める。 | ◎ |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・カンファレンスの進行、司会者は、自分の考えをしっかりと持つこと、集まって下さった実践者の年齢、経験年数、熟知度を測り進めていくことが必要である。 ・様々な方法や見方、考え方の幅を広げる、実践後の意見交換が出来ることが必要である。 <p>→カンファレンスの重要性の確認</p> | ○ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | _____ | |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ視聴という共通の事例を基に話合ったことで、自分以外の視点や捉え方、気付かなかった発達の姿などを知ることができた。自分の考えを言葉にして他の受講者に伝えたことで、自身の実践の捉え方の確認や振り返り、共有及び確信を持つことが出来た。この経験は、実践での指導・伝達力につなげることができた。 | |

課題

| 現 行 | 改 善 後 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 特別選定版のビデオを使用し研修を行う。 ○ スーパーバイザー園での実習後に指導を行い、スーパーバイズの振り返り記録を作成する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 1期～5期の各期における公開保育研修等で撮影した実践の様子を使用し研修する。また、奈良市立こども園カリキュラムに沿った援助や環境構成等について省察出来るようにし、各発達の時期における指導助言の在り方についてより深く研修する。 ○ 受講者勤務園の園長と担当スーパーバイザーが互いに、受講者の園内と他園での指導・助言の様子を共有し、より効果的な受講者への指導について探る。 |

(4) 実践の指導：カンファレンスの進行と統括

| | |
|----|---|
| 講座 | 講座7 実践の指導③：カンファレンスの進行と統括 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践研修におけるカンファレンスの進行と統括に関して、知識を習得し、技能を向上させる。 ・カンファレンスに関して、目的、内容、組織化、全体での共有の仕方について理解を深める。 ・上記の理解に基づき、参加者の関心や課題を生かした進行と統括の在り方について、ワークショップとして、模擬のカンファレンスを行い、カンファレンスの進行と統括に必要な技能を高める。 |
| 種別 | 講義・ワークショップ |
| 実施 | 平成27年8月27日（木） 9:00-10:30 |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・下記の内容について、講義を受けた後、模擬のカンファレンスを行う。 ・模擬のカンファレンスについて、スーパーバイザーから指導と助言を受ける。 <p>1. カンファレンスの目的と内容</p> <p>(1) 目的 下記の内容に関して、実践者と参観者の交流を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①自らの実践や見方・考え方の癖を自覚し、実践の課題を可視化する。 ②実践の改善の可能性を探る。 <p>(2) 内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ①実践における「問題」の明確化：問題は何か。誰にとっての問題化 ②多方面からの情報の収集と検討：実践者と参観者立場から、事実や対案を寄せる ③改善の方向性を得る：今度はこうしてみよう、こちらの方がより望ましい等 ④検討内容の敷衍化可能性の検討：別の課題や別の検討への適用可能性等 <p>2. カンファレンスの組織化</p> <p>(1) 話題の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①問題の定式化 今日の実践で何が問題となるのか、見極める ②問題の焦点化 問題の絞込みと優先順位付け ③問題相互の関連性 ④結論の見通し <p>(2) 時間の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①【序盤】問題の共有 ②【中盤①】実践者と参観者との認識の異同 ③【中盤②】対案の可能性の検討 ④【後盤】敷衍化 <p>(3) 参加者の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①メンバーの組合せ ②人数 ③配置 <p>(4) 報告の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①問題はどう検討されたか【議論】 ②検討したことの意味【議論の意義】 ③全体で共有する価値のあること【拡張と敷衍】 |

| | |
|-------------------|--|
| | <p>3. 進行・統括における課題</p> <p>(1) 自分なりの見方や考えを自覚する</p> <p>(2) 議論に対立軸を作る</p> <p>(3) 生産的な議論を作る</p> |
| <p>方 法</p> | <p>◇模擬カンファレンス</p> <p>奈良市の合同研修会で用いたカンファレンス・ボードを使用し、模擬カンファレンスを行う。ボードには、付箋（子供の姿・環境構成・援助の視点で記載したもの）と、その日の遊びの写真を掲示する。この模擬体験を通して、カンファレンスの進行や統括の技能を高め、カンファレンスの意義についての理解を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 実際の合同研修で使用した、カンファレンス用のボードを用意する。ボードに遊びの写真数点と、研修時に参観者がコメントを記述した付箋紙が貼られている。ボードは、3歳児1セット、4歳児2セット、5歳児2セットの合計4セット用意している。 2) 受講者は4名ずつのグループに分かれる。グループ毎に1ボードあたり20分のカンファレンスを行う。年齢の異なる三つのボードを順にめぐる。 3) 講義で示されたカンファレンスの内容や組織化、進め方に留意しながら、模擬カンファレンスを実施する。交替でカンファレンスのリーダー（進行・統括）を担当し、発達に沿った遊びの場面の精選や進行の仕方等について、相互に気付きを出合い、議論する。 4) スーパーバイザーは、各ボードに配置され、カンファレンスリーダーの進行や参加者の関心の捉え方、年齢に応じた遊びの捉え方、参加者間の共有の仕方等について、具体的に指導・助言を行う。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>話題の組織化</p> </div> <div style="font-size: 2em;">➔</div> <div style="text-align: center;">  <p>問題の絞込みと 焦点化</p> </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;">  <p>話題の展開・問題の共有</p> </div> |

| | アドバイザーがカンファレンスをした際の、スーパーバイザーの気付きや指導 | 各年齢にたいするアドバイザー自身の気付き | 話し合いの中で出てきた今後の課題 |
|-----|---|--|---|
| 3歳児 | <p>①何についてのカンファレンスかを意識することが必要である。</p> <p>②3歳児は、特に、何について話をするかを見極め進める必要があるため、付箋の内容をよく読んでから、カンファレンスを進めるとよい。</p> <p>③「自園ではこうだけど、なぜこうなったのか」「この年齢ではこの環境でよかったのだろうか」など、自らの経験を話題にすることで、お互いに話のポイントがわかりやすくなり、より理解できていた。</p> <p>④カンファレンスのテーマになりそうなものを分解してから始めようとする姿が見られたので、「どのようにわけているのか」を尋ねることで、カンファレンスをする側も自覚することができた。</p> <p>⑤「自ら遊びたいことに没頭できる環境」「異年齢からの影響を受けた上での遊びの環境」と様々な観点から見たカンファレンスを行おうとしていた。</p> | <p>①付箋にとらわれず、実際の写真を見てカンファレンスをしたことで、3歳児の水鉄砲の場面で対案が出され、話し合いをすることが出来た。(的は必要であるかVS遠くまで飛ばすことに着目する。)</p> <p>②3歳児は、模倣によっていろいろと為し得てしまうので、4・5歳児での伸びしろを想定して実践に当たるべきではない。</p> <p>③3歳の年齢での色水遊びでは、簡単に色が出るクレープ紙を用いるよりも、単純に色水を作って遊ぶだけでもよかったのではない。</p> | <p>〈カンファレンスについて(視点やポイントの絞り方)〉</p> <p>①実践者が必ずカンファレンスに加わり、実践者の思いや環境をどの思いで構成したのかを聞きだす。</p> <p>②公開保育の参観前に、見て欲しいところや課題を示しておくことで、カンファレンスのポイントを絞ることができ、話し合いが深まりやすい。</p> <p>③どの付箋の内容から始まるのかを考えると、進行役は、自ら考えを持った上で、グループの実践者の興味や知りたいことは何なのかを聞き取ってから、カンファレンスをする。</p> <p>④ポストイットの色があることで、色にとらわれてしまうことがある。視点を変えて話し合いをする。</p> <p>⑤意見をまとめるときに、参加者の意見をまとめることが多かったが、あえて進行役が議論の方向性を明確にするために、考えや意見をだすことが大切である。</p> <p>⑥カンファレンスや普段のミーティングをする中で、参加者が重点に取り組むべき点などに気付けるようにする。</p> <p>⑦参加者の経験年数や園の実態、課題の重要性などに応じて話し合いを組み立てていく。</p> <p>⑧まずは、幼児の姿を分析して、明らかにすることで、援助や環境構成の意図が明確になり、その場の援助や環境構成について深く考えていける。</p> <p>⑨問題を明確にし、検討するために話題の組織化、問題の焦点化・時間の組織化、参加者の組織化が必要である。</p> <p>〈気づいたこと〉</p> <p>①話し合いを深めるためには、時間の確保の他にも、早い段階での課題の選択が必要であり、問題課題を精選していく力が必要である。</p> <p>②実践に返し活かしていけるような話し合いにすることが必要である。</p> <p>③実践者の援助の思いや、なぜ本日の実践でそうされたのかという疑問や、自分ならどうしただろうなど、見えない部分についての話し合いをすることも大切である。そのためには、担任がカンファレンスに参加していることも必要である。</p> |
| 4歳児 | <p>①進行するにあたり、参加者の意見をうまく導きだせているか、自分の方向性を見極めないと、話がぶれてしまう。</p> <p>②この時期の幼児の姿や発達を押さえたり、話し合うポイントを絞ったキーワードを見つけることで、参加者も意見が言いやすい。</p> <p>③実践を見ていたものがないと、実践者の意図やここまでいたる過程が見えず、話し合いのポイントが絞りにくい。</p> <p>④短時間で付箋の仕分けやカンファレンスで視点をあてる内容を見極め、絞り込むという力を身につけることが必要である。</p> <p>⑤話し合いを進める中で、視点がはっきりとし、話し合いが深まるなど、カンファレンスのコツをつかめている姿もあった。しかし、参加者の言葉を瞬時に取り上げ、意見を求めることが出来ていればもっと話し合いが行われたであろうなど、瞬時の判断の難しさがあった。</p> <p>⑥実践者の意図とすると、幼児の経験していることや学び、この時期の姿と環境構成はどうであったのか、自分なら環境構成や援助はどのようにするかについて論議された。</p> | <p>①幼児の主體的な遊びの中に、実践者がねらいとしていることをどのように盛り込んでいくのか課題であると感じた。</p> | <p>①話し合いを深めるためには、時間の確保の他にも、早い段階での課題の選択が必要であり、問題課題を精選していく力が必要である。</p> <p>②実践に返し活かしていけるような話し合いにすることが必要である。</p> <p>③実践者の援助の思いや、なぜ本日の実践でそうされたのかという疑問や、自分ならどうしただろうなど、見えない部分についての話し合いをすることも大切である。そのためには、担任がカンファレンスに参加していることも必要である。</p> |
| 5歳児 | <p>①実際の姿を知っている参観者と実践者がいたので、問題を絞り込みながら、5歳児の発達をふまえて、環境がどうであったか話し合えた。</p> <p>②カンファレンスの進行になるものは、公開保育を参観している方が、目の付け所や話し合いの進み具合、内容の深まり方が違う。</p> <p>③短時間で結論・総括まで進めるには、進行役の力量が必要である。問題となる点を見極め、本日の話し合いの要点をどこに置くかを決定し、カンファレンスを進めることはかなり難しい。</p> <p>④付箋紙は色分けされているので、焦点を当てて書きやすい。しかし、色にとらわれることで、援助・環境構成・幼児の姿以外のことが見失われてしまう可能性がある。</p> | <p>①5歳の2期の時期の遊びの後の振り返りの大切さを感じた。次の遊びへの意欲につなげることや、持ち方、時間の方向性などについて学ぶことができた。</p> | <p>④より多くの付箋を取り上げ話題にすることにとらわれず、焦点を絞り精選して話し合いを組立てていくことが、深く話し合いをすることにつながる。また、対案が出て比較することで、様々な考え方や物の見方や感じ方があることに気付いていく。</p> <p>⑤参加者が付箋紙に記入するときに、「年齢に応じた発達を捉え記入する」ということを意識しながら記入すると、話し合いがスムーズに進む。</p> <p>⑥参加者からいろいろ出された幼児の遊びのどの部分に着目するかによって、環境構成が変わってくるので、話し合いの視点も変わってくる。</p> <p>⑦参加者の意見や付箋の中のどんな些細な事からも課題を読み取り、話し合いにつなげていく力量が必要である。</p> |

〔1〕進行に当たっての着眼点

- ①子供の姿、実践者の援助、環境構成の3つの視点を、「遊び」と「全体に関すること」に分類し、課題や問題提起、疑問等が多く書かれている部分を取上げる。
- ②子供の姿と照らし合わせながら、援助がどのような子供の姿につながったのかを結びつけ進めた。
- ③育ちの姿に視点を当てる。
- ④5歳児ならではの、試したり挑戦したりできるための「実践者の援助と環境構成」について、またそのことによって子供の姿がどのように変わったかに焦点を当てる。
- ⑤子供の姿・実践者の援助・環境構成について、共通の内容を集め、実践を捉えていく上でより重要な視点を選ぶ。
- ⑥子供の姿に対して内面を理解した環境や援助であるかに視点を絞る。

〔2〕進行時の要点

- ①“この時期に経験させたいこと”ということについてポイントを当てて進める。
- ②今後については、意見があまり出てこなかったので、課題を提案しながら進める。
- ③この時期に大切にしたい遊びや内容について、ポイントを投げかけ話合えるようにする。
- ④色ごとに分けて整理し、共通するものに焦点を当てる。
- ⑤子どもの姿を通して考える手法として、ホワイトボードや今本日使うものを絵で知らせ進める。
- ⑥遊びの内容、実践者の支援、環境構成、遊びに対するかかわりに分けて進める。
- ⑦子供の姿、環境、援助の3つの観点から、良い所を認めることを意識する。
- ⑧環境についての意見が多かったので、答えを出すのではなく、参加者の思いを聞き、自分なりに考えられるようにする。(例：子供の待つ時間が多い、遊びのスペースが狭い、玩具が多い等)
- ⑨次につながる実践になるように話合を行う。

〔3〕進行する上で工夫が必要だと感じたこと

- ①この時期の子供の姿に実践者の意図がどう絡み合っているか、どのような具体的な援助がされたのか、環境構成は適切であったか等にポイントを絞って話合を進める。
- ②表面的な話合いで終わらないように、年齢の時期の発達を捉え、遊びこどのように反映されていたのかを話合う。事前に自分の気付きや考えをまとめ、参加者の考え(付箋紙)と対応させてカンファレンスを進める。
- ③ポイントを絞る時には、何を考えたいのか目的ありきで投げかける。また、時間的なことを踏まえて、全体を見通した組立て方が重要である。
- ④始めにしっかりと実践を見ていないと話合えない。
- ⑤たくさんのポストイットがある時は、急いですべてに触れるのではなく、精選し絞って話合うことで深く掘り下げて話合える。
- ⑥共感し合える内容だと話が膨らんでいくだけでなく、対案が出て比較することで様々な考え方や、ものの見方や感じ方があることに気付ける。
- ⑦他の実践者の意見を聞く中で、意見を出せるような工夫が必要である。
- ⑧時間や構成メンバーにより、進め方・ポイントを変えていく必要がある。
- ⑨テーマを定めることで、参加者の意見・まとめ等が進めやすくなり、議論も深まる。
- ⑩意見や感想を述べることで終わることなく、“何故その様に感じたのか”“そこで感じたことはどの様な見取りにつながるか”等を、意見として出してもらえるような話合にする。
- ⑪話の組立て方や、わかりやすい話の仕方等、限られた時間を有効に使う工夫が必要である。

- ⑫意見を引き出しながらまとめていくことは、回を重ねることが必要である。
- ⑬付箋を整理しながら貼っていくことは、時間を整理しながら進めていけることにつながる。
- ⑭振り返り時に、話合ったことに要点を絞り、分別し可視化して書込むことが必要である。

〔4〕カンファレンスに必要なこと

- ①実際に実践を見ているほうが進めやすい。
- ②その時期の子供の発達の姿を捉え、理解していないとカンファレンスの方向性を見失ってしまう。
- ③視点を写真にあて子供の発達や時期を捉えながら見ることで、子供の姿を読み取り、援助や環境構成について少し話し合いが深められた。
- ④カンファレンスの進め方で、その日の話合った時間が充実したものになるか責任は大きい。
- ⑤知らない実践者の中での指導は、自園で行う時より緊張し伝えづらいが、良い学びとなる。
- ⑥保育を振り返りテーマを定めることで、今後の保育につなげる議論ができた。
- ⑦要点を引出しながらまとめていくことは難しく、自園と他園では違う。

〔5〕その他、課題など

- ①付箋に記入されている内容のどこにポイントをあててまとめるか。
- ②限られた時間の中でいかに焦点化していくか。
- ③時間や内容をプログラム化しておき、計画を持ち進める。
- ④話し合いの中で、実践の良い点を伝える。
- ⑤カンファレンスの組立てや時間配分等、落ち着いて進める。
- ⑥ポイントを絞る目的や公開保育の目的等について話す。
- ⑦自分の考えでまとめてしまうので、参加者から意見を引出せるようにする。
- ⑧経験年数や園の実態、課題の重要性等、その時の参加者によって話合う内容を考える。



◇受講者による振り返りによる学び

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|---------------------------|---|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの姿、実践者の援助、環境構成の3つの視点を「遊び」と「全体に関すること」に分類し、課題や問題提起、疑問等が多く書かれている部分を取り上げ、カンファレンスを行う。 ・テーマに分けて整理することを意識し、共通する部分に焦点を当てる。 ・「この時期に経験させたいこと」ということにポイントを当てて進める。 ・遊びの内容、実践者の支援、環境構成、遊びに対するかかわりに分け進める。 | ◎ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・ポイントを絞って話し合いを進める。 ・表面的な話し合いで終わらないように、年齢の時期の発達を捉え、遊びにどのように反映されていたのかを話合う。 ・事前に自分の気づきや考えをまとめ、参加者の考えと対応させる。 ・その時期の子供の発達の姿を捉え、理解について考える。 ・保育を振り返り、テーマを定める。 ・実践の中での良い点を伝える。 | ◎ |

| | | |
|---------------------------|---|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・時間や構成メンバーにより、進め方・ポイントは変えていく。 ・テーマを定めることで、参加者の意見・まとめが進めやすく議論が深まる。 ・参加者から意見を引出せるようにする。 ・参加者によって話合う内容を考えていく。 ・知らない実践者と自園の実践者とは、伝えやすさが違うことを意識する。 | |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画運営する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・ポイントを絞る目的や公開保育について詳しく話す必要について考える。 ・ポストイットの中から、精選して絞って話合う。 ・意見を出せるような工夫をする。 ・時間的なことを踏まえて、全体を見通した組立て方が重要であることを認識し進める。 ・振り返った時の為に、カンファレンスで話合ったことの要点を絞り分別し可視化して書き込むことが必要である。 | ◎ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | _____ | |

課題

| 現 行 | 改善点 |
|--|--|
| ○奈良市で実施している「こ幼保合同研修」での公開保育の様子を撮影した写真や、研修で実際に使用した付箋を使用してカンファレンス体験をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ①こ幼保合同研修会にて、実際に受講者がカンファレンスをしている場面をビデオで録画しておき、カンファレンスの仕方について研修する。 ②公開保育後の様子を録画し、カンファレンスに活用する。 ③受講者全員が指定されたこ幼保合同研修に参加し、同じ遊びの場面を実際に参観し、共有の上研修を行う。 |

| | |
|----|--|
| 講座 | 講座8 実践の指導④：カンファレンスの進行と統括 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践研修におけるカンファレンスの進行と統括に関して、知識を習得し、技能を向上させる。 ・講座7の講義や模擬カンファレンスの経験を基に、奈良市のこども園・幼稚園・保育所合同で行っている「こ幼保合同研修会」でカンファレンス・リーダーを体験し、参加者の関心と課題に即したカンファレンスの進行と統括についての技能を向上させる。 |
| 種別 | 実習 |
| 実施 | 平成27年9月1日（火）～平成28年2月16日（火） |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・奈良市主催の「こ幼保合同研修会」で、午前の公開保育を参観する。 ・午前の保育についての議論のポイントを探り、午後のカンファレンスで受講者間で話合えるようにする。 ・午後のカンファレンスで、参観者と共にその期の子供の姿について話合う。 ・グループ、カンファレンスで議論されたことを報告し合い、他の参観者と共有する。 |
| 方法 | <p>◇研究協力園（こ幼保合同研修会実施園）</p> <p>①奈良市立左京こども園 実施日：平成27年7月10日（金） 企画・運営：奈良市子ども未来部、奈良市立こども園会 参加者：奈良市立園に勤務する実践者 内容：3～5歳児におけるⅡ期の幼児の姿や援助・環境構成 カンファレンス：公開保育参観後記述された、参加者のコメント（付箋紙の色別に子供の様子、実践者の援助、環境構成）をもとにテーマを立て、実践者を交えて省察と討議を行う。</p> <p>②奈良市立富雄南こども園 実施日：平成28年2月16日（火） 企画・運営：幼児教育アドバイザー育成プログラム受講者 奈良市立こども園会カンファレンス担当園長・副園長 奈良市子ども未来部 参加者：奈良市内の市立園、私立幼稚園・保育所・こども園に勤務する実践者 内容：3～5歳児におけるⅤ期の幼児の姿や援助・環境構成、園の取組の報告 カンファレンス：幼児教育アドバイザー及び奈良市立こども園会のカンファレンス担当者がペアになり、“明日につなげる”をテーマに、参観や話し合いについての具体的な視点を定め、主体的に討議出来るよう進める。</p> |

振り返り

◇受講者の振り返り

2月16日の新しいカンファレンスの手法について、体験した受講者11名全員が「良い」と回答した。

〔1〕新しいカンファレンスの手法について意識した点

- ①視覚的によくわかるように、付箋を貼る際にまとまりを作り、ポイントになる言葉を入れた。
- ②保育の観点をカンファレンスで意識出来るように言葉にし、紙の上書きポイントがずれないようにした。

- ③今回は初めての形であったので、意見はどの様にまとめるのか、ということ意識したまた自分でポストイットに記入する際にも年齢の期にあっているか、明日につながるポイントについて注意した
- ④参加者の意見が引き出せるようにしながら、5期の姿や発達を考え進める。
- ⑤司会はあまり自分の意見を通さず、意見が出ないときには、参考程度の思いを伝えるようにする。幼稚園・保育所・他市の実践者がいらっしやっただので、全員が話しやすい雰囲気作りを心がけた。
- ⑥参加者全員が話したくなるような雰囲気作りや具体的な姿に焦点を当てることを心がけながら、各自の保育の癖や見方に気付き、明日の実践につながるヒントが得られるようにした。

〔2〕新しいカンファレンスの手法による具体的な効果

- ①経験にかかわらず意見が言えた。
- ②視覚的によく分かった。
- ③たくさん意見を出してもらえた。
- ④予め、色々な園の参加者にてグループ編成をしておき、色々な意見が聞けた。
- ⑤参加者全員からの意見をもらうことができた。
- ⑥また似たような場面の時は「私も同じですが」と言いながらも自主的に意見をもらうことができた。
- ⑦明日へむけて、私ならどうするだろうという、具体的な話が出来た。
- ⑧保育を見る視点が明確となり、どのことが活発な意見交換へとつながった。
- ⑨視覚化することで、全体構成が見えた。
- ⑩進行者と補助するものと複数で行うことで、進行を互いに補いながら進めることが出来る。

〔3〕その他、課題等

- ①カンファレンス後にアドバイザーの振り返り時間を持つ。
- ②色々な意見を要点を決めてまとめ、良くわかるように報告する。
- ③自身の反省として色々な意見をもらえることは良かったが、その内容をどのように一つの括りとしてつなげていくか考える。
- ④表現方法、視覚に訴え、よりわかりやすくする。
- ⑤スムーズにわかり易く進める。



◇受講者の振り返りにみる学び

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|---|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | ・多様な情報の収集と検討 ・具体的な保育の姿や援助・環境構成など、観点の明確化 | ◎ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | ・“明日につながる”ことを意識した指導助言 | ○ |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | ・話しやすい進め方と工夫 ・話し合いのポイントとなる事項の視覚化 ・小グループによる話し合いの充実 | ◎ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | _____ | |

(5) 実践研究の計画と実施

| | |
|------------|--|
| 講 座 | 講座 9 実践研究の計画と実施①：研究テーマと方法の設定 講座 10 実践研究の計画と実施②：記録とデータ収集と分析 講座 11 実践研究の計画と実施③：考察と報告 |
| 目 的 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践研究の計画と実施、分析と考察に関して、実証的に実施するための知識を習得し、研究を指導し統括する技能を向上させる。 ・実践への適切な指導・助言、解説に向けて、実践を理論的に捉え分析する能力を向上させる。 ・実践研究の手法について熟知し研究を遂行するとともに、研究成果を適切に位置付けることのできる能力を向上させ、実践研究の指導・助言や統括を行える力を養う。 |
| 種 別 | 演 習 |
| 実 施 | 講座 9：平成 27 年 7 月 30 日（木） 講座 10：12 月 10 日（木） 講座 11：平成 28 年 1 月 27 日（水） |
| 内 容 | <p>1. 概 要</p> <p>1) 講座 9 研究テーマと方法の設定 幼児教育アドバイザーの各自設定したテーマをもとに、各グループにて研修する。 テーマの設定の仕方と研究の進め方・方法について、指導助言する。</p> <p>2) 講座 10 記録とデータ収集と分析 前回の指導を踏まえ作成された資料を用いて、具体的な分析及びまとめる方向性について指導助言を行う。</p> <p>3) 講座 11 考察と報告 再考された資料を見ながら、全体から読取り、考察を行い、報告書としてまとめられるよう指導助言を行う。</p> <p>2. 実践研究の枠組み（ガイダンス資料より）</p> <p>0. 研究主題</p> <p>I. 研究の目的</p> <p>1. 研究主題の設定理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その主題が教育・保育全般にとって必要である理由（奈良市や全国を見て） ・その主題が園にとって必要である理由 園や地域の状況／今の園の問題状況（子供の姿、環境など） 実践者の考え方や資質向上における問題点 等 <p>2. 自園や他園におけるこれまでの取組とその成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究主題について、これまでどのように捉え考えられてきたか ・具体的にどのような取組を行ってきたか ・“上記の結果でどういうことが分ったか”あるいは、“問題として見えて来ているか” <p>3. 研究を通して明らかにしたいこと（実践上の仮説）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取組や実践自体の工夫なのか／カリキュラムの提案か ・子供の姿や援助や環境構成の仕方なのか ・新しい観点や見方を提示するのか ・どうなれば“明らかになった”と言えるのか |

| | |
|-------------------|---|
| | <p>II. 取組の方法</p> <p>1. 園の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域状況や周囲の環境 ・園の人的構成・規模 ・園環境（広さ、屋外、屋内） <p>2. 実践や取組の工夫・特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どういう実践や取組を行うのか <p>3. 研究主題の要素・観点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主題に掲げた状態を捉える観点（複数が望ましい） ・いわゆる「コンセプト」に代わるもの（ねらいにも含まれ、評価の観点にもなる） <p>4. 記録方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記録や事例の収集の方法：いつ、どのように行うのか（手段を含む） ・記録の種類：日誌の記録、エピソードの記録、個人記録のどれを用いるのか <p>5. 事例選択の基準</p> <p>III. 取組の経過（事例を含む）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例えば、各年齢ごとに、研究主題に関する1年間の取組の経過をまとめる。 ・具体例は事例として作成する。 ・事例は観点別または年齢別に配置。 ・事例の書式は「履歴としてのカリキュラム」に準じる。 ・ただし、「コンセプト」に代えて、あるいは、「コンセプト」とは別に、「研究主題の要素・観点」の項目を立てて、事例から言えることを記述する。 <p>IV. 考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事例における「要素・観点」を年齢や期に沿って並べ、全体的把握を図る。 ・1年間、期を縦断して見えてくることは何か。 ・「研究の目的」（特に、研究を通して明らかにしたいこと（実践上の仮説））に照らして、明らかになったことや、至らなかったことは何か。 |
| <p>方 法</p> | <p>1) 講座9「研究テーマと方法の設定」</p> <ul style="list-style-type: none"> ①研究に関してテーマが抽象的であり、活動の領域を出来るだけ限定して設定する。 ②園で実践していることを生かして、子供の主体性を育てるという方向で進める。 ③自律性をねらいに環境構成の工夫をする。 ④実践者の連携を深め環境構成の在り方を探る。 <p>2) 講座10「記録とデータ収集と分析」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 下記の3つの観点から進め、記録の工夫・事例研究を進める。 <ul style="list-style-type: none"> ・各年齢のねらいや内容と遊びの中での気付きの記録等を、データとして示す。 分析の視点がフィジカルなねらいに限定されていたので、心の育ちに関する気付きの記録をとるようにする。 ・固定化したかかわりを広げることをねらいとし、園内異年齢児交流・他園交流・地域との交流・小中との交流の成果を記録にする。 ・研究主題の要素・観点の中に、変えるものとしての環境構成と、変わるに違いない子供の姿（自律性）が混在して記録されているので、その関係性が明確になるよう記録する。 |

〔1〕演習を経験して得られた成果と学び

- ①自園の問題をみんなで確認し進められたことや、学識経験者に助言をして頂き大変勉強になった。
- ②研究テーマを意識して実践の中に取り入れることで、自主研修・公開保育等機会を設け実践者間で話合えた。
そのことが、園内での実践へのモチベーションの向上や、実践者間でのコミュニケーションへとつながった。
- ③一つの課題を系統立てて記録する方法等助言してもらったことが、次年度につながるヒントとなった。
- ④自園だからできる事、自園らしさを出し進めるようアドバイスをもらい、大変参考になった。
- ⑤課題意識を持って進めていくことは、次への展望が見えてくる。また、一つのことを深く追及することで、園や子供の実態がより見えてくることが分かった。
- ⑥研究をまとめるというプロセスを学べたことが良かった。
- ⑦自園の課題が研究テーマになることが、幼児教育アドバイザーの中で明確に認識された。また、記録の取り方・事例研究の書き方は他園の資料を見ることが参考となった。
- ⑧全実践記録でなく、研究のねらいに沿ったデータ収集と分析が必要であることが明確に認識された。活動によっては、奈良市立こども園カリキュラムを参考に「特色ある活動」として記録ができるとアドバイザーから提案があった。「バンビーノ・プラン」がアドバイザーの中で深められ、今後も活用されることが期待できる。

〔2〕その他、課題等

- ①指導を受ける時間がもう少しゆったりとあれば良かった。
- ②早いうちから研究体制を整え、園全体で深めまとめていく。
- ③継続した取組の中で記録をまとめ、わかりやすく活用できるようにする。
- ④2回の演習で研究のテーマや設定等について、他の受講生やスーパーバイザーとともに話合うことでその不安が軽減した。
- ⑤全体として研究テーマを持って実践を進める機会が少なかった保育所では、研究テーマの設定を始めとする研究の進め方全体に不安があることが分かった。

成 果

◇受講者の振り返りにみる学び

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|---|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | <ul style="list-style-type: none"> ・課題意識を持って進めていくことで、次への展望が見える ・一つのことを深く追及することで、園や子供の実態がより見えてくる。 | ◎ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | | |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・園内における新たな研修の機会として活用することができる。 | ○ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践へのモチベーションの向上や、職員間でのコミュニケーションへとつながる。 ・一つの課題を系統立てて記録する方法等、研究を進めまとめるプロセスを学ぶことができる。 | ◎ |

課 題

| 現 行 | 改善点 |
|--|---|
| ○ 小グループで、各自の研究テーマを持ち寄り指導を受け、その指導を基に各受講者が研究を行う。 | ○ 各自の研究テーマの設定や研究の進め方について、スーパーバイザーに定期的に相談したり、フォローしたりできるような機会を持つ。 |

(6) 研修の企画・運営

| | |
|------------|---|
| 講 座 | <p>講座 12 研修の企画・運営①：事例報告会の企画</p> <p>講座 13 研修の企画・運営②：事例報告会の運営</p> <p>講座 14 研修の企画・運営③：研究集会の企画・運営</p> |
| 目 的 | <ul style="list-style-type: none"> ・異なる種類の研修を企画し、実際に運営することを通して、課題に応じた研修の企画・運営に関する総合的な技術を向上させる。 ・奈良市立こども園カリキュラム事例研究会の「実践事例報告会」や、こ幼保合同研修会での公開保育研究会・研究報告会において、企画・運営、司会・進行を担い、参加者の経験や課題、目的に応じて進行や展開を工夫し、研修を円滑に実施できるようにする。 |
| 種 別 | 講座 12：ワークショップ 講座 13・講座 14：実 習 |
| 実 施 | <p>講座 12：平成 27 年 8 月 27 日（木）</p> <p>講座 13：平成 27 年 9 月 17 日（木）・12 月 21 日（月）</p> <p>講座 14：平成 28 年 2 月 6 日（土）</p> |
| 内 容 | <p>実践者の資質・能力を高め、適切で効果のある指導・助言を行うためには、園内研修や研修（公開保育を含む合同研修）の場で、幼児教育アドバイザーが実践者の課題を捉え、研修を企画・運営する能力を育むことが必要であると考え、ワークショップを経験後に実践での企画・運営が経験できるようにする。</p> <p>① 9 月 17 日、12 月 21 日の 2 回の実践事例報告会で、幼児教育アドバイザー講習受講者 12 名全員が、企画・運営を体験する。</p> <p>② 事例報告会での企画・運営経験を生かし、2 月 6 日の研究集会で企画・運営する。</p> |
| 方 法 | <p>◇事例研究会・実践事例報告会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日 時：（第 1 回）平成 27 年 9 月 17 日（木）・（第 2 回）12 月 21 日（月） ・講 師：講師 奈良女子大学 准教授 本山方子氏 ・参 加 者：市内公立園園長、副園長、保育教諭 子ども未来部関係者及び保育指導係 ・受講者の活動：準備、運営、進行、話題提供、アンケートの作成と分析 <p>◇研究集会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日 時：平成 28 年 2 月 6 日（土） ・講 師：講師 國學院大學 教授 神長 美津子氏 ・参 加 者：学識経験者 市内公立園園長、副園長、保育教諭・市内私立園園長、副園長、保育教諭 子ども未来部関係者及び保育指導係 ・受講者の活動：カンファレンスの企画・進行、統括、運営 |

〔1〕『奈良市立こども園カリキュラム』事例研究会の実践事例報告会の企画・運営に必要なこと

- ①記録をとり事例を作成する。
- ②一連の流れを把握し、様々な点で配慮する。
- ③目的、ねらいをもって研修の企画運営を行う。
- ④会場設営や機材の準備等に細やかな配慮をする。
- ⑤参加者に配布する当日の次第やスタッフ用の進行表等は、少ない文言で分かりやすく作成する。
- ⑥運営面での図面作成は細かなところまで計画しておく。
- ⑦実践者が互いに協力することで、研修会を遂行できる。
- ⑧全体を見通した案を作成する。
- ⑨進行の手順（どの様な行程で進めていくのか）、必要書類作成（アンケートの内容や作る時の注意点）等が必要である。
- ⑩を予想し、企画運営上の注意点（会場、参加人数の違いや学びの違い等）、課題等を読み取り（アンケートより）を次回に生かし、改善を行う。

〔2〕実践事例報告会の企画・運営に関する今後の改善点

- ①企画・運営面（会場準備や配置、人の動き等）は、園内や奈良市の研修の運営時に生かせる。
- ②役割分担や統括は重要。目的を持って企画運営に当たることが大切で今後の経験に生かせる。

〔3〕研究集会（2月6日）の企画・運営を遂行して得られた気付き

- ①今までの取組を振り返り行ったことが自分自身の確かな学びとなり、今後に更に生かすことが出来る。
- ②自分達で行った会場設営等一連の流れを振り返り、細やかな配慮と学びを改めて自覚することができた。
- ③少しゆとりをもって企画運営の大切さや細やかな配慮、場に応じた決断力の大切さ等ができ、今後の役割に生かしていくことが出来る。
- ④この経験及び1年間の取組により自己の成果と課題の把握が明確となり、自己分析や自己評価をすることへとつながる。

成 果

◇受講者の学び（講座 12、講座 13、講座 14 の実習後）

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|---|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | ・事例の読み解きや検討される様子を具体的に話すことは、教育・保育の理解につながる。 | ○ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | ————— | |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・研修の一連の流れを把握でき、様々な点で配慮すべき所があることを実感した。 ・この経験が、園内や奈良市の研修を運営していくときにも生かせる。 ・目的を持って企画運営にあたることが大切。 ・文書等は、少ない文言で分かりやすいようにする。 ・勘案時には、全体を見通し構成する必要がある。 ・どの様な行程で進めるのか、またアンケートの(内容)作る時の注意点等について。 ・チームで協力して進めることの心強さ。 ・次回の企画は、前回のアンケートから読取り作成する。 | ◎ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | ————— | |

課 題

| 現 行 | 改善点 |
|--|---|
| ○ こ幼保合同研修会や自園に加え、スーパーバイザー園での実習を中心にし、企画運営を行う。 | ○ 自園での実習の機会を増やし、企画運営をしながら研修積重ねることで園内の活性化及び、実践者への指導助言の循環を図る。 |

(7) 総括

| | |
|----|--|
| 講座 | 講座 15 総括：研究集会における研究成果の発表と評価 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> 異なる種類の研修を企画し、実際に運営することを通して、課題に応じた研修の企画・運営に関する総合的な技術を向上させる 奈良市内の実践者（公立・私立）に対し、受講者の企画・運営を行う姿を示したり学識経験者による講演と講評を得たりし、本研究の経緯と成果を提供する。 |
| 種別 | 実習 |
| 実施 | 平成 28 年 2 月 6 日（土） |
| 内容 | 本 15 講座における講義及び演習、実習の成果として、研修の企画・運営を行う。また、本育成プログラムに参加した受講者（経験年数・3 段階の中より、3 人を選出）より、「アドバイザー講習受講者としての成長過程について」、スーパーバイズより「スーパーバイザーから見たアドバイザーとしての成長の過程について」の報告を行う。 |
| 方法 | <p>◇研究集会</p> <ul style="list-style-type: none"> 日時：平成 28 年 2 月 6 日（土） 講師：講師 國學院大學 教授 神長 美津子氏 参加者：学識経験者 市内公立園園長、副園長、保育教諭・市内私立園園長、副園長 保育教諭 子ども未来部関係者及び保育指導係 受講者の活動：研究集会の準備、進行、運営 |

振り返り

◇受講者による振り返り

〔1〕受講内容、各受講者の取組への理解

- ①丁寧なまとめから、受講内容や取組についての理解が更に深まった。
- ②視覚的な表現の効果について、客観的に聞くことでより理解し自覚した。
- ③演習、自園、他園でのカリキュラムの説明会等研修を重ねる中で、このプログラムを受けた成果・成長の過程が理解できた。
- ④自園・他園での園内研修内容や、実践者間での学び合いを意識した取組についてよくわかった。

〔2〕今後の取組へのつながり

- ・それぞれに良い経験をしたと自覚できたことで、自信を持って進められる。
- ・報告するときには、聞き手によくわかるように構成することが必要である。
- ・今回の研究の取組は、次年度につなぐ大切な発信になる。
- ・今までの取組を改めて振り返る機会となり、今回の学びを自園でも活用していきたい。
- ・取組に正解はなく、大切なことは自分なりに考えて取り組んでいくことであると確信した。

成 果

◇受講者の振り返りに見る学び

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|--|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | ・自信を持って進めていくことが大切である。 | ○ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | ・パワーポイント等を効果的に活用し、指導の方法を工夫する。 ・具体的な方法を交えて、指導助言する。 ・実践者間での学び合いを意識して進める。 | ◎ |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | ・自園、他園での研修の取組や工夫をすることが必要である。 ・今年度の取組を、次年度につなぐ。 ・自分なりに考えて取り組む。 | ◎ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | _____ | |

課 題

| 現 行 | 改 善 点 |
|--|---|
| ○ 学識経験者や市内の幼児教育関係者を招き、幼児教育アドバイザー講習受講者3名、スーパーバイザー1名に報告が成果を報告する。 | ○ 幼児教育アドバイザー講習受講者及びスーパーバイザー、各園の園長が取組の成果を共有する。 |

2. 幼児教育アドバイザー活動実習

(1) 実習の概要

| 活 動 | 自園（勤務園）及び他園で、幼児教育アドバイザーの実習を行う。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|--|---|-----|------------------|------|---|----------------|---|---|---------------|---|---|--------|-----------------------|---|--------|-----------------------|---|--------|-----------------------|---|--------|-----------------------|---|-------|-----------------------|---|---------------|---|---|-------|-----------------------|---|-------|-----------------------|---|-------|-----------------------|---|-------|-----------------------|
| 目 的 | <ul style="list-style-type: none"> ・「幼児教育アドバイザー講習」での学びを活用し、受講者の自園の他、スーパーバイザーの勤務園やカリキュラム研究大会等で、カリキュラム解説や実践の指導・助言等の実習を行うことで、幼児教育アドバイザーとしての専門的技能の更新を図る。 ・『奈良市立こども園カリキュラム』の理解や活用の方法について、実践現場や研修先での普及を率先して行うことで、実践者自身の実践や子供の発達を見直し、指導力や助言力の向上を図る。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 種 別 | 実 習（自園・スーパーバイザー園） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 実 施 | 平成27年9月1日（火）～平成28年2月16日（火） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 内 容 | <ul style="list-style-type: none"> ・自園や他園において『奈良市立こども園カリキュラム』の解説を行い、考え方や活用の方法についての普及に努める。 ・自園や他園において『奈良市立こども園カリキュラム』や指導計画に照らしながら、実践に関する指導・助言（園内研修等の機会を用いる）を行う。 ・実習は、スーパーバイザーの勤務園、『奈良市立こども園カリキュラム』研究大会（青和こども園）、こ幼保合同研修会（富雄南こども園）等にて行う。 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 方 法 | <ul style="list-style-type: none"> ・実習園（他園）と実習内容（こ幼保合同研修会については後述） <table border="1"> <thead> <tr> <th>受講者</th> <th>実習園（スーパーバイザー勤務園）</th> <th>実習内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td>大安寺西幼稚園、青和こども園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>都跡こども園、青和こども園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>都跡こども園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>富雄北幼稚園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>E</td> <td>左京こども園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>富雄北幼稚園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>G</td> <td>京西保育園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>H</td> <td>都祁こども園、青和こども園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>I</td> <td>京西保育園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>J</td> <td>朱雀保育園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>k</td> <td>神功保育園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> <tr> <td>L</td> <td>朱雀保育園</td> <td>園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説</td> </tr> </tbody> </table> | | 受講者 | 実習園（スーパーバイザー勤務園） | 実習内容 | A | 大安寺西幼稚園、青和こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説 | B | 都跡こども園、青和こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説 | C | 都跡こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | D | 富雄北幼稚園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | E | 左京こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | F | 富雄北幼稚園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | G | 京西保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | H | 都祁こども園、青和こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説 | I | 京西保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | J | 朱雀保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | k | 神功保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | L | 朱雀保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 |
| 受講者 | 実習園（スーパーバイザー勤務園） | 実習内容 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| A | 大安寺西幼稚園、青和こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| B | 都跡こども園、青和こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| C | 都跡こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| D | 富雄北幼稚園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| E | 左京こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| F | 富雄北幼稚園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| G | 京西保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H | 都祁こども園、青和こども園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 研究大会でのカリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| I | 京西保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| J | 朱雀保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| k | 神功保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| L | 朱雀保育園 | 園内研修会での指導・助言、カリキュラム解説 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

(2) 活動の実際

①自園におけるN実践者のアドバイザー活動

| |
|--------------------------------------|
| 実習先：奈良市立〇〇〇幼稚園 実施日：平成27年11月19日（木） |
|--------------------------------------|

<1> 実施内容

- ・午前中の実践参観
5歳児1組 実践参観後、実践や指導案に対して指導・助言を行う。
- ・奈良市立こども園カリキュラムの解説について
1年齢に応じたカリキュラム・3歳から5歳児
2年齢に応じたカリキュラム 幼児期の長時間保育

<2> 方法

その日、実践者と一緒に、実践について具体的に話し合いを行う。話し合いを進めるポイントは、下記の4点について絞り進めることとし、振り返りを行う。

- a 実践者の思いを具体的に聞きながら、話し合いの視点を定め進める。
- b 実践者の経験や講習での学びを基に、具体的な課題を示したり意見を伝えたりする。
- c 実習園側の意向を組入れながら進める。
- d 『奈良市立こども園カリキュラム』の解説の工夫を行う。



- ・その日の実践の指導ポイント、テーマなどをより具体的にしておくことは、具体的な指導へとつながり、明日への課題や疑問を具体的に持つことができる。
- ・実践者の悩みや思いを聞き出し、明日へとつなげるには、自分の経験を踏まえいろいろなアイデアの提示をしたり考えたりしていく必要がある。答えや方法は一つではなく、共に考えるだけの幅を持たすことが、指導・助言する側に必要な資質の一つで大変重要である。
- ・内容を変えずに自分の言葉で伝えられるようにするには、読み込みや研修の積み重ねが必要であると感じた。実践者のキャリアや年齢によって伝わり方が違ったり、質問や疑問が多様化してくるので、対応できる解説技量を身に付けていくことが必要である。

<3> 成果 及び 課題

- ・実践者自身が、その日の研究会や指導のテーマを明確にしておくこと、また、それを研修会参加者全員が把握し目的意識を持って研修に当たれるようにすることが大切である。
- ・自己の経験に基づいて知らせ、具体的な研修案や内容について自信を持って伝えることが必要である。

②他園の園内研修におけるP実践者のアドバイザー活動

実習先：奈良市立〇〇〇△△園

実施日：平成27年12月〇日

1) 課題

幼児の姿やねらいを把握し、確かな見取りを行い進める

<5歳児 4期 >

◇「めざす子どもの姿」

- ・自分の役割を把握し、友達と協力し合いながら、自分なりに工夫して取り組んでいく。
- ・友達の姿から、刺激を受けることが増え、自分なりの課題を持ったり行動を振返ったり意識したりする。
- ・遊びの中でトラブルや困難なことが起きた時には、自分たちで解決しようとする。

◇ねらい

- ・遊びや活動に見通しを持って、自分たちで意欲的に進めていく。
- ・自然の変化や美しさを感じながら、自然物を生かして遊ぶ。
- ・共通の目的を持ち、役割分担をしながら遊びを進めていく。

次の視点を意識し、実践の参観後に研修を行う。

- ・今の時期の子供たちの発達段階に即しているのか。
- ・ねらいは、合っているのか。
- ・実践者の援助の仕方はどうなのか。
- ・見学している実践者の人数、年齢、経験年数等はどうなのか。
- ・カンファレンスの中での進行の仕方の工夫。
- ・パワーポイントを使って、解説をする。

スーパーバイザーの指導

- ・カンファレンスの時間配分は、若い実践者が多いので、意見を集約しながら進める。
- ・パワーポイントを使って報告する等行う。

< 振り返り >

- ・5歳児 4期としての「めざす子どもの姿」にあるような「友達との意見交換する、ルールを守って展開する、役割分担をする」等の姿が見られた。異年齢児とのかかわりも、自然と出来ていたように思われる。
- ・5歳児クラスは、2クラスあり、1は、1人担任、2は、2人担任である。2つのクラスを見学する中で、環境の周到さ、援助の違い、時間配分などにメリットやデメリットがあることに気付いた。
- ・他園での実習は緊張したが、自園での取組の振り返りで参考にできる点もあり、良い経験となった。

③他園の公開保育研究会におけるQ実践者のアドバイザー活動

幼児教育アドバイザーとしての取組

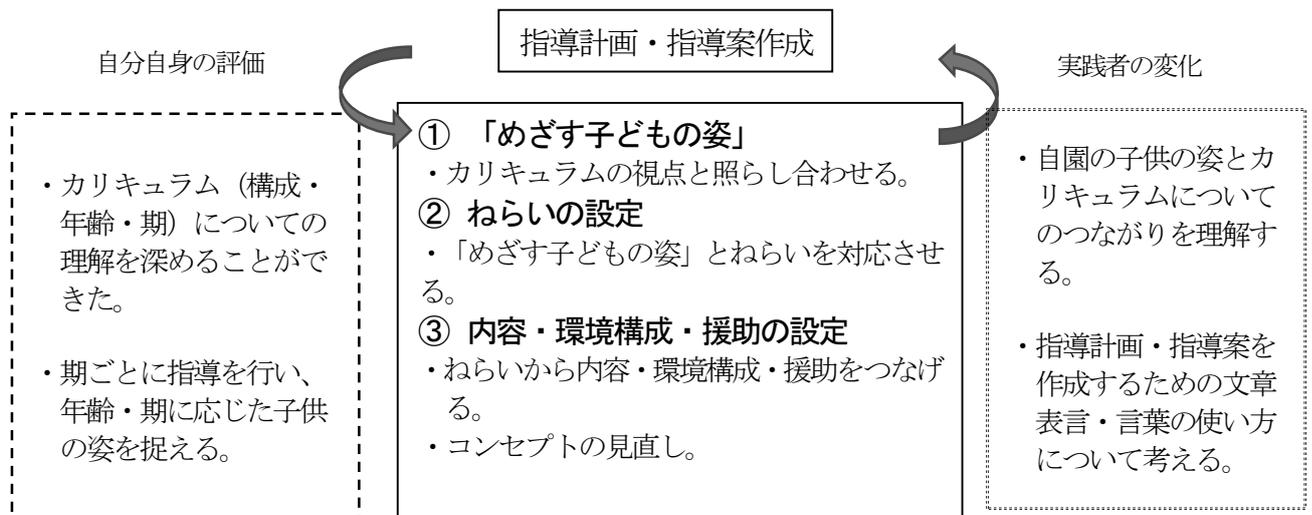
※ 講習を受けるまでの自分

- ・ 保育経験が少なく、若い実践者に対しての指導について悩むことも多くあった。
- ・ 自信がないため、実践に対する考えを明確に伝えることができないことがあった。

10月31日 奈良市立こども園カリキュラム研究大会に向けて

○ 園の指導計画・指導案に照らし合わせて、指導を行う。

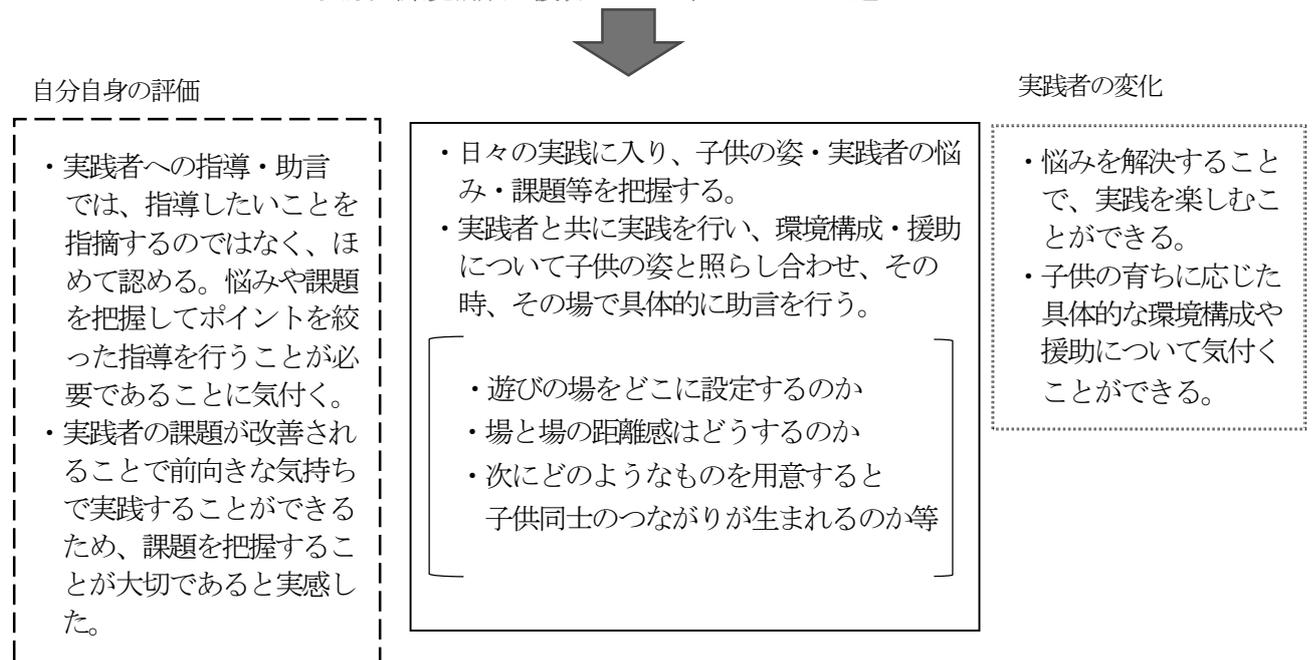
カリキュラムについての理解を深める



○ 実践についての指導を行う。

実践者の課題に応じて指導・助言する

- ・ 公開保育に向けて不安
- ・ 実践（環境構成・援助について）についての迷い



実習後、受講生は「得たこと」と「今後の展望」について振り返りを記述した。

園内及び他園において、どのような視点で研修を行いましたか。

○カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有について

- ①カリキュラムの内容を理解のための、わかりやすい説明の仕方の工夫をする。
- ②幼児期の教育の位置付けやカリキュラム実践との整合性に視点を置いた指導をする。
- ③カリキュラムと照らし合わせた進行年齢に応じた実践を探る。
- ④子供の育ちの見取り方と、それにあった援助・環境構成について探る。
- ⑤全員で事例の読み解き等について話合う。
- ⑥奈良市立こども園カリキュラムの活用の継続を意識できるようにする。

○実践上の課題に応じて指導・助言する能力

- ①それぞれの経験に幅があることを考慮した指導や課題を明確にする。
- ②遊びの捉え方について実践者全員で共有する。
- ③一人一人の教育・保育の質が高まるような研修をする。
- ④具体的な明日の実践へのつながりを考えて指導する。

○実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力

- ①園内研究会での学識経験者よりの指導を企画。
- ②視覚的表現方法（プレゼンテーション）での解説を企画。
- ③各学年に研究主任を置き、自分たちの問題として捉えられるようにする。
- ④悩みを出し合い、明日の実践を考えるとというテーマで進行する。
- ⑤子供の姿の見取り、より良い環境構成、援助について、意図して一緒に考え進行する。
- ⑥援助や悩みという視点での話合いポイントを絞り、予めシートに着眼する視点を書いた、カンファレンスの進行をする。
- ⑦実践の良い点、“自分だったら”という視点での話合いを行う。
- ⑧参加した実践者から色々な意見がでるように進行する。
- ⑨“できるだけわかりやすくする”ことにポイントを絞り、研修を深める。
- ⑩“その期に合った教育・保育内容であるのか”、“子供に対する支援はどうであったか”などの視点で進行する。
- ⑪初の人でも理解できるような解説と共に学び考えていける研修の企画。

○実践研究を推進・統括する能力

- ① 研究主題について乳児・幼児それぞれが思いを出し研修できるようにする。
- ② 研究主題に基づいた子供の姿を出し合い、援助や方法について考える。
- ③ 参加者の経験によって、それぞれに課題を見つけてもらえるような展開をする。

成 果

◇受講者の振り返りに見る学び

受講者の振り返りから、カリキュラムに関する「気付き」と、「アドバイザー活動において必要な点」を、資質・能力別に集約すると、次のようなことが上げられる。また、受講者の学びから、本講座で向上が期待される資質能力について、◎＝必須で十分に育成される資質・能力、○＝十分に育成される資質・能力、として示す。

| 資質・能力 | 要 点 | 育成可能性 |
|----------------------------|--|-------|
| ①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 | <ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい説明の仕方の工夫をする。 ・子共の見取りや援助、環境構成について、実践とカリキュラムとを照らし合わせて見る。 ・全員で事例の読解き等について学ぶ。 | ◎ |
| ②実践上の課題に応じて指導・助言する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践経験の幅を考慮した指導を行う。 ・具体的に明日の実践につながるように指導をする。 ・一人一人の実践の質が高まるようにする。 | ◎ |
| ③実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 | <ul style="list-style-type: none"> ・参加者全員が思いを出せるような企画をする。 ・ポイントを絞り、予め着眼点を記入したシートを活用し、カンファレンスを行う。 ・共に学び合える企画や参観者の経験や課題を見つけられるよう展開する。 | ◎ |
| ④実践研究を推進・統括する能力 | | |

3. スーパーバイズの実施

(1) スーパーバイズの概要

| | |
|-----|---|
| 活 動 | スーパーバイズ |
| 目 的 | 幼児教育アドバイザーの実践に対して継続的に経過を観察する中で、成果や課題についての早期発見や解決ができるようにする。また、受講者のキャリアに応じて、指導・助言する能力や研修の企画運営を積極的に行なえるような「知識・技術」の習得をサポートする中で、その効果を探る。 |
| 種 別 | 面 接 |
| 実施日 | 第1回目 9月24日(木)、10月1日(木)、10月5日(月) 第2回目 12月11日(金) 第3回目 2月26日(金) |
| 内 容 | <p>1. 構成員 学識経験者、推進委員、行政関係者 ※3名が1組となり、3回通して同じ幼児教育アドバイザーを面接する。 (一人 30分程度)。 ※アドバイザー演習や実践等の中で、悩みや躓き等について具体的にアドバイスをする。 “今は、ここまでできているから、次はこのようにしてみましょう”等、課題解決への方向性が持てるようにアドバイスをする。</p> <p>2. スーパーバイズ実施方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 年3回(9月・12月・2月) ○ 面接形式にて実施 <ul style="list-style-type: none"> ・個人の振り返りシートや学識経験者、行政用の計画や資質等に関するチェックリストを作成し、活用する。 ・3人一組の面接官が1チームとなり受講者一人ずつを担当する。 “この場合はどうしたらいいか” “このように伝えたいが、相手の力量が伝えるに達しているかどうか” “どのような話し方をしたらいいか” “どういう風に、順に提案したらいいか”等 受講者の悩みや躓き等に対し3回の面接を実施し、アドバイスする。 ○ 担当者方式にて実施 <ul style="list-style-type: none"> ・推進委員園での園内研修会時に、担当の受講者の実践指導についてアドバイスする。 ・受講者は、実践の参観後の研修にて『奈良市立こども園カリキュラム』についての解説や実践への指導、助言を行う。受講者は本日の実践指導についての振り返りを行い、担当推進委員よりスーパーバイズを受ける。そのことを、次回の実践にて生かせるようにする。 |

(2) スーパーバイズにおける評価シート

①受講者が記入する「幼児教育アドバイザー用シート」

平成27年度「幼児教育の質向上に係る在野体制等の構築モデル調査研究
「幼児教育アドバイザーの育成プログラムの開発
——『奈良市立子ども園カリキュラム』に基づく質の高い幼児教育の推進に向けて

幼児教育アドバイザー活動に関するふり返り
 スーパーバイズに向けて（幼児教育アドバイザー用）

スーパーバイズ第 2 回（平成27年 月 日実施）

記入者氏名 _____

I. アドバイザー講習やアドバイザー活動実習をふり返って

【評価】 4：十分、可能である 3：可能である 2：少し不安である 1：大変不安である

【進捗状況・現在の課題】 日ら日指すアドバイザー像に照らして状況や自分の課題を記入する。

(1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有

| 観 点 | 評価 | 進捗状況・現在の課題 |
|--|----|---|
| ①カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について理解している。 | 3 | 前回に指導いただいたように、実践者と共にカリキュラムを活用しながら意見交換をし、共に理解を深めていくことを大事にしていきたいと考えている。 |
| ②幼児期の教育の位置づけと必要性について、系統の観点と教育的意義から理解している。 | 3 | そのためには、カリキュラムと照らし、普段から子どもの姿を見て、自分なりにカリキュラムを理解する努力を続けることが、今後も課題である。 |
| ③上記①、②に関して、実践への活用の在り方を理解し、実践に照らして解説することができる。 | 3 | |

(2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力

| 観 点 | 評価 | 進捗状況・現在の課題 |
|--|----|--|
| ①実践者の実践上の課題について、個人・学年・園の次元から構築する。 | 3 | 幼児の指導計画については、実践者と共に、子どもの姿を通して、それぞれの年齢に応じた発達の、子どもの見方などを話し合いながら作成をよりよく進めている状況である。 |
| ②実践者の熟達を見極め、短期的長期的な課題を把握する。 | 3 | 実践者の様々な考えや思い、保育観を受け止めながら課題を見いだし、個人・学年として助言を心掛けているが、なかなかうまくいえずに、実践者に伝わりにくい時もあると感じている。 |
| ③指導計画について、年齢や際、子どもの状態を反映しているか、各項目の記述は適切かつ簡潔であるか、把握する。 | 3 | 実践者の思いを尊重しつつ、適切な助言ができるように、実践にも入りながら、子どもの様子や援助、環境構成を見て、実践上の課題を具体的に見だし、把握していきたいと思う。 |
| ④実践について、指導計画と整合しているか、保育の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が実施されているか、把握する。 | 3 | |
| ⑤保育記録と評価について、指導計画に対応しているか、具体的事実を前もって記述しているか、十分な省察が行われ、改善への方策が見いだされているか、把握する。 | 3 | |

自己の取り組みを振り返り、具体的な「進捗状況・現在の課題」等を記載する。

自己の取り組みを振り返り、1～4の4段階で自己評価を行う。

自己の課題等を記載し、具体的な話合いができるようにする。

(3) 保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力

| 観 点 | 評価 | 進捗状況・現在の課題 |
|--|----|--|
| ①研修のテーマや研修内容がテーマを定めて、研修の目的や研修内容を定めて、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 | 3 | 研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 |
| ②研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 | 3 | 研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 |
| ③研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 | 3 | 研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 |
| ④研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 | 3 | 研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと、研修の進め方を決めていくこと。 |

(4) 実践研究を推進・実施する能力（指導・助言）

| 観 点 | 評価 | 進捗状況・現在の課題 |
|--|----|--|
| ①実践研究のテーマや目的、目的を設定して取り組むこと、実践の進め方を決めていくこと、実践の進め方を決めていくこと、実践の進め方を決めていくこと。 | 3 | 実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと。 |
| ②実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと。 | 3 | 実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと。 |
| ③実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと。 | 3 | 実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと。 |
| ④実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと。 | 3 | 実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと、実践研究の進め方を決めていくこと。 |

II. 現在、アドバイザー活動に関して評価と定めていることや、振り返りたい内容を具体的に

【 】に記入してください。

(○) 子どもの見方について () 個人は誰か記入について

() 指導計画の作成について () 進捗の進め方や実践への活用について

(○) 保育の記録の活用について () その他 () 研修の企画・運営について

・ 子どもの見方についての思いが実践者の間で共有でき、遊びや子どもの姿について話し合う機会がこれまで以上に増えている。しかし、話し合いが実践者だけでなく保育士全体で進んでいることがまだ少ない。話し合いの機会を増やしていきたい。話し合いの機会を増やしていきたい。

・ 一方で、乳児科主任は保育者の思いや実践の様子を詳しくは聞いていない。話し合いの機会を増やしていきたい。話し合いの機会を増やしていきたい。

・ 子どもの見方について、実践者だけでなく保育士全体で話し合いを進めていくことが、今後の実践を進める上で重要である。話し合いの機会を増やしていきたい。話し合いの機会を増やしていきたい。

・ 子どもの見方についての思いが実践者の間で共有でき、遊びや子どもの姿について話し合う機会がこれまで以上に増えている。しかし、話し合いが実践者だけでなく保育士全体で進んでいることがまだ少ない。話し合いの機会を増やしていきたい。話し合いの機会を増やしていきたい。

②スーパーバイザーが記入する「スーパーバイザー用シート」

平成27年度「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究」
「幼児教育アドバイザーの育成プログラムの開発」
——『奈良市立こども園カリキュラム』に基づく質の高い幼児教育の促進に向けて

幼児教育アドバイザー活動に関するスーパーバイズ (スーパーバイザー用)

研究部員氏名 _____

スーパーバイズ第 1 回 (平成 27 年 月 日実施)

記入者(スーパーバイザー) _____

I. アドバイザー講習やアドバイザー活動実習を振り返って

【評価】 A:十分、達成している B:達成している C:課題が見える D:課題山積である

(1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有

| 観 点 | 評 価 | 所 見 |
|--|-----|--|
| ①カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について理解している。 | ● | ・カリキュラムの理念と内容についての理解に、自ら不安があるとの言葉が出ていたが、冊子の内容については把握し、伝えようとすることはできている。 |
| ②幼児期の教育の位置づけと必要性について、発達の観点と教育的意義から理解している。 | | |
| ③上記①、②に関して、実践への活用の在り方を理解し、実践に照らして解説することができる。 | | |

(2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力

| 観 点 | 評 価 | 所 見 |
|--|-----|--|
| ①実践者の実践上の課題について、個人・学年・園の次元から勘案する。 | ● | ・指導や助言をするときの説明に説得力が欠けるのではないかと悩んでいる。自園の保育者へは指導を行えたことで、もっと自信を持つてほしいと感じる。 |
| ②実践者の熟達を見極め、短期的長期的な課題を把握する。 | | |
| ③指導計画について、年齢や期、子どもの状態を反映しているか、各項目の記述は適切かつ簡潔であるか、把握する。 | | |
| ④実践について、指導計画と整合しているか、保育の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が実施されているか、把握する。 | | |
| ⑤保育記録と評価について、指導計画に対応しているか、具体的事実を踏まえているか、十分な省察が行われ、改善への方策が見いだされているか、把握する。 | | |

幼児教育アドバイザーの振り返りシートや面接での話を基に、所見を記入する。

幼児教育アドバイザーがどの程度技能や能力を身に付けているか、A～Dの4段階での評価を行う。

(3) 保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力

| 観 点 | 評 価 | 所 見 |
|--|-----|---|
| ①各種のニーズや課題に応じてテーマをたて、進行や人員配置の計画を立てる。 | ● | ・研修の企画、運営については、大きな研修計画のイメージがあるためか、困難さを感じているようであるが、園内研においては、中心となって進めることができているのではないかとと思われる。 |
| ②参加者の経験を踏まえ、学びの在りようを勘案して、計画を立てる。 | | |
| ③研修の実施時には、参加者の経験や課題、参加の目的に応じて、進行や展開を工夫する。 | | |
| ④研修の実施時には、参加者同士の学び合いや相互の啓発を促したり、状況に応じてテーマや問いを絞ったりして、研修を深める工夫をする。 | | |
| ⑤研修の終了後には、研修を評価し、次の研修に活かすための改善点や参考点を得る。 | | |

(4) 実践研究を推進・統括する能力(指導・助言)

| 観 点 | 評 価 | 所 見 |
|---|-----|---|
| ①適切なテーマと研究上の問いが立てられているか、把握し、指導や助言を行う。 | ● | ・今後も自ら学んでいこうという意欲があるが、自信を持っていないので、保育者と話しをして聞き取りをしていく中で、保育者が何につまずいているのかわかるので、助言しやすいのではないかと伝えた。 |
| ②テーマに即して、適切な方法が採られているか、把握し、指導や助言を行う。 | | |
| ③適切に十分な記録が採られ、事実が捉えられているか、記録に基づき解釈や評価が行われているか、把握し、指導や助言を行う。 | | |
| ④テーマに応じた結果や考察が得られているか、研究成果は何であるのか、把握し、指導・助言を行う。 | | |

面接の中での気付いたことや、指導したこと等を具体的に記載する。

II. ①面接内容や指導・助言の内容、②スーパーバイズを実施してお気づきのことなどを、ご記入ください。

- ①副園長としての経験が●年目であるが、研修のことだけでなく、園内の事業である「預かり保育」に、少し不安を示している。園長先生との調整や保護者に対するの援助を行い、自信を持って取り組むことで不安は解消されるのではないかと指導した。
- ②副園長の園内での業務はかなり多く、それとともにこの研修を深める余裕がなく、その点で不安が生じているのではないかとと思われる。

(3) 評価の変化に見る受講生の課題と学び

①面接を終えたスーパーバイザーからの意見・感想

| 項目 | 内 容 |
|-----|---|
| 全体 | <ul style="list-style-type: none"> ①受講者の面接3回後の成果への期待度が大きい。 ②受講者の思いを聞くことは、スーパーバイザーとしての学びにつながる。 ③スーパーバイザーの評価には、実践（園内研究会等）での実習の様子を知ることが不可欠。 ④ 本人の悩みと評価項目についての内容を意識し、進める。 ⑤それぞれの課題に合わせ、面接時間の配慮をする必要がある。 ⑥受講者の思いを上手く引出すことは、難しい部分がある。 |
| 形式 | <ul style="list-style-type: none"> ①3人という少人数の面接方式や多様な立場からのスーパーバイズについて <ul style="list-style-type: none"> →受講者にとって、素直な課題を話す場となり、心理面のサポートや改善、解決方法の模索につながる。 →数名のスーパーバイザーからの面接は、より具体的な方法を探る手がかりとなり、モチベーションの向上へとつながる。 ① 多様な立場のスーパーバイザーが、それぞれの立場で助言することについて <ul style="list-style-type: none"> →具体的な解説策を見出すことにつながり、実践への活用に結び付く。 |
| 時期 | <ul style="list-style-type: none"> 1回目：10月～11月は、2学期が始まり各園にて実施した実績があり、第1回目の開催時期としては適している。 2回目：12月は、各スーパーバイザー園での実習実績がある時期であり、他園での実習経験を基に話合うことができ、より具体的な成果や課題を明確にすることへとつながる。 3回目：1月～2月は、本年度の取組全体を振り返ることで、次年度に向けての課題と方法について探ることができる。 |
| 体制 | <ul style="list-style-type: none"> ① 学識経験者が入ることで、専門的な角度からのご指導を受けることができる。 ② 多様な立場からの話を聞くというこの企画は、奈良市の実践者の質向上につながる。 ③ 自己の思いや悩みを話すことで、自己の振り返りや実践への思いや考えを整理ができ、次への課題や具体的な方策が見つけだされ意欲につながる。 |
| 1回目 | <ul style="list-style-type: none"> ① 悩みや課題の共有と具体的な改善、解決を焦点化することを中心に進める。 <ul style="list-style-type: none"> →悩みを受容しアドバイスしたことを、今後の活動の励みとする。 ② 悩みを引き出すことを中心としたため、評価項目に対する所見は、資料から読取ることとする。次回は、具体的な実践の姿を踏まえ面接できるので、より具体的にアドバイスする方法を探る。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・各項目内容については細かく聞くことができなかった。 ・次回は、具体的な実践の姿を踏まえ面接できるので、より具体的にアドバイスする方法を探る。 |
| 2回目 | <ul style="list-style-type: none"> ① 前回の面接や受講者振り返り資料、実習等の経験を踏まえ、受講者の持つ課題や成果を共に探り、明確化させるようにする。 ② 実習及び研修での様子を共に振り返り、次の実践へつながるよう具体的な指導を行うことで、具体的な見通しが持てるようにする。 ② 自己評価が低い受講者もいるので、受講者の頑張りを認めたり、成果を具体的に伝えモチベーションをあげたりすることで、更に自信を持ち取り組めるようにする。 ③ 振り返りシートに記載してある内容について、より具体的に話し合い、教育・保育内容についての自覚化を促す。 |

| | |
|-----|---|
| | <p><課題></p> <p>様々な実習を経験し、受講者自身が手ごたえを感じるとともに、取組へのアドバイス及び方向修正等を行う。</p> |
| 3回目 | <p>① 今までの実践を振り返り、自己の成果と課題について共に振り返りを行うことにする。</p> <p>② 本研究の成果と達成を実感し、抱く次年度への抱負と具体的な取組の方法等について受け止める。</p> <p>③ 受講者が、実習で得た経験を基に、様々な研修を自ら企画・運営したり、積極的に指導助言したり、カリキュラムの解説等を行う様子を認める。</p> <p><成果></p> <p>① 今までの経験の積み重ねが、確実な実践力及び自信となっている。</p> <p>② 受講者一人一人が確かな、今後の抱負を抱いている。</p> <p>③ 勤務園及び他の実践者の暖かい協力体制があり、多くを学ぶことができたことに感謝している。</p> <p>④ より多くの視野を持ち、今年他の受講者の仕方を刺激とし参考としながら、自己の取組の改善へとつなげようとしている。</p> <p>⑤モチベーションが高まったことで、伝えたい意欲やより分かりやすい伝え方の工夫をしながら話す姿が増えた。</p> <p>⑥ より広い視野のもと、実践に取り組んでいる。</p> <p>⑦ 課題と共に自己の成果を自覚し前向きに進めている。</p> <p>⑧ 自分なりにできる学びの姿を、園内の実践者にも伝えている。</p> |

②面接1回目～3回目の研修目的 及び 幼児教育アドバイザーの変容

| 開催回数 | 目 的 |
|------|---|
| 1回目 | <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイズ（幼児教育アドバイザー用）を活用し、受講者自身が自己の取り組みを振り返り悩みや不安な気持ちを受止めながら、<u>成長の姿の共有、課題の発見、具体的な手だての明確化</u>を図る。 |
| 2回目 | <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイズ第2回日用紙を活用する。 ・受講者自身が推進委員園での実習や自園での研修などを振り返り、<u>自己の成長や課題を自覚するとともに、更なる知識と技術の向上</u>を図る。 |
| 3回目 | <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイズ第3回日用紙を活用する。 ・活動全体を振り返り自己の活動実績や成果を認識することで、<u>確かな知識と実践現場への指導力の理解</u>を図る。 |

③自己評価とスーパーバイズ評価の変化

3回のスーパーバイズ時において、資質・能力の評定値と、捉えられる課題はいかに変化しただろうか。

スーパーバイズ実施時に提出される評価シートの記入に基づき、4名のプログラム受講者について、自己評価とスーパーバイズ評価を照合して、その変化を捉えたい。具体的には、一つには、それぞれの評定値に着目し、受講者の自己評定値と、スーパーバイズの評定値の異同をみる。二つには、それぞれがシートに記述する、資質・能力別の課題について、オープン・カテゴリーをコーディングし、課題カテゴリー別に変化をみる。課題の捉え方に関して、受講者自身と、スーパーバイザーとの間の異同をみていきたい。

1) 全体的傾向

受講者の自己評定値とスーパーバイザーの評定値については、第1回目及び第3回目の評価値にほとんど差位がない。第2回目への変動については、スーパーバイザーが受講者への課題や成果から判断した数値がつけられているが、実習が本格化する時期であることを踏まえ、モチベーションの向上等心理面へのサポートを中心としていたところである。各受講者にとって必要と考えられる項目への評価がでている。

受講者への評価全体を総合的に見ても、受講者の姿や課題を的確に捉えスーパーバイズしていたことを表している。

受講者の課題について、資質・能力別にコード化したところ、下記の課題カテゴリーが抽出された。

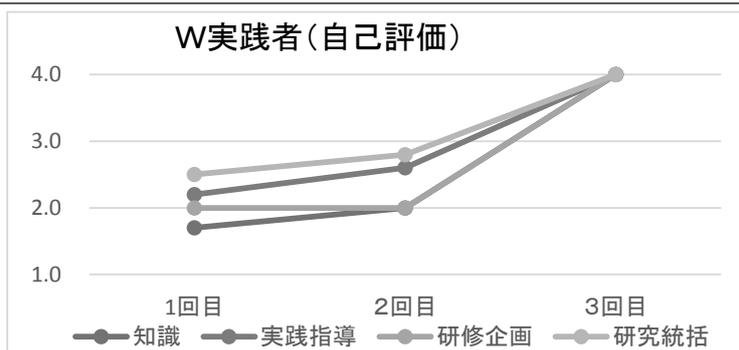
- | |
|--|
| (1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 a カリキュラムの理解 b 発達別観点理解 c 教育的意義の把握 d 伝える力 e 自信、意欲 |
| (2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力 a 説明、指導力 b 実践者の課題の把握分析 c 環境構成及び援助の把握 d 改善策勘案、省察力 e 自信、意欲 |
| (3) 実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 a 企画 b 進行 c 運営 d 改善策勘案 e 自信、意欲 |
| (4) 実践研究を推進・統括する能力（指導・助言） ①テーマや問いの勘案 ②指導、助言力 ③記録分析力 ④評価分析力 ⑤自信、意欲 |



2) 受講者の変化

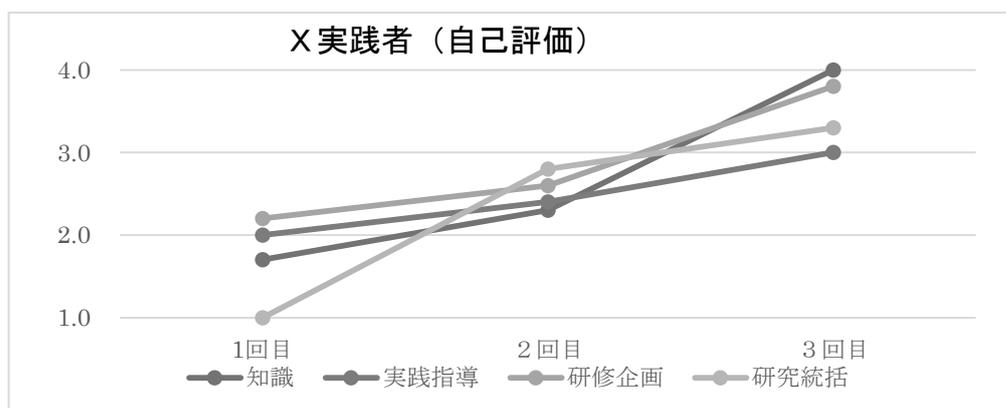
◇W実践者

| ＜幼児教育アドバイザー用＞ | | | | | | |
|-------------------------|---------------------------------|-----|------------------------------------|-----|-------------------------------------|----|
| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
| ①カリキュラムの理解 ④伝える力 | ・理解が未熟 ・説明力に不安有 | 1.7 | ・読込む等努力するが、不十分さ有 ・指導への自信が不十分 | 2 | ・カリキュラムと照らし確認、活用定着 ・繰り返し努力する中で前進 | 4 |
| ①説明、指導力 ②実践者の課題の把握分析 | ・指導の観点がおさえにくい ・課題に応じた指導に難しさ有 | 2.2 | ・分かりやすい説明に努める ・ねらいや課題の明確化に取り組む | 2.6 | ・個々に応じた指導を実現 ・幅広い視点からの分析 | 4 |
| ①企画②進行 | ・一人一人が考えられる研修の難しさ | 2 | ・前回の学びを園内研修で活用 | 2 | ・目的に合わせた企画運営の実現 | 4 |
| ①テーマや問いの勘案 | ・実践者によって理解に幅有 | 2.5 | ・事例よりテーマをしぼり話合う等整理実行 | 2.8 | ・繰り返し行う推敲による絞込み | 4 |
| ＜スーパーバイザー用＞ | | | | | | |
| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
| ①カリキュラムの理解 ⑤自信、意欲 | ・理解に努力有 ・解説に至らず不安大 | 2 | ・繰り返し読解き理解進む ・具体的に伝えられるに至らず不安有 | 3 | ・カリキュラムの活用や確認が常用化 ・落ち着きと自信 | 4 |
| ①説明、指導力 ④改善策勘案、省察力 | ・指導の観点が不明 ・実践と発達、指導計画との整合性難 | 2 | ・話し合いの中で共に考えながら探る ・具体的方策探りを実施する | 3 | ・実践者と共有しながら実施 ・具体的な方策を伝える | 4 |
| ①企画 ②進行 ④改善策勘案 | ・園内研修を活用 ・話しやすい場の構成 | 2 | ・自己の学びを生かす ・互いに出合う計画の実現 | 3 | ・より視野を広げ柔軟に対応し進行 | 4 |
| ②指導・助言力 | ・前年度までの成果と課題の把握に温度差有進行難 | 2 | ・個別にコミュニケーション取り実行 | 3 | ・見通しを持ち助言したり、共に試行錯誤し前進 | 4 |



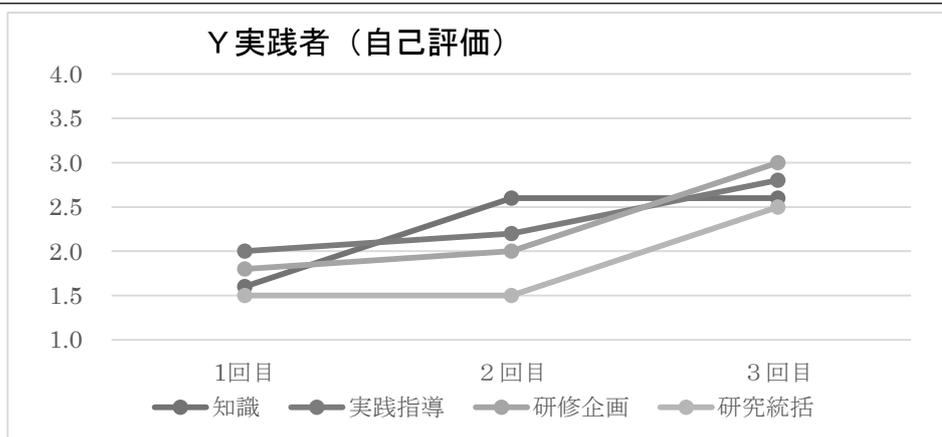
◇X実践者

| ＜幼児教育アドバイザー用＞ | | | | | | |
|-------------------------|--------------------------------|-----|------------------------------------|-----|---------------------------|-----|
| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
| ①カリキュラムの理解 ⑤自信、意欲 | ・熟読するが理解不足 | 1.7 | ・解説の実践を通して理解が進行 | 2.3 | ・園内、他園においても実践の積重ね | 4 |
| ①説明、指導力 ②実践者の課題の把握分析 | ・積極的な伝達実行 ・個人の差の把握と対応がしきれない | 2 | ・発達に応じた内容やねらい、評価について優先的に着目するが時間かかる | 2.4 | ・カンファレンスの工夫実行 ・指導の推進必要 | 3 |
| ③運営 | ・講習での学びを繋げる工夫必要 | 2.2 | ・実績を積重ねる努力必要と感じる | 2.6 | ・参加者に合わせた工夫 | 3.8 |
| ①テーマや問いの勘案 | ・具体的な進行や内容が定まらない | 1 | ・事例研修や公開保育を実施する中で焦点化を実施 | 2.8 | ・テーマに沿った研修を行うによる高まり合い | 3.3 |
| ＜スーパーバイザー用＞ | | | | | | |
| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
| ②発達別観点理解 ③ 教育的意義の把握 | ・幼児理解の推進 ・自己研鑽必要 | 2 | ・前向きに取組を積重ね成果が出ている | 4 | ・カリキュラムとの照らし合わせによる理解有 | 4 |
| ①説明、指導力 ④改善策勘案、省察力 | ・伝え方の工夫 ・全体の指導計画の把握と改善策必要 | 2 | ・伝える手法の獲得により自信保持 | 3 | ・相手に気付かせる工夫や自信繋げる指導の推進有 | 4 |
| ②進行 ③運営 | ・研修の進め方が不明 | 2 | ・講義や実習等の学びを生かした進行の工夫を実施 | 4 | ・丁寧な準備や情報収集の基に運営 | 4 |
| ①テーマや問いの勘案 | ・方向を見定め進行することに課題感じる | 2 | ・学びを取り入れた進行為工夫 | 3 | ・常に意識し取り組みを継続させる | 4 |



◇Y実践者

| ＜幼児教育アドバイザー用＞ | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------------|-----|------------------------------|-----|-------------------------|-----|
| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
| ①カリキュラムの理解 ④伝える力 | ・理解が未熟 ・言葉での解説が困難 | 1.6 | ・保育実践現場での向上 ・意識はあるが自信が不十分 | 2.6 | ・理論・実践の繋がり ・次へと繋げる意欲 | 2.6 |
| ②実践者の課題の把握分析 | ・初対面者での判断が難しい | 2.2 | ・自分なりに課題を見つけ実践 | 2.2 | ・参加者の経験を踏まえた指導実現 | 2.8 |
| ①企画 | ・自信での計画立案は困難 | 1.8 | ・企画の方向性が見えたので、実践 | 2 | ・自分なりに企画運営し実現 | 3 |
| ⑤自信、意欲 | ・不安が大きい | 1.5 | ・指導を受け前進中 | 1.5 | ・自身にて成果や課題を見つけ繋げる | 2.5 |
| ＜スーパーバイザー用＞ | | | | | | |
| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
| ①カリキュラムの理解 ②伝える力 | ・理解に努力有 ・言葉での解説が困難 | 2 | ・カリキュラム意義に不十分有 ・伝える意思が見える | 3 | ・努力し、期や発達の姿を理解 | 3 |
| ①説明、指導力 ④改善策勘案、省察力 | ・説明への説得力不足 ・経験や新しい見解から勘案 | 2 | ・実践者に沿った助言の勘案 | 3 | ・実践者に応じた助言の実現 | 3 |
| ①企画 ③運営 ⑤自信、意欲 | ・困難さを感じている ・伝達への不安を抱いている | 2 | ・自分なりの立案、伝達 | 2 | ・参加者の学びを意識した研修を実施 | 3 |
| ⑤自信、意欲 | ・意欲はあるが、自信の不足 | 2 | ・考えすぎる兆候があるが、少し改善 | 2 | ・仮設分析の大切さを実感し、取組む | 3 |



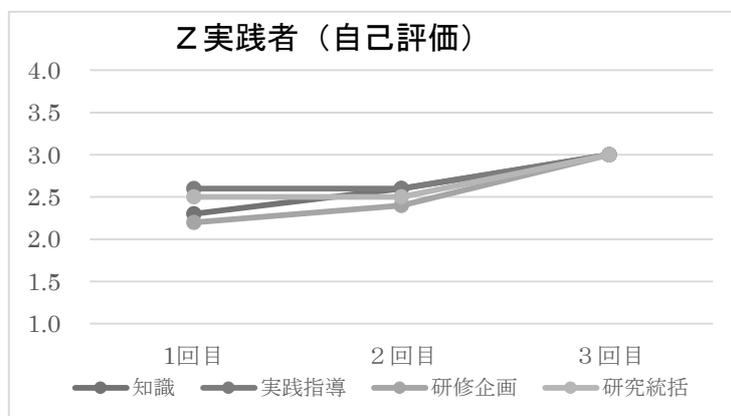
◇Z実践者

<幼児教育アドバイザー用>

| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
|---------------------------|------------------------------|-----|-------------------------|-----|-------------------------|----|
| ①カリキュラムの理解 ④伝える力 | ・読み解きに努力必要 ・自分の言葉での伝達必要 | 2.3 | ・読み解きが進行中 ・自分の言葉で伝達中 | 2.6 | ・実践と照らし意識 ・意欲的に伝える工夫 | 3 |
| ②課題の把握、内容分析 ④改善策勘案・省察力 | ・提出物のみでは難しい ・指導演と実践との整合性難 | 2.6 | ・伝え方の工夫 ・課題の伝達、苦慮中 | 2.6 | ・積極的な取組 ・共に考える姿勢 | 3 |
| ①企画 | ・不安が大きい | 2.2 | ・研修時間の不足 | 2.4 | ・ニーズや課題に応じた勘案 | 3 |
| ①テーマや問いの勘案 | ・不安が大きい | 2.5 | ・記録のとり方提案中 | 2.5 | ・繰返し行う議論や実践者間での研修 | 3 |

<スーパーバイザー用>

| カテゴリー | 1回目 | 評価 | 2回目 | 評価 | 3回目 | 評価 |
|----------------------------|-----------------------------|----|-------------------------------|----|--------------------------------|----|
| ①カリキュラムの理解 ②伝える力 | ・理解に努力有 ・自己研鑽必要 | 2 | ・各期の理解が広がる ・自信が伴い、実行有 | 3 | ・課題を明確に持ち、次に続ける工夫有、理解に繋がる | 4 |
| ③実践者の課題の把握分析 ④改善策勘案、省察力 | ・正誤の判断に迷い有 ・指導演と実践の整合性有 | 2 | ・実践の姿を省察する努力有 ・多方面から見る努力必要 | 3 | ・他の実践者と共に、高め合う ・助言に自信が伴ってきた | 4 |
| ①企画②進行 ③運営 ⑤改善策勘案 | ・迷いや不安有 ・自信の体験より計画化図る | 2 | ・無理をなく参加者を生かした研修の在り方を工夫 | 3 | ・職員参加型の研修の工夫 ・振り返りと改善策を常に実施 | 3 |
| ①テーマや問いの勘案 ②指導、助言力 | ・視点の再考が必要 ・意思統一を図り、共有化必要 | 2 | ・テーマを再考案し、職員全体に呼びかけ進める | 2 | ・職員の意識改革を目指した進め方や働きかけ有 | 3 |



4. 市外研修

幼児教育アドバイザーの研究部員6名が、先進地におけるブロック別研修会を視察した。

実践者の資質と専門性の向上を図るために、実践者のライフステージに応じた基本研修を柱とし、理論と実践を連動させた共に学び合い、学びを深める取組等について視察を通して学んだ。

経験年数別にした各ステージの実践者が、当日は共に参加して行う研修内容であり、事前オリエンテーション、保育参観、カンファレンスを取り入れたグループ協議、ミドルリーダーの振り返りを視察することで、本市で実施している「こ幼保合同研修会（保育観察・研究協議等）」の企画・運営や、実践研究の推進・統括を行うにあたり、学びを生かすことができた。

- ・視 察：高知県安芸郡芸西村立芸西幼稚園
- ・日にち：平成27年11月30日（月）
- ・参加者：幼児教育アドバイザー6名

（市立幼保連携型認定こども園2名、市立幼稚園1名、市立保育所3名）

（1）先進地での研修体制

- 基礎・基本から学び、連続していくプログラムによって、幼稚園教員等の資質・専門性の向上を図ることを目的としている。
- 基本ステージ、ミドルステージ、管理職ステージの各ステージごとに、具体的な研修目標を定め、理論と実践を連動させて学びを深めている。
- 保育参観前にオリエンテーションの内容についての話があり、午後の協議につながる実践内容の見方（協議の視点）についても話があり、研修の目的の共通理解が図られていた。
- 協議の視点については、「よかった環境構成や実践者の援助」「理由となる子供の姿」「明日の保育につなげるためにプラスしたい環境構成と実践者の援助」に付箋を色分けして視点を定める。
- カンファレンス（協議）では、ミドル1年次・2年次と、ミドルリーダーのベテラン教員とがバディーを組み、カンファレンスを進める中で討議が行き詰った際、ミドルリーダーが助言するようにされていた。また、協議前半には、良かった点を挙げ、肯定的な意見を出し合うことから始められていた。

（2）学びを生かした企画運営と統括力の発揮

市立幼保認定型認定こども園、市立幼稚園、市立保育所が合同で行う「こ幼保合同研修会」において以下のような工夫と改善、成果が見出せた。

①新企画の立案

1) 公開保育による保育観察後のカンファレンス方法の工夫

- ・これまで行ってきたカンファレンスの視点（子供の姿、実践者の援助、環境構成の工夫）を、援助及び環境構成、援助及び環境構成を取り上げた理由、明日につながるヒント及びプラスしたい援助や環境構成に変更する。
- ・カンファレンス時に付箋を用いてパネルに表示して協議してきた方法から、テーブルに画用紙・マジック・付箋を用いてワークショップ形式に変更する。

2) カンファレンス進行担当者

- ・各学年別のグループ数を増やし、少人数制で意見が出しやすい環境をつくる。
- ・各グループには、進行統括役として、幼児教育アドバイザー1名、副園長1名をペアで配置する。

②アドバイザー講習での経験を生かして

1) 講座1講座2：幼児教育アドバイザーに求める4つの資質能力から捉えた気付きと学び

- ・カリキュラムの理念：期の子どもの発達の姿や「めざす子どもの姿」がカリキュラムに沿って共通理解できるように話の方向付けを行う。
- ・指導助言：実践者間で気楽に話し合える環境づくりを行う。

- ・企画運営：視察での学びを生かして、各グループのアドバイザーが事前に研修の視点や方法等の検討を行い、共通理解して当日に臨む。
- ・進行統括：焦点整理と共に学ぼうとする姿勢を保持する。

2) 講座4：研修で得た方法を生かす

- ・実習を振り返り、次回への課題や改善点、手立ての工夫等を明確にイメージし、新たな課題を携えて次の講習や実習に臨めるようにする。
- ・1グループ（4～5人）で話し合うことで、講習経験やスキルに関係なく、より確かな実践力と指導の手立てについて、探索し確認することができた方法を取り入れる。
- ・分かりやすい言葉や画像での表現、正確な内容の伝え方の工夫（ワークショップ形式を取り入れる）、明日の実践に生かせる内容について（話し合いの焦点化）、参観者の視点や感じ方や見てほしい意図等“どこを強調し伝えるか”を意識して進行し、そのための表記の仕方についても工夫する。（付箋や記入の際の表記の仕方）

3) 講座5：指導助言の立案とカンファレンス協議の観点

- ・実践の事実を捉える。（誰にとっての事実か）
- ・カンファレンス内容の焦点化を図る。
- ・表示を工夫して順序立てて話の内容を組み立てる。

4) 講座6：カンファレンス協議の進行と統括の観点

- ・ポイントを絞って参加者に投げかける話し合うテクニック。
- ・様々な方法や見方、幅広い考え方。
- ・順序を追う見方や様々な評価の仕方、焦点化した簡潔な伝え方。
- ・順序立てた話の組立て方。
- ・実践者の年齢、経験年数、熟知度を測り進行する力。

5) 講座7：進行に当たっての着眼点の工夫

- ・各年齢の発達の様ならでの「実践者の援助と環境構成」「子供の姿がどのように変わったか」に焦点を当てて進行する。
- ・子供の姿・実践者の援助・環境構成について、共通の内容を集め、実践を捉えていく上でより重要な視点を選ぶ。
- ・参加者の思いを聞き、自分なりに考えられるようにする。
- ・テーマを定めることで、参加者の意見・まとめ等が進めやすくなり、議論も深まる。
- ・話の組立て方や、わかりやすい話の仕方等、限られた時間を有効に使う工夫が必要である。
- ・事前に自分の気付きや考えをまとめ、参加者の考えと対応させる。

6) 講座8：カンファレンス協議の具体的な効果

- ・話しやすい雰囲気や環境の工夫をつくることで、経験年数にかかわらず意見が出し合えた。
- ・事前に園種が混合するようにグループ編成をし運営したことで、いろいろな視点から話し合うことができた。
- ・表示の工夫を行い、可視化することで、話し合いのポイントが見え、共通理解がしやすかった。
- ・ペアを組んで進行者と補助するものと複数で行うことで、進行を互いに補いながら進めることができた。
- ・少人数制による話し合いの充実が図れた。

③視察の効果

視察当日までに積み重ねてきた幼児教育アドバイザー講習で、身に付けてきた資質能力の向上につながる気付きや学びを経験の一部として自身に蓄積してきた中で、先進地による効果的研修方法を視察することで、自身の「学び」から、これから「生かしたいこと」へとかわり、その後の演習や実習で積極的にアイデアを取り入れ、幼児教育アドバイザーの企画運営や統括力発揮につながった。カンファレンスの進行の様子も、ゆとりをもってグループ全体の状況を把握した安定した姿が見られ、研修進行での観点を意識して取り組むことができており、幼児教育アドバイザーとしての役割を感じて研修の充実を図ることができた。

第Ⅲ部

【試行版】

幼児教育アドバイザー育成プログラムの 評価

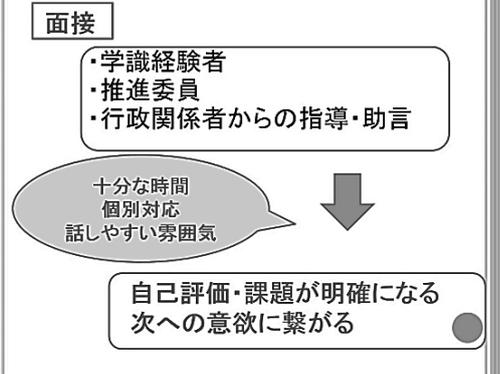
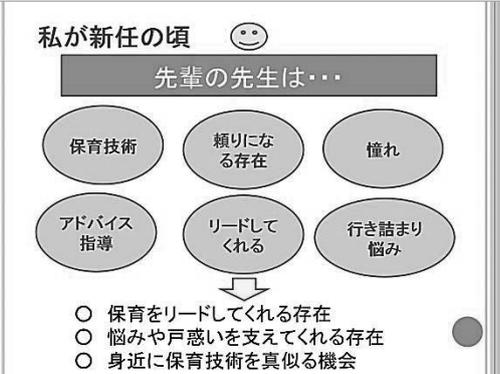


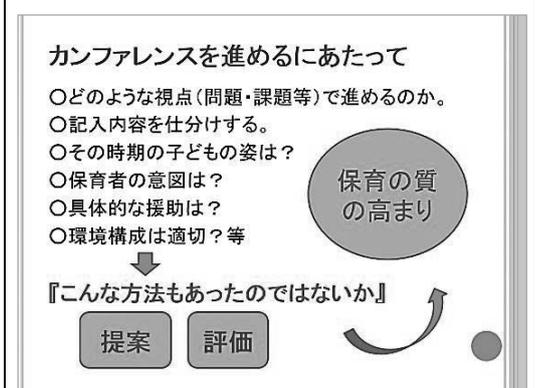
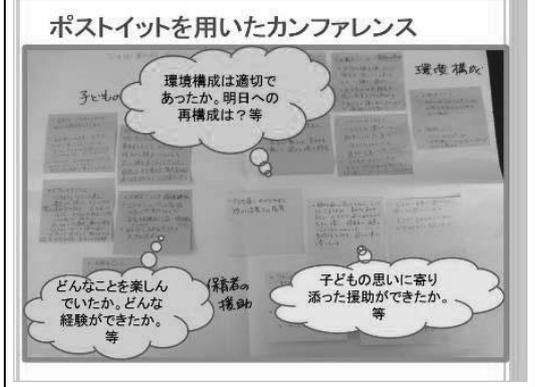
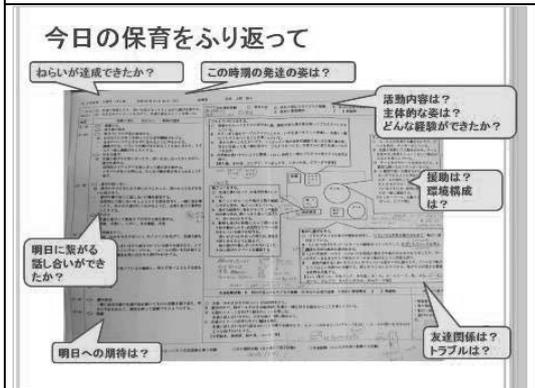
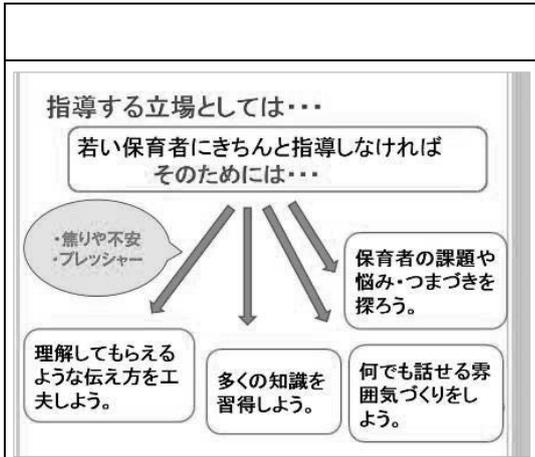
1. 受講者の取組と成長

それぞれの受講者は、【試行版】育成プログラムにどのように取り組み、自らの成長を捉えているだろうか。キャリアの異なる3名に焦点を当て、成長の過程を示す。

(1) S 保育者の取組と成長

◇「学びをつなぐ：私の役割」（経験 35 年・副園長職 4 年目）

| スライド | 自らの取組と成長 |
|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育に関する指導的役割の中核を担う中でも、園を支える現場のリーダーな立場として、取り組んできたことや学んだことについて報告する。 ・幼児教育アドバイザー受講者には、このような4つの資質・能力が求められる。 <ol style="list-style-type: none"> 1. カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有 2. 実践上の課題に応じて指導・助言する能力 3. 保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力 4. 研究実践を推進・総括する能力 |
|  <p>面接</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学識経験者 ・推進委員 ・行政関係者からの指導・助言 <p>十分な時間 個別対応 話しやすい雰囲気</p> <p>自己評価・課題が明確になる 次への意欲に繋がる</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・この研修を進めアドバイザーとして専門性を高めていく過程においては、学識経験者、推進委員、行政関係者の方々の温かいバックアップや、面接での、アドバイザー活動を進めるにあたって、進むべき方向への示唆があった。 ・面接を受ける前には、アドバイザー講習や活動実習を振り返りシートに進捗状況や現在の課題を書き込み、自己評価を行った。 ・最初の頃は、4つの資質・能力のどの項目においても自分自身に自信がなく不安要素が残る振り返りになってしまいうことが多かった。 ・面接を受け指導を受ける経験は今までに無く、緊張感を感じていたが、個別に十分な時間をとっていただき、困っている事や悩み、課題等について丁寧な助言や指導をいただいた。 ・また、思いを出しやすい雰囲気を作ってくくださったことで素直に悩みや思いを話すことができ、回を重ねるごとに自分の取組を振り返る中で、自己評価・課題が明確になり新たな気持ちでアドバイザー活動や実習を行うことが出来るようになった。 |
|  <p>私が新任の頃 ☺</p> <p>先輩の先生は・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> 保育技術 頼りになる存在 憧れ アドバイス指導 リードしてくれる 行き詰まり悩み <ul style="list-style-type: none"> ○ 保育をリードしてくれる存在 ○ 悩みや戸惑いを支えてくれる存在 ○ 身近に保育技術を真似る機会 | <ul style="list-style-type: none"> ・もう何十年前にもなるが、若いころには、共に教育・保育をする職場の先輩方は頼りになる大きな存在であった。常にリードしてくださる姿は憧れで、教育・保育が行詰まっている時や悩んでいる様子を察して、声をかけてくださった。教育・保育についてアドバイスを受け、子供の心をつかみながら楽しく教育・保育している先輩保育者の様子を横目に見ながら「私もやってみよう」と実践を真似る等、実際に見て学ぶ機会が多くあった。 ・今日、若い保育者が先輩・中堅の保育者から実践を学ぶ場が少ないという状況の中で、「どのように保育者の力を高めていけばよいか」という大きな課題がある。その改善という役割を担う私たちは、今回、幼児教育アドバイザー受講者として、自園、他園の園内研究会でのカンファレンスやカリキュラムの見方や解説についてプレゼンテーショ |



ンを行い学んできた。

- ・自園では副園長の立場として、若い保育者に対してきちんと責任のある指導に心がけなければならないという思いが常に頭の中にあり、焦りや不安、プレッシャーを感じたり、悩んだりしたことがあつたが、何でも話せる雰囲気作りをしながら保育者の課題や悩みを探ったり、自分の学んだことを理解してもらえようような伝え方を工夫するよう努めた。
- ・また、園内研究会に向けての指導案作成時には、奈良市立こども園カリキュラムと照らし合わせながら研修を進めてきた。

- ・具体的には、「何を育てたいか」「どんな経験をさせたいか」という観点に沿って担任から話を聞き、次の事柄について展開されるであろう教育・保育をイメージしながら、担任と一緒に細かく見ていくようにした。
 - ①「この時期の発達の姿とねらいが合っているか」
 - ②「この活動に関する環境は？」
 - ③「この場での援助は？」
 - ④「一斉活動は生活の流れに沿っているか？」等

- ・実践後の研修では今日の教育・保育を振り返り、それぞれの保育者が実践を見て感じたこと等をポストイットに記入する。幼児教育アドバイザー講習講座7での演習で、カンファレンス進行の実習を行った時の学びを、生かして行った。振り返りのポイントは次の通りである。
 - ①「こんな子供の育ちが見られたよ」
 - ②「自分ならこうした」
 - ③「援助の仕方良かったところ」
 - ④「話し合いのもち方」
 - ⑤「明日はこんな環境を出すといいのでは」

- ・カンファレンスを進めるにあたっては、付箋紙に記入されている内容を課題や問題提起、疑問等に視点をおいて素早く仕分けする。カンファレンス進行では、「特徴的なこの時期の子供の姿は？」「実践者の意図がどう絡み合っているか？」「どのような具体的な援助がされたのか？」「環境構成が適切であつたか？」等といったことを意識して行うようにしました。自園や他園のそれぞれの実践者の疑問や課題に関して「こんな方法があつたのではないか」と実習したことを生かしながら、提案したり、実践を振り返ったりする事ができた。

いろいろな視点から実践を評価し合うことは、見る側、見られる側、お互いに教育・保育の実践力を高めることにつながってきていると感じている。

実技的な研修

楽器の持ち方
扱い方について



絵画・共同画について

記録の書き方〈提案〉

一週間の遊びの経過がよく
わかるように(枠なし)

遊びの様子・環境構成などを振り
返り記録する(枠あり)

実践の場における指導・助言

工夫していること
心がけていること

- ◆安心して保育ができる環境をつくる。
- ◆保育者の思いを聞く。
- ◆迷っていることにわかりやすくアドバイスをする。
- ◆問題や課題は共に考える。
- ◆モチベーションを上げる。
- ◆「意欲」「やる気」が湧いてくる言葉かける。
- ◆頑張りや成果を認め、自信に繋げる。



コミュニケーション

・園内での研修では、具体的な実践に生かせる研修も積極的に行った。子供に指導を行う場合の実技の基礎基本を学び合おうということで楽器の持ち方や鳴らし方や絵具の溶き方・絵をかくとき場の構成の仕方などの実技研修を園内研究会に含めた。

・講義の中で、記録についての話があったが、「奈良市立こども園カリキュラム」の履歴としての実践事例を読解き研修を積重ねることは、若い保育者が、明日の実践への手がかかりを見出したり、事例を書く上で参考となる。また、日々の記録を書くことから「子供の経験したこと」を振り返る事ができ、子供の活動の意味を捉えたり、発達を見取る手がかかりとなることを実感した。

・記録の取り方についての研修では、それぞれの保育者に工夫が見られた。記録しやすい形式を工夫したり、子供の興味関心を追いながら、環境を用意したことで遊びがどう変わったかを記録した。

①自分の実践のポイント、明日への課題、見直したことに線を引き。

②動画や写真で記録を残す。言葉を多く拾って書込む。

③記録する上で自分自身工夫していることを出し合い情報交換する。

④明日へつなげる実践の視点が明確になるようにポイントを絞って記録する。

⑤継続させること等子供理解を深めることの大切さについてみんなで再確認する。

・保育者は、実践を進めるにあたって教育・保育の内容や進め方、行事の持ち方、保護者への対応等いろいろな問題や悩み、課題を抱えている。よく、「先生どうしたらいいですか」と相談を受けるが、保育者の経験年数に応じて教育・保育の技術や組立て、環境構成や援助の仕方など、アドバイスが違ってくる。こども園では人数が多く、限られた時間の中では一人一人の実践者に丁寧な指導助言ができにくい等の課題があるが、一緒に考え少しでも良い方向に導けるように心がけている。

・実践の場で、指導・助言する際に、

①安心して実践ができる環境をつくること。

②実践者の思いをまず聞くこと。

③迷っていることにわかりやすく方向性を示すアドバイスをする。

④問題や課題は共に考える。

⑤モチベーションを上げる。

⑥「意欲」「やる気」が湧いてくる言葉かける。

⑦頑張りや成果を認める。自信につなげる。

といったことを工夫し、心がけたりするようにしている。

・このように、コミュニケーションを大切にしたい実践者への関わりは相手を知ることができる。様々な情報を引出すことで相手にかかる言葉や関わり方など行動の選択肢が多くなり、問題解決につながっていることがわかった。

| | |
|---|--|
| <p>他園の園内研究会 《若い保育者への指導》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○保育についての指導 <ul style="list-style-type: none"> ・保育のふり返り ・環境や援助についての指導 ・明日への見通しなど ○カリキュラムについての説明 <ul style="list-style-type: none"> ・枠組みや見方 ・「めざす子どもの姿」「3つのコンセプト」など ○指導計画を見直すにあたってのポイントなど | <ul style="list-style-type: none"> ・他園での園内研究会では、若い保育者が理解しやすい工夫として今日の実践から例をあげて説明するようにした。 <ol style="list-style-type: none"> ①カリキュラムの枠組みや見方 ②「めざす子どもの姿とはどんな姿か？」 ③「内容は3つのコンセプトに基づき子供の経験を記入するとよい」等 ・また、カリキュラムを一緒に見ながら環境構成や援助等についても確認し合い、「明日の実践でどのようなものを環境として準備したらよいか」ということについても実践を振り返りながら具体的に指導した。カリキュラムと指導案が反映されているか確認し、事例の書き表し方等について研修できたことは、発達や援助・環境構成等について理解をするための良い経験になった。 ・実践指導のカンファレンスでは、どこにポイントをあて焦点化していくかということの難しさや、より多くの意見が出るような進め方の工夫、いろいろな意見が交わされる中で、それぞれの実践者の疑問や課題に関して、「こんな方法があったのではないかと提案していくことの必要性を学ぶことができた。 |
| <p>幼児教育アドバイザー研修を終えて</p> <p>《成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○アドバイザーとしての自覚がもてた。 ○実践につながる力が身についた。 ○専門的な知識や技能を高めることができた。 <p>《課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○奈良市の保育・教育の充実をめざす。 ○保育を担う保育者の質の向上をめざす。 <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">保育指導に努める</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・高知県への視察を経験した中で、改めて人を育てるという意味では、マンネリ化にならず、若い保育者からたくさんの意見や思いが引き出されるような研修の持ち方を考えたり、工夫したりする必要がある。参加者が学ぼうとする姿勢や向上心を持って取り組める体制づくりに努めなければならないということを再確認した。 ・今、私はこの1年間、幼児教育アドバイザーとしての専門的な知識や技能を高めるために講義・演習・実習等の講習を受けたり、多くの方からの指導を受けたことで、幅広い知識や実践につながる力が身に付いた。今後、教育・保育を担う多くの現場の保育者が、質の高い教育・保育を展開していく実践力となるように、幼児教育アドバイザーとして積み重ねてきた知識や専門性を生かし、指導に努めていきたいと思う。 |

(2) T保育者の取組と成長

◇「明日につなげるために」(経験30年・副園長職1年目)

| スライド | 自らの取組と成長 |
|------|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・「アドバイザーってなんだろう?」「どんなことをするのか?」「指導助言をするの?」「研究をまとめるの?」「研修を企画するの?」と不安がいっぱいであった。始めは、大学の授業を受ける気分で受身の気持ちでの参加であったが、講習で学んだことを基に、まず今の自分にできることはどんなことなのか、自分なりに考えてみることにした。 ・「カリキュラムについての解説技能についての講習」や、「実践者や実践園への指導・助言」についての講義を受けた中で気付いたこととして次のことがある。 <ol style="list-style-type: none"> ①人に伝えるには、自分がカリキュラムをしっかり読もう ②指導・助言するときには、園の実践者たちの日誌や事例を読み、必ずアドバイスとともに良いところを伝えよう |

①-3 実際に説明しよう!

具体例を出してみよう



間をとってみよう

問いかけてみよう

わかってもらえたかな～?

- ③昨年まで現場にいたことを生かし、実践者や子供との距離も近いはずなので、コミュニケーションをたくさんとろう
 - ④初心者だから自分から積極的に学ぼう
- この4つのことを基に、自園やスーパーバイザー園での実習で、自分なりの仕方を探り取り組むことにした。

園外での公開保育・カンファレンス・カリキュラム説明



普段の姿がわからない...

まとめられるか...

担任とコミュニケーションが取れていない...

意見が出るかな?

- ・10/31 奈良市立こども園カリキュラム研究大会の3歳児未満の分科会、また自園の学習会の場や都祁こども園で説明をした。回数を重ねるごとに、読む際の間の取り方や、メンバー構成に応じて問いかけたり、具体例を入れたりできるようになった。
- ・人前でパワーポイントを使って説明するたびに、「あれ？乳児と幼児ではポイントが違う」との疑問や発見があり、再度カリキュラムを見直したり、カリキュラム策定委員に尋ねたりし、読解きはまだまだ奥が深いと感じ、学ぶことが多い。

第2回・12/15

自分たちが気づくには...

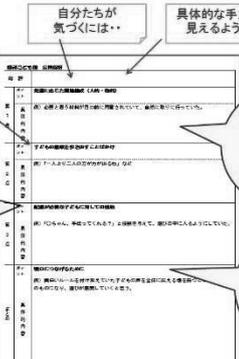
具体的な手立てが見えるように...

参加者の意見を引き出すには...

例を挙げてわかりやすくする

明日につなげる具体的な手立てを探る

配慮が必要な子どもへの関わりを話し合う



- ・園内の研修だけではなく、園外で公開保育・カンファレンス・カリキュラムの説明をした。勤務園であれば、子供たちの日頃の様子がわかっており、担任ともコミュニケーションが取れている。しかし園外では、カンファレンスではどういった意見が出るか、うまく助言できるか、どんな風にまとめればいいのかなど、不安でいっぱいでした。
- ・スーパーバイザー園に2回行き実習することができた。「助言しなくては、まとめなくては」と、カンファレンスでは自分の意見を言い過ぎたように思った。スーパーバイザーに意見を求め、まとめてもらおうとした場面もあった。実際に行ったカンファレンスでは、参加者の意見を引き出すことや、その場での気づきを大切にすることが抜けていた。
- ・2回目の実習では、3歳児2クラスの公開保育を見た。1年目の担任であり、“自分で気付いてほしい”し、“見に来た保育者たちが意見を出しやすい雰囲気を作ろう”と意識した。事前に、スーパーバイザーの園長に公開保育クラスの様子を聞き、3つのポイントに絞り、シートを作成できるようにした。配慮が必要な子供が多くいるクラスであり、ポイントを絞り、より具体的な意見が出るようにと考え、例を挙げておくようにした。ポイントを絞ったシートを使用することで、カンファレンスを進めることができました。
- ・シートの最後に「明日につなげるために」という欄を作成したことで、具体的にどうやったら明日からの実践に生かせるか、前向きに話を進められたのが良かった。カンファレンス時、3歳児の様子の参加者からは、保育者のかかわりや援助に対する具体的な対処方法が出され、実践の批判で終わらず、みんなで考えるカンファレンスになった。

園の問題点からテーマを考えてみる

自園の大事にしていきたいことって何?

研究テーマの推進=大事にしていることをまとめる

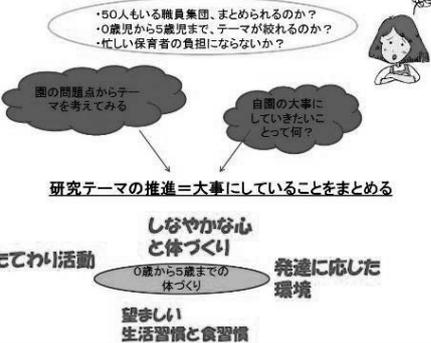
しなやかな心と体づくり

発達に応じた環境

望ましい生活習慣と食習慣

たてわり活動

0歳から5歳までの体づくり



- ・自園の研修では、50人もいる実践者集団に加え“現場にいない立場でどうまとめるか、忙しい実践者たちの負担にならないか、0歳から5歳と幅広い年齢層の中テーマが絞れるのか、視点がずれていないか”などについて考えました。
- ・話し合いを進める中、今の保育所の子供たちの問題点は何か、昔に比べての違いは何かなどいろいろな意見を出していくことで、この話し合いが園で大切にしたいことへとつながっていた。
- ・講義9～11の研究に関することの中で学んだことを生かし、



自園の研究は、話し合いで出された「大切にしたいこと」を意識しまとめた。

自園では「体づくり」を研究テーマに、体ほぐし、リズム運動、異年齢教育・保育の中での体づくり、また食育を含め実施している。

- ・利点としては、一つのテーマを基に、みんなで取り組むことで、園全体で教育・保育の方向性を確認できること、実践への姿勢やねらいを意識できるようになること、各学年の発達の姿が見えること、である。また、若い実践者もベテランの実践者も互いに教えあったり、実践者の間で共通理解できることが良かった。
- ・今後も、園の取組をどう系統化しまとめるか、また、大人数の実践者と同じ目線でどのように進めるか等、試行錯誤ではあるが今後も進めていくようにする。



- ・今回の経験で自信になったことには、次のことが挙げられる。
 - ①日誌や事例を読む事で教育・保育が見え、コミュニケーションが取れる。
 - ②研究テーマをまとめることで教育・保育の共通認識ができる。
 - ③公開保育を行うことで、問題解決の糸口が見える教育・保育の相談窓口になれる。
- ・今後、この1年間での学びを生かし、個人としてではなく組織として定着させるよう取り組むことが、実践現場の質を高めていくことにつながると確信している。

(3) U保育者の取組と成長

◇「幼児教育アドバイザー講習を通して」経験年数7年保育者（アッパー・ミドル・リーダー）

| スライド | 自らの取組と成長 |
|---|---|
| <p>カリキュラムの理解、そして伝えるために 幼児教育アドバイザー講習 講座1・2 カリキュラムについての専門知識 講座3・5 カリキュラムに関する解説技能の向上・実践の指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「カリキュラムの理念と内容に関する専門知識の保有」に係る講習 ○カリキュラム解説のための資料作成 ○自園・他園における解説の実践 他 <p>＜実践での指導の視点＞ ・「奈良市立こども園カリキュラム研究大会」でのカリキュラムについての解説を基に話を進める。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・現在5歳児のクラス担任をしているので、担任としての目線で本講習を受講して感じたことや学んだことを話す。 ・「カリキュラムの理念と内容に関する専門知識の保有」に係る講習では、青和こども園で行われた「奈良市立こども園カリキュラム研究大会」や各園にて奈良市立こども園カリキュラムを解説するための資料を作成し、自園・他園において資料を基に解説した。 |
| <p>解説1回目 左京こども園 園内研修会</p> <p>●カリキュラムの全体について解説</p> <p>「毎日の保育をするにあたってこのカリキュラムをどのようにいかにしていくのか」について、もっと具体的に視点をあぐく話し合いを進めたいと、より理解が深まりますよ。</p> <p>・何となくわかるけど・・・ ・なんとなくしかわからない ・毎日の保育につながらない</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・他園園内研修会での実習では、スーパーバイザーから、「毎日の実践をするにあたってどのようにこのカリキュラムを生かしていくのか、といった点に視点を絞って話を進めていくとより理解が深まるのではないかと指導を受けた。 この経験を生かし、2回目の実習では口頭だけでは分かり難いと考え、簡単な資料を作成してポイントを伝え易くするとともに、自分でも話の内容を整理して伝えられるように工夫した。 |

自園・他園での園内研修会の企画・運営を通して

▶ 幼児教育アドバイザー 講習
講座 5・7 カリキュラムに関する解説技能の向上
実践指導

- 「実践上の課題に応じて指導・助言する能力」
「保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力」に係る講習を生かしカンファレンスを進行する
- ビデオを使用したワークショップ
- 自園・他園において園内研修会の企画・運営を実践 他

具体的な指導の視点を持ち、実習に参加する。

指導・助言1回目
左京こども園 園内研修会

<実践での指導の視点>

- ・ 明日以降への保育の改善への意欲を生む研修をする。
- ・ 強い口調や否定的な言い回しを避ける。
- ・ 実践者の意図や疑問をしっかりと聞く。
- ・ 意見を共有しつつ、可能性を示唆する。

実践してみると・・・難しいなあ

<課題>

カンファレンスの進め方
⇒ 意見を整理し、結論を導き出す
⇒ 時間配分
指導・助言
⇒ 何を伝えるべきか、要点を絞る

- 協議の具体的な視点を知らせる。
- 保育を観察するポイントを記入できるシートを作成し活用する。

スーパーバイザーの先生との面接

○ 担任だから出来ることを考えよう

**担任だからこそ
できること**

⇒ 担任間での連携を深めること

<実践の視点>

- 担任間で日常的に気軽に保育について話し合える場をつくる。
- 振り返りの時間を設け、担任全体で情報を共有し環境の見直しを図る。

「クラス担任」という立場で受講して

- ・ 自身の保育力の向上
- ・ 園全体を見る視野
- ・ 学びを伝え、互いに学び合う場づくり
- ・・・担任間の連携を深め、まとめていく力が
ついた！

・ 指導案について話すことや、日頃自分が事例や指導案を書く際に参照しているページや注意点（例えば、年齢に応じたカリキュラムの見方については、「めざす子どもの姿」は各期の終わりに、そうやってほしい姿であること）等を伝えることで、少しでも実際に事例や指導案を書く時に役に立つ内容になる。

・ 講座 5～7 の中で「明日以降の実践の改善への意欲を生む研修になるよう、強い口調や否定的な言い回しを避け、実践者の意図や疑問点をしっかりと聞き出し、共有しつつ様々な可能性を示唆していくことが大切である」と学んだことを踏まえ、参加した保育者の見取りを基に、子供の発達や興味に合った援助・環境構成を考えていけるように意識して話し合いを進めた。

・ 上手く論点を絞れず、協議を通して結論を出すことができなかった点や指導案について十分に話し合う時間が取れなかった点などの課題を基に、自園での研修では、事前に、

1. いいなと思った環境構成・実践者の援助
2. そこで子供は何を楽しんでいたのか
3. 明日の為に変わるといいと思う環境等、

という協議の視点を決めておき、具体的に実践のポイントを記した用紙を配布し、実践を観察するようにした。

・ あらかじめ協議の視点を知らせておいたことで実践後の振り返り協議では各保育者が見取った子供の姿を基に子供が何に興味を持ち、遊んでいたのか話し合い、机や遊びに必要な道具の配置などどのように環境を再構成するとよいか具体的な案を考えることができた。

・ 面接時、「担任だからこそできることを考えてみてはどうか」の指導があり、改めて今までの取組などを見直した。昨年度の研究の重点に「子供がいきいきと遊ぶ姿とはどんな姿か保育者の間で話し合い、再度共通理解を深める」と挙げたのを見て、担任が連携を深めることなら発信していけるのではないかと考えた。

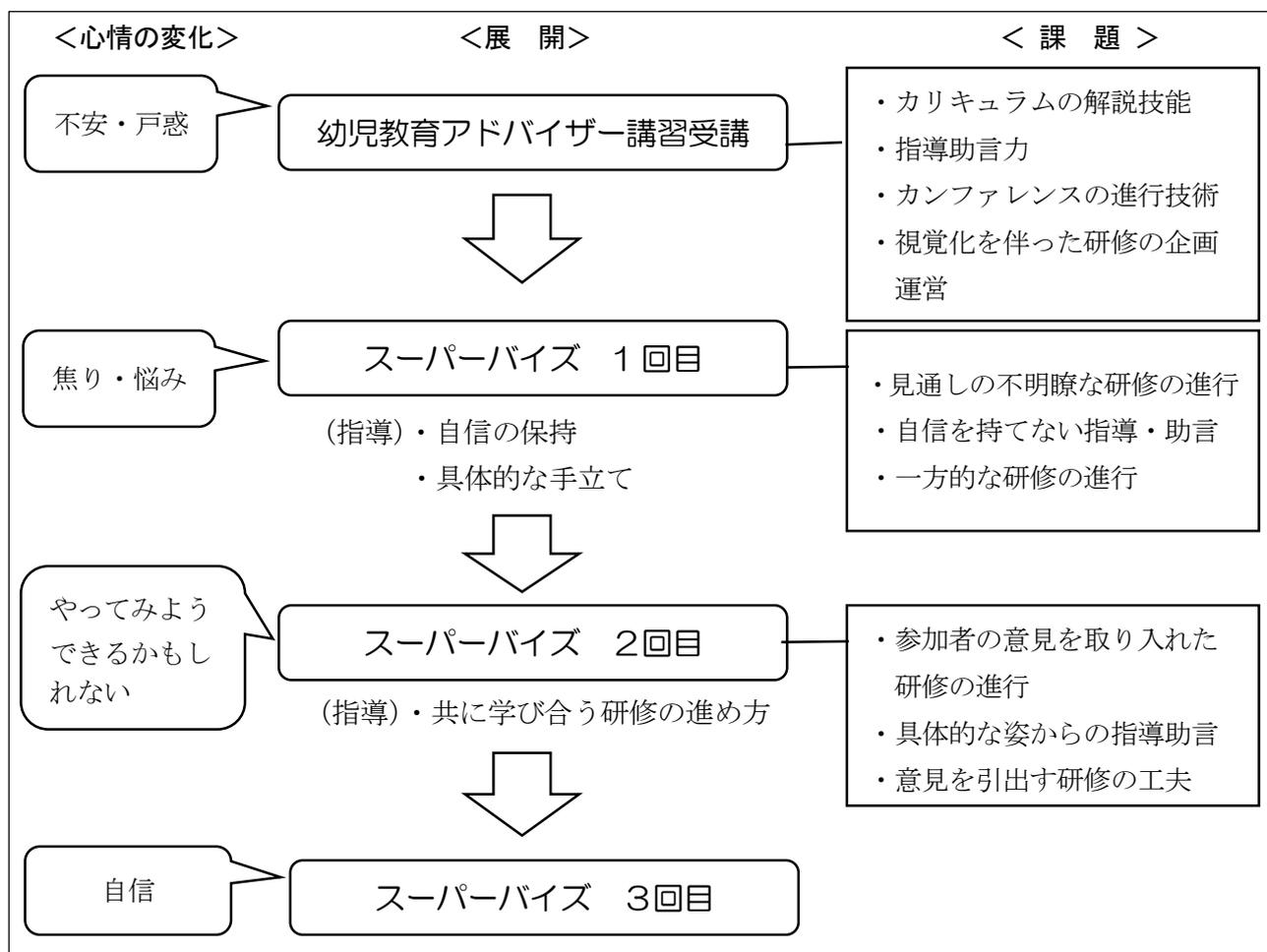
・ 担任同士が情報を共有し、振り返りができる環境を作れないかと考え、職員室に環境図を貼りその日気付いたことを付箋に書いて貼り付けられるようにし、担任同士での振り返りに利用した。振り返りの中では、情報を共有し担任全体で環境の見直しを図ることができた。

・ 自分の実践を見る力が付いただけでなく、子供の姿をしっかりと捉えて援助・環境構成を計画していくには、担任全員で協力することが大切であることを実感することができた。

また、これからさらに若い世代の保育者が増えていく中で、園全体を見る視野を身に付け、普段の実践について気軽に話し合い、学び合える場を作ったり、担任の思いと園長・副園長の思いをつなぐパイプ役になったりするなど、先輩保育者だからこそできることがたくさんあることに気付くことができた。

(4) 受講者の成長の過程

受講者は講義と実践を往還させつつ、どのように経験を積み重ね、幼児教育アドバイザーに向けた学び



を進めてきただろうか。前掲の報告より、受講者の<心情の変化>とその時々<課題>をまとめると次のように示すことができる。

受講者が講義や実習を積み重ねる中で、自己の姿等を随時振り返り、指導助言を受けたことや、言葉による意識化と課題の明確化を適時図ったことで、「自己の役割や責任」「発達や援助、環境構成」「指導助言やカンファレンスの仕方」「確かな実践技術」等についての自覚を促し、確かな知識や能力の獲得へとつなげることができた。

また、受講者自身で行う教材研究や工夫のみならず、スーパーバイザーが受講者の細かな心情の変化に寄添いながら、具体的な保育の姿を通じて、次回へとつながるサポートをしたことがより効果を生む結果となった。

実習の方法としては、自園での研修、推進委員園での研修と、相互に経験を積み重ねることで、段階を得て“指導助言をする”ことに慣れることができ、自信を持つという効果として表れ、そのことがより具体的な技能を身に付けようとする姿へとつながっている。

2. 受講者の自己評価

全受講者は、プログラムの参加中、次の記録を作成していた。

- ①講習については、各講座の終了後、自らの学修状況について振り返りシートを作成する。
- ②講習における実習と、アドバイザー活動実習については、実習記録を作成した。自らの指導・助言や、計画・実施や、企画・運営について、対象となる実践・実践者や研修参加者等についての状況把握と問題設定、指導・助言上の課題と方法の設定、実施時の状況と留意点、実施に関する評価等を記録した。
- ③スーパーバイズ実施時には、毎回事前に自己評価と反省・課題の記述を行う。
- ④プログラム終了時に、上記の記録を振り返り、総合的な自己評価を行う。

①と②については、第Ⅱ部の各講座における振り返りの資料とした。本項では、③と④について、記述内容に対してオープンコーディングを行い、カテゴリー（コード）を付した。さらにそのカテゴリーを集約して、上位カテゴリーをつくった。上位カテゴリーとしては、「幼児教育アドバイザーとしての専門性」「育成プログラムへの取組」「自らのキャリア形成」「自らの成長」の四つを抽出した。以下、受講者の自己評価としては、この上位カテゴリーごとに、抽出されたコードに沿って、集約された記述または代表的な記述をあげる。

（1）幼児教育アドバイザーとしての専門性

「幼児教育アドバイザーとしての専門性」については、力量形成が図られたと思われる点や課題などがあげられた。

カリキュラムの活用

- ・カリキュラムの特徴、構成、理念、内容を十分理解した上で実習に臨んだことで、カリキュラムと実践を照らし合わせた振り返りができ、発達に関する観点や教育的意義を意識した実践者にとって分かりやすい解説ができた。このことから、自身の学びを生かした工夫・改善・実行により、受講者と実践者双方の専門的知識の保有につながった。

指導助言・能力

- ・実践者による保育の記録と評価がカリキュラムまたは指導計画に対応しているか、実践者の熟達度に考慮して、共に確認し合いながら実践に基づいた十分な省察ができるよう継続した指導を行うようにしたことで、改善点や視点の明確化につながり、理解を深めることができた。

研修の企画・運営

- ・今年度本市で実施した「こ幼保合同研修会」「奈良市立こども園カリキュラム研究大会」「研究集会」は、企画・運営能力を高める有効な機会となり、細部にわたっての計画・立案を重ねてきたことで、参加者の経験を踏まえた進行や展開を工夫し、研修を深めることができたことから、自園での企画・運営にも生かされ、受講者自身の資質向上につながった。

研究の推進・統括

- ・自園の研究課題に基づいた実践研究を進めるにあたり、スーパーバイザーによるスーパーバイズは、受講者がテーマに応じた問い、方法、結果や考察、成果を捉えることができるよう、指導助言を行ってきたことから、研究課題に向き合い、十分な記録が採られ、自己研鑽の充実に努めることができた。

(2) 育成プログラムへの取組

「育成プログラムへの取組」については、プログラムに参加して、感じたことや良かったこと、苦しかったことなどがあげられた。

成果や効果

- ・自園や他園でカリキュラムの解説をしたことで、カリキュラムを活用し、実践と照らし合わせながら発達に応じた「めざすこどもの姿」やねらいを見直し、理論と実践を関連させ、指導助言に活用できた。

苦労したことや課題

- ・自園の実践者と自身の学びを共有し、実践者の意見を統括し、研修内容の充実及び浸透が図れるようにするための時間の確保に努めた。

(3) 自らのキャリア形成

「自らのキャリア形成」として、プログラムに参加した経験について、以下のような振り返りや位置付けが見られた。

受講によるキャリアの変革

- ・講義・ワークショップ・実習・演習と様々な内容が組み込まれた養成プログラム受講により、指導助言のポイントや実践記録の方法と工夫を意識した取組ができ、学びの効果を実感する。

スーパーバイザーによる学び

- ・スーパーバイザーは、受講者の園長との意思疎通を図りつつ、同じ方向での指導助言ができることがよかった。活動実習も「実践するごとに身に付く」「多くの経験の中から得るものがある」と感じ、受講者自身のやりがいや活力へとつながっている。そのためには、スーパーバイザーとしての役割を理解し、受講者の課題や方向の明確化を行っていくことが大切である。

今後のキャリアへの位置付け

- ・受講者による実践研究及び養成プログラム受講実績を生かした本市全域の保育者の資質向上に向け、幼児教育アドバイザーとしての役割を果たし、次年度に学びをつなげる。

次年度への希望

- ・調査研究と、本市の研修体制を一体とした新たな研修体制を整備し、人材育成の循環を図る。

(4) 自らの成長

「自らの成長」としては、講習全体を振り返り、自己の心境変化や成長について述べられていた。

講習や実習

- ・実習を通して、実践者や参加者が、振り返りや協議で得た気づきを生かしながら、ポイントとなる内容を提示し、分かりやすい伝え方を意識して、学びを明確化していく役割の重要性を再確認した。
- ・スーパーバイザーのサポートが自信につながり、保育者の資質向上に向け、自身の学びを伝えていく立場であることを自覚した。
- ・先進地視察を通して、自身の役割や講習・実習等の意義を振り返り、改めてその必要性を再確認した。

心境の変化や成長の自覚

- ・受講したことで、自分の役割を実感することができ、意欲や積極性が高まる自己の心境の変化を自覚している。また、この経験をどのように実践に生かしていきたいのか、方向性が明確となり、他の保育者にも伝えていきたい。

- ・教育・保育に対する考え方が以前と変わり、前進したと感じる。研修を積み重ねて専門性を高めることで、さらに「知りたい」「学びたい」という意識が強くなった。この調査研究の経験が自己のキャリアにつながったことを感じるとともに、この経験を生かし、次の世代にもつなげていけるよう、責任感が高まった。

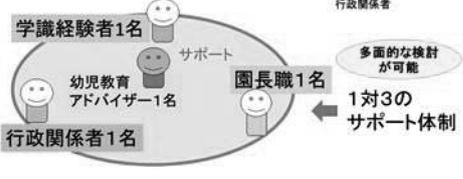
3. スーパーバイザーによる評価

スーパーバイザーは、スーパーバイズ実施後に実施記録を作成する。

(内容の詳細については、第Ⅱ部 3 スーパーバイズの実施を参照)

また、受講者一人当たり3回のスーパーバイズのほか、受講生の実習状況や、自園での活動状況について、適時評価を行いながら、受講者のメンタル面及び活動面へのサポートや指導・助言を実施した。スーパーバイズからみた受講者の成長過程をまとめると、以下のことが挙げられる。

◇2月6日 研究集会での報告より

| | |
|--|---|
| <p>スーパーバイザーから見た アドバイザーの成長の過程について</p> <p>◇ スーパーバイザーからの読み取り ◇</p>  | <ul style="list-style-type: none"> スーパーバイザーから見たアドバイザーの成長の過程について |
| <p>スーパーバイザーとは</p> <ul style="list-style-type: none"> 実践者(幼児教育アドバイザー)一人一人に対して講習や活動実習(園内研究会等)と平行してチームでスーパーバイズを実施する人達のこと <p>スーパーバイザーの役割</p> <ul style="list-style-type: none"> アドバイザーの実践に対して、継続的に経過を観察する 成果や課題についての早期発見や解決の手助け 「知識、技術」の習得のサポート <p style="text-align: right;">スーパーバイズ</p> | <ul style="list-style-type: none"> スーパーバイザーとは、実践される幼児教育アドバイザー講習受講者一人一人にチームで実施し、講習や活動実習している時に、平行してスーパーバイズを行う。 スーパーバイズとは、アドバイザー実践について継続して実践の経過を観察したり、その成果や課題について、早期に発見や悩みについて解決できるよう手助けしたり、様々な知識や技術の習得のサポートを行うことである。 |
| <p>スーパーバイザーの構成員</p> <p>学識経験者 4名 こども園長、幼稚園長、保育園長 8名 行政関係者 7名(こども園推進課)</p> <p>奈良市幼児教育推進委員会のメンバー 推進委員長・副委員長 推進委員 行政関係者</p>  | <ul style="list-style-type: none"> スーパーバイザーは、学識経験者4名、市立こども園園長・幼稚園長・保育所長8名、行政関係者(こども園推進課)7名で構成されていて、このメンバーは奈良市幼児教育推進委員会の委員である。 この図のように1人の幼児教育アドバイザー講習受講者1名に、学識経験者1名・園長職1名・行政関係者1名が1グループとなり、担当の受講者を1対3でサポートしている。 |
| <p>スーパーバイズ実施方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 3回の面接(チェックリストを活用) <ul style="list-style-type: none"> 講習1~4回終了後 第1回 講習5~8回終了後 第2回 講習9~15回(研修企画・報告)後 第3回 アドバイザーが保育者に向けて指導助言を行う実習として、スーパーバイザーの園で「園内研究会」を行う <ul style="list-style-type: none"> 園長職(8名)のスーパーバイザーの園 1~2回 | <ul style="list-style-type: none"> スーパーバイズ実施方法は、受講者より提出された振り返りシートやチェックリストを活用し、年3回の面接を行う。 また、受講者が、実践者に向けて指導助言を行う実習として、スーパーバイザー園において園内研究会での実習を1回から2回行う。スーパーバイザーは、受講者の指導の様子や対応の仕方などを観察し、スーパーバイズしていく。 |
| <p>面接(第1回)を終えて</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回 面接 アドバイザーの悩みや不安 <ul style="list-style-type: none"> カリキュラムの理念や内容についての理解が不十分に感じる 園内研修や他園での指導助言を行うことの自信がもてない 職員との信頼関係や教育保育観を通しての園運営の悩み 自園における企画運営面での不安や戸惑い 等 スーパーバイザーからの助言 <ul style="list-style-type: none"> 自ら学ぼうとする意欲を認め、経験を重ねることの自信へ 職員との信頼関係の構築・組織の確立・時間の有効活用のアドバイス 着実に可能なことから少しずつ実践していくこと | <ul style="list-style-type: none"> 第1回目の面接では、受講者の悩みや不安は、カリキュラムの理念や内容についての理解が不十分に感じる。園内研修や他園での指導助言を行うことの自信が持てない。実践者との信頼関係や教育・保育を通しての園運営の悩みや自園における企画運営面での不安や戸惑い等である。スーパーバイザーは、その悩みや不安を十分に聞いた上で、自分の思いを出せる雰囲気づくりに努め、自らの言葉で語るようにして助言を行った。 |

| | |
|--|---|
| <p>面接(第2回)を終えて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2回 面接 アドバイザーの研究課題の進捗状況 <ul style="list-style-type: none"> ◇ 職員とのコミュニケーションを図り、信頼関係の構築への努力 ◇ 先進地視察を経て、目指すところを知り、意欲を示す ◇ 自ら常に課題を見つけられるようになり、解決に向け工夫 ◇ 自らの研究に積極的で前向きな姿勢 ・スーパーバイザーからの助言 <ul style="list-style-type: none"> ◇ 保育者自身に考えさせるような助言・指導を目指すように ◇ 学識経験者による様々な角度からの指導と課題へのアドバイス | <ul style="list-style-type: none"> ・第2回目では、進捗状況を聞き取っていく中で、受講者の一人一人の実践状況の違いが見られた。一人一人が置かれている立場や性格にも関わって、自信を持って進めている人や、講習やワークショップで身に付けたことを戸惑いながらも実践していこうとしている人がいた。回数を繰り返していく中で、自らのものにしていく人もおり、その時の、受講者の姿はこのように、…それぞれについては次のように…アドバイスをを行った。 |
| <p>園内研究会でのアドバイザーの様子</p> <p>スーパーバイザー(園長職8名)の園において 各園1~2回 実習の様子(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 公開保育での気付きを引き出すための記入シートの用意 <ul style="list-style-type: none"> 発達に応じた環境構成、意欲を引き出す言葉かけに絞っての話し合い配慮が必要な子どもに対するの援助、明日につなげるための環境 ◇ 公開保育を行った保育者に対して <ul style="list-style-type: none"> 保育者の言葉かけについて、立ち位置、子どもの反応を伝えるカリキュラムに沿った発達の姿を伝える ◇ 奈良市立こども園カリキュラムの読み解き・説明 <ul style="list-style-type: none"> 発達に即して、具体例を話しながら説明 | <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイザー園において実習をした時の様子として、講義やワークショップで学んだ内容を生かし、例えば記入シートを用意したり、実践者の言葉かけやカリキュラムに沿った発達の姿を伝えたりする様子が見られた。また、「奈良市立こども園カリキュラム」については、しっかりと自ら読み解き説明しようとする姿があった。 |
| <p>スーパーバイザーから見たアドバイザーの成長</p> <p>面接や研究会を繰り返し、実習や演習したことで</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3名のスーパーバイザーからの助言を参考にし、実践保育上の課題に応じて具体的に指導・助言する力が向上 ・自園での研究会や他園での指導経験から、実践保育者の資質を高めるための研修を企画運営する力が向上 ・様々な視点から助言を受け、自身の課題への方向性やいろいろな方法を具体的に知りえることで、自らを確認したり、安心して助言できる姿に変化 | <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイザーから見た受講者の成長には、実践の課題に応じて具体的に指導助言する力が向上したように思われる。また、自園での研究会や他園での指導経験を繰り返し、企画運営する力も見られた。様々な講義やワークショップの実習を行う中で、一人一人が自らの研究課題に向けて真摯に取り組む姿勢が見られ、不安であった様子から安心して助言できる姿に変化してきた。 |
| <p>スーパーバイズを行って</p> <p>面接(2回)と園内研究会での指導助言を行って</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期間を区切って記録や評価を積み重ねたことで、アドバイザーが課題を克服し、自信をもち、成長する姿が見られた。 ・面接を1回目2回目と行う中で、その時期のアドバイザーの研究への意欲や自ら向上しようとする姿が見ることができた。 ・アドバイザー個々の力量の差は見られるが、各自身の経験から丁寧に説得力のある指導を行おうとする姿があった。 ・アドバイザーとしての役割が明確となって、実践する姿が見られた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイザーとしては、受講者への面接と園内研究会の場を用意することで、受講者が課題を克服し、自信を持ち成長した姿があった。また、意欲を示して取り組み、自ら向上しようとしており、幼児教育アドバイザーとしての役割を明確に持ち、実践している姿を見ることができた。 |
| <p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイズの実施 <ul style="list-style-type: none"> アドバイザーへのチームになってのアドバイス 個々の悩みに応じた助言 自己評価が低いアドバイザーへの励ましの必要性 アドバイザーの自信や意欲を生かす助言 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>アドバイザーの変容(成長)へ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーバイザーの役割である、スーパーバイズの実施は、受講者の成長への支援になったのではないかと。 ・今後も、このような実践していく人から幼児教育アドバイザーが数多く生まれることで、奈良市の教育・保育の質と、実践者の資質の向上が図られるようにしていきたい。 |

4. 研究協力園の保育者による評価

- ・受講者による指導・助言は、実践者にどのように受け止められたのか。実践の研修などにおいて指導・助言を受けた実践者については、園ごとにその意義と課題について所見を作成した。
- ・カンファレンスや事例報告会、公開研究会の研修に参加者については、研修の成果に関してアンケートなどに協力を得た。
- ・アドバイザー活動実習については、園内において、カリキュラムに関する解説、実践上の指導・助言、研修の企画・運営、実践研究の遂行に関して、それぞれ評価を行う。

◇ 受講者の勤務園での指導・助言後への評価

指導力の向上 3.3

企画・運営能力の向上 3.1

研究統率力の向上 3.0

理論解説力の向上 3.2

(十分達成、達成、課題散見、課題山積)

受講者の勤務園よりの評価では、上記の評価項目において受講者のほとんども、「十分達成できた」「達成できた」という成果が見られた。しかし、課題の残る部分も見られるため、今後に向けての更なる改善や取組の工夫が必要である。

(1) 幼児教育アドバイザーの資質・能力に関する・評価

①カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識

- ・自園や他園でカリキュラムについて、プレゼンテーションによる解説を経験し、「奈良市立こども園カリキュラム」の内容や理念について自分自身の理解を深めることができた。また日々の実践において、子供の姿と照らし合わせ、実践の振り返りや自園の指導計画にカリキュラムをどう活用すればよいか、実践者同士で学び合えるようにしていったことで理解を深めることができた。
- ・自園・他園でプレゼンテーションによるカリキュラムの解説を経験し、その後の感想や質問を受ける等の経験により、自己を高めていただいたと感じている。学んだことを人に伝え実践につなげてもらう事の難しさと、つなげてもらえた時の喜びも感じる事ができた。更に自身を高めていけるように努力を続けていきたい。

- ① カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について、その意味するところを十分に理解している。
- ② カリキュラムにおける幼児期の教育の位置づけと必要性について、発達の観点と教育的意義から十分に理解している。
- ③ 上記①及び②に関して、実践に照らした理解と、実践への活用の在り方の理解を有し、実践に照らして解説することができる。

- ・実際の保育や事例研修でのカリキュラムに照らし合わせた解説では、1学期に比べて回を重ねるごとに理解が深まり、分かり易く伝えられるようになってきた。
- ・パワーポイントを使ったカリキュラムの説明の研修では、自園を含め何度か実施する中で読込みを深めている。

- ・「奈良市立こども園カリキュラム」の策定から関わられると共に自らの保育実践からの専門的知識も含め、十分に理解し、解説する力がある。
- ・常に奈良市立こども園カリキュラムに沿った実践・評価・改善を意識し、幼児教育の重要性を語ることができる。
- ・カリキュラムの核となる「生きぬく力」をもつ幼児の育成を目指すため、特徴・構成・理念を十分に理解し取り組みを進めている。また、そのためにも率先して各種研究会等にも積極的に参加している。
- ・実践に照らし合わせた説明が、されていてわかりやすかった。
- ・自分なりに例なども入れながら、初めての人にもわかりやすいように解説しようとの努力をしている。

②実践上の課題に応じて指導・助言する能力

- ・指導・助言ということ意識して実践を観察することで、普段は「自分なら…」という立場で見ていたものが、実践者はどのような意図を持っているのか、子供が何に関心を持っているのか、この時期の発達に適した援助・環境構成であるか、と客観的な視点を持つて見ることができるようになった。そのことが指導・助言だけでなく、自分の実践を振り返る力にもなっている。
- ・実践者とのコミュニケーションを大切にしながら思いを聞き、困っていることに対して解りやすく方向性を示したり、アドバイスをしたりすることを心がけている。何よりも実践に対する意欲や自信につなげるようにしていくことが必要である。

- ① 実践者の実践上の課題について、実践者個人と、学年と、園のそれぞれの次元から勘案している。
- ② 実践者の熟達を見極め、短期的長期的な課題を把握している。
- ③ 実践者の作成する指導計画について、年齢や期、子どもの状態を反映しているか、また、各項目の記述は適切かつ簡潔であるか、などについて把握している。
- ④ 実践について、指導計画と整合しているか、保育の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が実施されているか、などについて把握している。
- ⑤ 実践者による保育の記録と評価について、指導計画に対応しているか、具体的事実を踏まえているか、十分な省察が行われているか、改善への方策が見いだされているか、などについて把握している。

- ・保育内容や環境構成について、明日の保育にいかしていけるよう指導、助言に努めた。
- ・自園の指導計画作成や事例研修では奈良市立こども園カリキュラムを熟知した指導を担任に行うことができた。進んで保育観察を実施し、子どもの具体的な姿を通して環境構成や援助の在り方を指導している。
- ・柔軟な援助や環境構成の在り方をきめ細かく指導しようとする努力が見られるが、各担任の保育や思いから理解し、よりの確な助言や、保育者が意欲的に環境構成しようとするように導いたり、共に行ったりして指導できるようになってきている。
- ・子どもの発達を知り、指導計画を見直し、より充実した指導計画となるようにも担任とともに実践できるようになってきた。
- ・カリキュラムの柱である3つのコンセプトを常に保育指導の中心に据え、日々の保育の中でも実践者の相談にのったり、共に考えたり、自ら保育の在り方を示したり知らせたりすることに力を入れ、適切な助言をする姿が伺えた。

- ・実践上の課題がいろいろ見えてきても助言、指導につなげることが本人としてはむずかしいと感じているようである。良いと思われることは、言いやすいが改善点をいうときの適切な指導や助言、又、そのタイミングなどむずかしいようだ。
- ・各学年、クラスの子どもの実態、変化を常にキャッチし保護者、担任とのやりとりが絶妙である。職員一人ひとりの特性をとらえ、クラス会議、時には個別に丁寧な課題解決への助言アドバイスが各年齢に行き届いている。

③保育者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力

- ・講座を通して、研修の目的に対する理解が深まり、目的に応じて研修の在り方を検討することができるようになった。カンファレンスの中で議論のポイントを絞り、参加者全員が共通理解して結論を導いていけるように、さらに経験を積んでいきたい。
- ・幼児教育アドバイザー受講者としてプレゼンテーションをする機会が多く、その都度テーマに沿って自分の実践や学びをどのようにまとめていくかを考慮し取り組んだ。自分の思いを伝えることの難しさを感じながらも、相手に伝わる読み文を考え、発表できたことは良かった。

①時宜に応じた教育や保育の課題や、保育者自身の課題など、各種のニーズや課題に応じてテーマを掲げ、進行や人員配置などの計画を立てる。

② 参加者の経験を踏まえ、学びの在りようを勘案して、計画を立てる。

③ 研修の実施の際は、参加者の経験や課題、参加の目的に応じて、進行や展開を工夫する。

④ 研修の実施の際は、参加者同士の学び合いや相互の啓発を促したり、状況に応じてテーマや問いを絞ったりして、研修を深める工夫をする。

⑤ 研修の終了後には、研修を評価し、次の研修に活かすための改善点や参考点を得る。

- ・見通しを持って進んで園内研修を保育者に提案し、事前の議案・資料作りを整えることができる。他園（スーパーバイザーの園）での園内研修に参加して力を発揮していたと思う。
- ・研修の運営では、もう少し積極的に強い思いで企画・運営する必要があると感じるが、進行などにも成長が見られ、自信を持って、研修を進められるようになってきている。
- ・参加者同士が互いの意見を出し合えるよう仲介となり、雰囲気づくりができるように努めていて成果があった。
- ・研修を評価し、次の研修に活かせるよう改善点などを得る努力が今後は必要である。
- ・実践者の経験年数を考慮し、課題意識をもって園内研修を行い、学びにつながる指導助言に努める姿が見られた。
- ・全体研修をする前に会議を持ち、研究テーマに沿った課題を各クラスに伝え、研修を深めるために、クラスの現状と課題をあらかじめまとめておくことで課題を全体のものとする。
- ・グループ討議などをいれながらみんなの意見を引き出し、担当で進行をするなど進め方の工夫をすることで積極的に参加させるなど積極的に会議に参加してもらった体制を作っていた。保育者の気付きや、やり方への助言を自分なりにまとめ、後日も伝えていた。
- ・研修時間の設定や参加の仕方などの工夫をし、研修や会議の計画を立てている。

④実践研究を推進・統括する能力

- ・方法や進め方について実践を通して学び、テーマ設定の重要性や研究の方向を示したり、方法を決めたりするためのアドバイスや助言をしていく力を得ることができた。早速次年度の取組に生かしたい。
- ・実践者が一つ一つの実践内容について自身を振り返り、ねらいを意識し、それを達成するためのプロセスや成果についても情報共有しながら進められるようになってきた。

- ① 適切なテーマと研究上の問いが立てられているか、把握し、指導や助言を行う。
- ② テーマに即して、適切な方法が採られているか、把握し、指導や助言を行う。
- ③ 上記②に即して適切で十分な記録が採られ、事実が捉えられているか、また、記録に基づき解釈や評価が行われているか、把握し、指導や助言を行う。
- ④ テーマに応じた結果や考察が得られているか、研究の成果は何であるのか、把握し、指導や助言を行う。

- ・保育者たちの記録や記述を丁寧に読み解き、表現の仕方を指導できている。
- ・記録の大切さを担任に伝え、適切な解釈や評価の必要性を具体的に伝えられるようになってきている。
- ・園の研究テーマに即して取り組みが進めやすいように、自らが観点を示し、研究・研修の進め役としての力を発揮することができた。
- ・研究テーマに沿った内容での園内公開保育を各クラスに促し、保育の検証や保育者の動き、環境設定など考える場を持っている。まだ全体で深めるまでにはいたっていないが、継続課題として話し合いの場を持っている。
- ・今年度のテーマとしている実践研究での各クラスの保育を把握し、一緒に参加することで適切な指導、助言をしようとしている。又、各クラスからの実践報告をまとめて会議を持ち、資料提供しながら、子ども達にどの力が育ったかをみんなで話し合い、それを評価している。

(2) 受講者勤務園への影響：園長及び保育者の評価

教育アドバイザーの役割と位置づけ

- ・本園は今年度より幼保連携型認定こども園となり、幼稚園でもなく保育所でもない「こども園」をつくるのだという「意識改革」がすべてにおいて大きな課題となったと思う。その中で柱においておきたい「奈良市立こども園カリキュラム」を幼児教育アドバイザー受講者が中心となり進めていくことの重要性を感じた。
- ・受講者の研修が多く大変な時もあったが、自分や園内の職員の資質を高める大変良い機会であったと思う。職員の資質の向上を目指し、アドバイザーとして研修される場ともなるよう園内研究会を半日1学期と2学期に実施し、成果があった。しかし、もっと研修の場や時間をつくり、内容も充実させたいという思いがある。時間的な余裕を持ってじっくりと深まりのある研修ができればと思う。
- ・個々の実践者の熟達度にあわせて、基本的な姿勢や取り組み方について、丁寧にわかりやすく指導・助言する姿が見られた。保育者同士が情報を共通理解し実践を進めることができるよう、職員室に環境図を設置し、自らが積極的に書込みの更新に努めるなど工夫する姿が見られた。
- ・会議において、実践者が日頃思っているもなかなか実行に移せてなかった事などを、「やってみよう」

と思えるような助言で実践者の背中を押している。

- ・全クラスに常にかかわっていくのは難しいが、自分の気付いた子供の姿を担当等に伝え、実践の気付きにつなげていかれるように声かけしていく。
- ・課題などを作成するのは大変そうであったが、目を通し、助言してもらえることを励みとしていた。
- ・園における日々の仕事をこなしながら、プレゼンテーションをしたり、他園のカンファレンスをしたり、面接を受けたりしたことは、確実に受講者の力や自信になっていると感じる。
- ・確実にカンファレンスの仕方や事例の指導の仕方などが変わっていると思う。職員もポストイットに書くなどをし、他の方の考えも知る事ができ自分の学びになっている。
- ・園において、この幼児教育アドバイザーの役目を全うしていた。50名の保育者集団のまとめ役、要としていつもソフトに温かく指導、助言にあたった。全保育者から慕われる存在に、さらに磨きがかかったと思われる。

幼児教育アドバイザー育成プログラムについて

- ・実践者の資質向上に向けた取組を支援する幼児教育アドバイザーは、各園に必要であると考える。
- ・奈良市として次年度も継続してアドバイザーを養成していくのなら、今年度の研修方法や内容を更に伝えてほしい。

受講者から指導・助言を受けて（勤務園の保育者の感想）

- ・実践事例をとおして、コンセプトや子供の発達について丁寧に指導を受けることができた。
- ・研究を進めていくリーダー的存在であった。
- ・実践の評価や改善の仕方を教えてもらえる。事例の記述を指導してもらえる。
- ・実践経験からの指導があり、具体的で分かり易く参考になることが多かった。
- ・自分が気付かない視点からの子供理解の仕方などが参考になった。
- ・園内研究会では、一方的な指導だけでなく、各自が意見を言いやすい雰囲気をつくってもらい、意見を交換できるのが研修になる。また、自分ならこうするかなという助言の仕方が良かった。
- ・自主的に県外研修にも参加し、学んできたことを実際の保育現場で実現するなど、リーダーシップを発揮し、大変熱心に取り組まれていた。このことが、実践者にとっても良い刺激となり、園内でも多くのことを学ぶ機会となった。
- ・日誌を確認し、子供の様子をしっかりとらえているか、環境設定はどうかなど気付いたことを付箋に書き、毎月クラスに返して見直しを促していた。それが、実践者とどういいう見通しを持って取り組んでいるかの話をするきっかけになっていた。付箋の中身をきっかけとして相談しやすかった。
- ・自園の研究テーマについては、実践者と子供の姿について話し合ったり、アドバイスをしたりする姿も多く、相談にのってもらいやすかった。
- ・カリキュラムの解説やプレゼンテーションが分かりやすく、もっと読み込まなければいけないと思った。カリキュラム、コンセプト、事例への助言、アドバイスを直接やりとりしてもらい、より具体的に自分のものに少しずつなりつつある。

5. 外部評価

学識経験者を招聘し、幼児教育アドバイザー受講者の資質向上に関する指導・助言と問題提起を受け、また、本育成プログラムの開発過程と実施状況について指導と助言を受け、改善点や課題を明確にした。

また、奈良市における「こ幼保合同研修会」にて、受講者が今までの学びを基に、研修後のカンファレンスの仕方について企画・運営実習をしたところ、下記のように、評価を得た。

この結果を踏まえ、今後の研修会でのカンファレンス及び話し合いの在り方を考えていきたい。

◇2月6日「研究集会」学識経験者の話より

園内の研修のあり方を見直しながら、実践者一人一人が教育・保育に関する力量を磨くことが、専門性を高めることへとつながる。まず、一人一人の意識改革を目指すには、園長が説得力を持ち、園全体で対応することが望まれる。中堅保育者の活用の仕方によっては、園の教育力も大きく変わってくる。

- ①園内の経験の差をどのようにして支えていくのか。
- ②実際の実践とカリキュラムとのバランスをどのようにとって進めていくのか。
- ③若い実践者とどのようにコミュニケーションを図り、客観的に事実を捉え進めていくのか。

これらの点を、今後も意識し、取組を進めていくことが大切である。

今後の課題としては、以下の4点が挙げられる。

- ①実践者が育つ場をどのように組織化していくのか。
- ②実践者のキャリアステージに応じた研修をどのように保障していくのか。
- ③実践者の育つ場を意識して、どのようにコーディネートしていくのか。
- ④実践を客観的に捉え、自分なりに考え選択する力をどのように保持できるようにするのか。

6. 【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラムの総合評価と改善点

(1) 総合評価

①受講者の成長

・本研究において12名の受講者は、15のプログラムで講義と演習及び実習を受講した。その中で、実践と振り返りによる評価及びスーパーバイザーや外部の評価を用いて、個々の成長や課題を明確にし、確かな視点を持ち取り組めるようにしたことで、次のような変化と成果を受講者自身が感じるとともに、中堅層の保育者としての役割を自覚しながら質の向上へとつなげることができた。

ア) 指導的役割や指導の目的等が明確となり、具体的な手立てや手法を身に付けることができた。

イ) 実践を見る目や仕事に対する姿勢が変化した。

ウ) 自分なりの仕方や可能性を見出せるようになった。

エ) 自己の研修のみならず、園内全実践者が相互に学び合える機会を作り出していける。

オ) 学びを計画的に生かしながら、次の課題に向かえる機会を、自分自身で企画運営できる。

カ) 「一緒に実践を考え、呼びかけ、取り組む」存在が、幼児教育アドバイザーであると、その役割を確信した。

キ) 自信とキャリアアップにつながった。

・どの受講者の評価の中にもあったことの一つに、プログラムをともに受講する他の受講者やスーパーバイザー等、気持ちを共感し、悩みに寄り添い支えてくれる存在の必要性がある。

様々な課題に取り組む中で、受講者の抱える不安と戸惑いは大変大きい。その大きなプレッシャー中、同じ目線で見つめ、考え、話し合える存在があるからこそ、主体的な学びを繰返し、次への具体的な方途を探ることができた。また、同じ目的を持ち、成果や課題を明確にしながら支えてくれる人とのかわりの中で学ぶことは、受講者自信の自信（モチベーションの向上）へとつながり、幼児教育アドバイザーとしての資質保持をより可能とした。

今後、本市の研修とともにこのプログラムをミドル級の育成システムとして位置付け、園内及市研修ブロック間での互いの高まりをベースとした、市全体としての持続可能な研修体制を構築しながらその（幼児教育アドバイザー）実用性を高めるとともに、幼児教育の質の向上と人材育成に取り組むことが必要であると考えている。

・今回の研究では、受講者を副園長及び上級ミドルリーダーより選出し、開発に取り組んだ。実際に本講座での「指導・助言力の育成場面」での実習振り返りからもあるが、多様な教育・保育内容の工夫や経験年数の差に対応できる具体的な指導を可能とするためには、受講者自身の経験の積み重ねが必要である。

今後、20年程度の経験年数を持つものを第一対象者としながら、各受講者の課題に応じて学べるようにする。また、受講者間で互いに学びの伝達を図ることのできる場を増やすことで、さらなる熟達が可能となるようにする。

現在、本市には若年層の保育者が多く、幼稚園・こども園・保育所と多様なニーズに基づく実践が開発されており、そこでの実践者の経験や学びにはまだまだ課題が残るとというのが現状である。今後、これらの園の保育者が1つになり、こども園として共に実践を行っていく現状の中で、このような各園の

特色や取り組みを生かしつつ、学び質の高い実践の実現に向けて確実に進めていくためにも、今年度同様、受講者層の選定を行い、本プログラムを活用しさらなる活用方法を探り広げながら取り組んでいく必要がある。

また、より参加しやすい各園での資質向上へとつながるような研修体制についても、考えていきたい。

・受講者数は小グループでの研修と受講者相互の学び合いを可能とするため12名としたが、今後、本市全体における研修体制と兼ね合わせ進行していく上で、少数人数園の研修への参加が困難になる等いくつかの課題が生じるため、受講者人数を減らしたいと考える。

しかし、受講者自らの学び合いを保障していくためにも、次年度は半数程度の幼児教育アドバイザーが本市ブロックでの研修内での、新受講者への支援的役割を果たしながら、継続参加できるようにしていくことが必要である。

②幼児教育アドバイザーの必要な資質・能力の適切性

第一に「カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有」については、『奈良市立こども園カリキュラム（バンビーノ・プラン）』を基に、その理念と編成原理（編成・柱・内容・特色）について講義で学び、乳幼児期における質の高い教育・保育を目指すために、実践の中で受講者が解説を行いながら、その教育・保育内容や解説に伴う技能を身に付けることができた。

第二に「実践上の課題に応じて指導助言する能力」については、実践を理論的に捉え分析する能力についての講義で学び、自園・他園での実習を中心に、実践への適切切な指導・助言及び解説を行うために必要な技能を身に付けることができた。ここでは、本講義及び実践を互いに連動させ実施することで、より理解しやすい解説方法を追究し、実践を把握する力を身に付けることができた。このことは、的確な根拠のもとに解説及び指導・助言を行うための、専門性と専門性に裏付けされた教育・保育を展開する力へとつなげることができた。ここでは、幼児教育アドバイザー講習受講者が自ら取り組んでいくことで、その専門性を理解し、より確かなカリキュラム理解へもつながることが分かった。

第三に「実践者の資質能力を高める研修を企画運営する能力」については、カンファレンスに関して、目的、内容、組織化、全体での共有の仕方について理解等について講義で学び、そのことを生かして自園及び他園、公開保育等の研修でカンファレンスや研修の企画運営を行った。各園の保育者と共にその実態や課題に鑑み、研修を工夫することで、各園において保育者その後の学び合いにつながるなどの効果へとつながってきている。

第四に「実践研究を統括する能力」については、実践研究の手法について講義で学び、研究を遂行するとともに、研究成果を適切に位置付けることのできる能力を向上させられるよう、学識経験者より直接指導を受け、実践研究の指導・助言や統括を行える力を養えるようにした。今回の短期間での習熟は十分とはいえない面もあるが、各受講者が、次年度には、今回の学びを生かして自分の力でまとめ上げていきたいとの感想を述べている。

これらのことから、この四つの資質・能力については、その適切性が十分に認められると言える。

③幼児教育アドバイザープログラムの有効性

本研究にて【試行版】幼児教育アドバイザー育成プログラムは、上記①の幼児教育アドバイザーの必要な資質・能力の適切性を十分に有しており、今後、本市におけるアッパー・ミドル・クラスの保育者の育成研修として位置付け、更なる活用方法を探ることとする。

本研究の成果より、教育・保育の中核を担う人材を育成する為には、このプログラムを基盤とし、そ

の活用方法や実施の工夫を随時行い、再考を重ねながらその適用可能性を高めていく。

質の高い幼児教育の推進体制における幼児教育アドバイザーの位置付け

本研修を受講し「幼児教育アドバイザー」となった受講者は、その学びを生かし、次年度における本市研修での研修ブロック内において、その力を発揮できるようにする。新しい受講者に対し、先輩受講者として研修のサポートを行うとともに、互いに刺激し合い学び合う存在として位置付ける。

先輩受講者としての役割を果たすとともに、中堅層の実践者に必要な資質についてその立場として常に振り返りながら、自己の教育・保育内容及び技能を確かなものとするための努力を続けるものとする。

本市においては、このことを研修体制の一部として位置付け、市全体における確かな知識と技能を有する人材育成に向けて取り組んでいくものとする。

(2)【試行版】育成プログラムの改善点

①「講習」「実習」「スーパーバイズ」によるプログラム編成

「講習」「実習」「スーパーバイズ」という3種類の活動によるプログラム編成については、アドバイザーを育成するための必要な要素であると十分に認識された。ただし、内容や運用については、以下の②～④に示すような改善が期待される。

②幼児教育アドバイザー講習

カリキュラムに関する専門的知識と解説技能については、実際の経験が重要であることが明らかになった。【完成版】では自園や地域ブロックにおける実習を充実させ、園内研修やブロック研修で解説の経験を積み、実習直後に「奈良市立こどもカリキュラム」に即した振り返りを行い、カリキュラムについて深い理解と確かな解説技能を得られるようにする。また、幼児教育アドバイザーとキャリア形成についても、内容上、扱うようにする。

研修の企画・運営では、園内研修及びブロック研修、公開保育研究会等で企画を行い、カンファレンスや研修自体の進め方等についての実習をする。また、回数は余裕をもって実施できるよう調整を行う。

以下、各講座に関する具体的な改善点である。

| 講座 | 改善点 |
|---------|--|
| 3・4 | ・カリキュラムの読み解きの時間を確保し、資料を作成後、受講者同士話し合う時間を十分確保する。 |
| 5 | ・1期～5期の各期における本市の公開保育研修等で撮影した実践 VTR を用いて研修し、『奈良市立こども園カリキュラム』に沿った各発達の時期における指導助言の在り方について省察する。 |
| 6 | ・受講者勤務園の園長と担当スーパーバイザーが、受講者の自園・他園での指導助言の様子を共有し、より効果的な指導方法を探る。 |
| 7 | ・公開保育の写真を使用してカンファレンスの体験研修を実施。その後、「こ幼保合同研修会」で実際に受講者がカンファレンスを実施する場を撮影した VTR を使用し、カンファレンスの仕方について研修を行う。 ・全受講者が同じ研修に参加し、同じ遊びの場を協議する。 |
| 9・10・11 | ・小グループ制の実践研究後、スーパーバイザーによる定期的フォローアップを受け、自己の学びを研鑽する。 |

| | |
|-------------|--|
| 12 13・14 | ・自園・他園での企画運営等の機会を増やし、園内の活性化及び実践者の指導助言力を高めて循環を図る。 |
|-------------|--|

③幼児教育アドバイザー活動実習

活動実習は「実践するごとに身に付く」「多くの経験の中から得るものがある」と考えられる。各自数回程度を必須としながら、園内や市ブロック、公開保育研修等にて十分に経験できるようにする。特に、受講者自園での園内研究会における実習の機会を増やし、実践に即したカリキュラムの解説技能や指導・助言技術の向上を図る。

また、受講者が自園の実践研究を推進する中心的な役割を果たせるよう、園内研修ごとの指導・助言についての経験を積み重ね、自園の園長から指導やサポートを受ける機会を増やしていくようにする。

④スーパーバイズ

【試行版】育成プログラムで実施した3回のスーパーバイズは、不安や悩みを持ちながらプログラムに参加する受講者が、それぞれの課題を克服するに当たり大変有効に機能した。回数も過不足無かった。

スーパーバイザーの役割として、受講者の実地経験により寄り添い、密接に指導できるように、ブロック研修の活用などにより、実習場面に立ち合えるようにする。また、スーパーバイザーは受講者勤務園の園長と情報共有を図り、両者の指導・助言の特徴を互いに理解し、受講者を中心としたチームとしてのスーパーバイズを可能とする。

7. 成果の公表

(1) 研究集会

本研究の成果を市内全園で共有するために、2月に研究集会を開催した。本プログラムの「企画・運営」の実習として受講者が研修を行い、報告対象者を、園長、副園長、幼児教育アドバイザー及び受講者、スーパーバイザー、幼児教育関係者とし報告会を企画し遂行する。

(2) リーフレットの作成と配布

本研究の成果をリーフレットとしてまとめ、その目的と成果を広く幼児教育関係者及び市内幼児教育関係園に配布する。

第Ⅳ部

【完成版】

幼児教育アドバイザー育成プログラム
(バンビーノ・マスター) の提案

1. 幼児教育アドバイザーに必要な資質・能力

(1) カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識の保有

カリキュラムの理念と内容に関する専門的知識については、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』並びに『奈良市立こども園カリキュラム』について、十分な理解を示すことが、求められる。

- ① カリキュラムの特徴、構成、理念、内容について、その意味するところを十分に理解している。
- ② カリキュラムにおける幼児期の教育の位置づけと必要性について、発達の観点と教育的意義から十分に理解している。
- ③ 上記①及び②に関して、実践に照らした理解と、実践への活用の在り方の理解を有し、実践に照らして解説することができる。

(2) 実践上の課題に応じて指導・助言する能力

実践上の課題に応じて指導・助言する能力については、指導計画の作成から実施、評価に至るまで、下記の諸点を踏まえて、実態に応じて複合的・輻輳的に指導・助言することが求められる。

- ① 実践者の実践上の課題について、実践者個人と、学年と、園のそれぞれの次元から勘案している。
- ② 実践者の熟達を見極め、短期的・長期的な課題を把握している。
- ③ 実践者の作成する指導計画について、年齢や期、子供の状態を反映しているか、また、各項目の記述は適切かつ簡潔であるか、などについて把握している。
- ④ 実践について、指導計画と整合しているか、保育の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が実施されているか、などについて把握している。
- ⑤ 実践者による実践の記録と評価について、指導計画に対応しているか、具体的事実を踏まえているか、十分な省察が行われているか、改善への方策が見いだされているか、などについて把握している。

(3) 実践者の資質・能力を高める研修を企画・運営する能力

園内研修や合同研修（公開保育を含む）は、実践者の資質・能力を高めるのに有効な機会であり、幼児教育アドバイザーには研修の場を活用して、適切で効果のある指導・助言を行うことが期待される。下記の点において、研修参加者自身の課題を捉え、研修を企画・運営する能力が求められる。

- ① 時宜に応じた教育・保育の課題や、実践者自身の課題など、各種のニーズや課題に応じてテーマを掲げ、進行や人員配置などの計画を立てる。
- ② 参加者の経験を踏まえ、学びの在りようを勘案して、計画を立てる。
- ③ 研修の実施の際は、参加者の経験や課題、参加の目的に応じて、進行や展開を工夫する。
- ④ 研修の実施の際は、参加者同士の学び合いや相互の啓発を促したり、状況に応じてテーマや問いを絞ったりして、研修を深める工夫をする。
- ⑤ 研修の終了後には、研修を評価し、次の研修に活かすための改善点や参考点を得る。

(4) 実践研究を推進・統括する能力

各園において、1年間を通じて研究課題に基づき実践研究が進められる。園における実践研究の遂行の際、統括的役割を果たし、生産的な研究となるように、下記の諸点を踏まえ、適切に助言・指導を行うことが求められる。

- ① 適切なテーマと研究上の問いが立てられているか、把握し、指導や助言を行う。
- ② テーマに即して、適切な方法が採られているか、把握し、指導や助言を行う。
- ③ 上記②に即して適切で十分な記録が採られ、事実が捉えられているか、また、記録に基づき解釈や評価が行われているか、把握し、指導や助言を行う。
- ④ テーマに応じた結果や考察が得られているか、研究の成果は何であるのか、把握し、指導や助言を行う。

2. 奈良市幼児教育アドバイザー育成プログラム（バンビーノ・マスター）

表3 【完成版】 育成プログラムにおける幼児教育アドバイザー講習

※WS：ワークショップ

| No | テ - マ | 形 態 | 主要な資質・能力 | | | |
|--|----------------------------------|-------|----------|----|----|----|
| | | | 知識 | 指導 | 研修 | 研究 |
| (1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識 | | | | | | |
| 1 | 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ | 講義 | ◎ | ○ | | |
| 2 | 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容 | 講義 | ◎ | ○ | | |
| (2) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上 | | | | | | |
| 3 | 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説の内容選択と資料作成 | WS | ◎ | ◎ | ○ | |
| 4 | 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説の実際 | WS | ◎ | ◎ | ○ | |
| (3) 実践者・実践園への指導・助言 | | | | | | |
| 5 | 実践者・実践園への指導・助言の要点 | 講義・WS | ◎ | ◎ | ○ | |
| 6 | 実践者・実践園への指導・助言の実際 | WS | ◎ | ◎ | ○ | |
| (4) カンファレンスの進行と統括 | | | | | | |
| 7 | カンファレンスの進行と統括の要点 | 講義・WS | ◎ | ◎ | ◎ | |
| 8 | カンファレンスの進行と統括の実際 | WS | ◎ | ○ | ◎ | |
| (5) 実践研究の計画と実施 | | | | | | |
| 9 | 実践研究のテーマと方法の設定 | 演習 | ◎ | | ○ | ◎ |
| 10 | 実践研究における記録とデータ収集と分析 | 演習 | ◎ | | ○ | ◎ |
| 11 | 実践研究における考察とレポート | 演習 | ◎ | | ○ | ◎ |
| (6) 研修の企画・運営 | | | | | | |
| 12 | 研修の企画 | WS | ○ | | ◎ | |
| 13 | 研修の運営 | 実習 | ○ | | ◎ | |
| 14 | 公開保育研究会の企画・運営 | 実習 | ○ | | ◎ | |
| (7) 統括 | | | | | | |
| 15 | 受講の取組における熟達過程の省察 | 演習 | ○ | ◎ | ◎ | |

1 講習

(1) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識

| | |
|----|---|
| 講座 | 講座1 『奈良市立こども園カリキュラム』の全体構成と幼児教育の位置づけ 講座2 『奈良市立こども園カリキュラム』の理念と内容 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> 『奈良市立こども園カリキュラム（バンビーノ・プラン）』について、その理念と編成原理、構造、内容、特色などについて、専門的知識を習得する。 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』や認定こども園法などに照らして、『奈良市立こども園カリキュラム』の特徴を十分に理解する。 |
| 種別 | 講義 |
| 内容 | <p>1. 幼児教育アドバイザーとしてカリキュラムを理解する</p> <p>(1) 幼児教育を理解し、総合的に指導する</p> <ul style="list-style-type: none"> 『奈良市立こども園カリキュラム』について、発達を踏まえて理解する。 発達の各期にどのような特徴があるのか、なぜ必要なのか等、教育的な意義や発達の視点から幼児期の教育の位置付けや必要性を理解する。 「奈良市立こども園カリキュラム」に沿った、子供理解に基づいた適切な指導をする。 “△△先生に聞けばよく知っているから、△△先生に聞こう” “カリキュラムのことをよく知っている人は、△△先生である” 等、カリキュラムの特徴や構成、理念、内容を十分に理解する。 実践と照らし合わせ探ることのできる「履歴としてのカリキュラム」を構築できる。 実践に活用するとどうなるのか？具体的に指導できる 等 例：3歳2期の時期なので、□□のような発達の姿が見られる 等 大学教員や他の幼児教育アドバイザー、スーパーバイザーより、様々な知識を得る。 <p>(2) 実践や研修を構想する</p> <ul style="list-style-type: none"> スーパーバイザー園や自園、公開保育研修などの実践現場での指導助言を通して、日頃の実践を省察する力を身に付ける。 <p>(3) 幅広い人間性や感性を身に付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> 迷いや不安が生じたときに自分の心の内を打ち明け、園長や他の実践者と共に共感しながら、明日の教育・保育の質向上に向けた取り組みのための、課題や解決策を考える。 等 上記の内容を組み込みながら、幼児教育アドバイザー講習受講者が下記のことについて取り組めるようにする。 <ol style="list-style-type: none"> ① 実践を振り返る。 ② 自己目標を具体的に持ち取り組む ③ 自己研鑽をつむ。 ④ キャリアに応じた研修を企画・運営・実施する。 |

2. 幼児教育アドバイザーに求められる『奈良市立こども園カリキュラム』の理解のポイント

(1) 全体について

- ①カリキュラム全体の「構成と内容」について熟知する。
- ②カリキュラムの編成や運営、更新にかかわる「システム」を理解する。
- ③「バンビーノ・プラン」が何を指しているか、知る。

(2) 乳幼児教育・保育に関する奈良市の取組について

- ①奈良市のまちづくり——めざす教育——めざすこども園の教育・保育、の相互関係を理解する。
- ②幼保の再編統合、及び、こども園化に向けた課題がどこにあったか、理解する。
- ③奈良市における幼保連携型認定こども園の役割を理解する。
- ④約10年に及ぶ、外部資金獲得に伴う研究・修養の努力と成果が今日につながっている。

(3) カリキュラムについて

- ①バンビーノ・プランにおける「カリキュラム」の定義を熟知し、活用する。
- ②カリキュラムにおける用語を正確に理解し、使い分ける。
- ③策定のシステムを知っておく。
- ④カリキュラムの構造を熟知する。
- ⑤カリキュラムの理念についてそれぞれの内容を熟知する。
- ⑥図3「カリキュラムの理念とコンセプト」について、正確に理解する。
- ⑦「コンセプト」とは何か、なぜ必要であるのか、どのような機能があるのか、熟知する。
- ⑧各コンセプトの趣旨と内容について、どのような特質を示しているのか、熟知し、活用する。
- ⑨「年齢に応じたカリキュラム」について、年齢毎のポイントや用語の使い方を熟知し、活用する。
- ⑩「年齢に応じたカリキュラム」とは別に、「特色ある活動」が編成されている理由を理解する。
- ⑪「特色ある活動」における各活動の定義と目的をよく理解する。
- ⑫「特色ある活動」について、コンセプトで捉え、説明することができる。

※補足：『奈良市立こども園カリキュラム』について

1) カリキュラムの理念

- (1)「生きぬく」子どもの育成 (2) 乳幼児期に必要な経験の保障 (3) 小学校教育への接続

2) コンセプト

【判断と行動】自ら考え、判断し、行動する。

【結い】 <もの><ひと><こと>とかかわり、関係を結ぶ。

【表現と反応】思いや気付きや感じたことを表し、認め合う。

- ・『奈良市立こども園カリキュラム』における「コンセプト」は、0～5歳までの人格的、社会的、認知的な育ちを保障するために必要な、カリキュラムを貫く柱であり、子供の長期的な発達と各年齢における育ちを捉えていくために必要な観点である。

3) 年齢に応じたカリキュラム

- ・3歳児未満児の保育
- ・幼児期の教育
- ・幼児期の長時間保育

4) 特色ある活動

- ・こども園と小学校をつなぐ
- ・育みを促す（食育、特別支援）
- ・テーマに即して探究する（プロジェクト活動、世界遺産学習）
- ・生活を記録する（絵日誌、奈良型ドキュメンテーション）

(2) 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説技能の向上

| | |
|----|--|
| 講座 | 講座3 『奈良市立こども園カリキュラム』解説の内容選択と資料作成 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・『奈良市立こども園カリキュラム』に関する専門的知識に基づき、解説技能を向上させる ・プレゼンテーション資料を作成し、その資料に基づき実際に解説行う経験を通して、受講者の解説技能を向上させる。 ・各グループのテーマ（①幼児期（3～5歳児）の教育と長時間保育、②幼児期（3～5歳児）の教育と特色ある活動、③乳児期（0～2歳児）の保育）に基づき資料作成や解説準備を進めることを通して、カリキュラムの特徴や教育・保育を通した子供の育ちを深く理解し、解説技能の向上を図る。 |
| 種別 | ワークショップ |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・3～5歳児の幼児期の教育を基本として、長時間保育及び特色ある活動、0～2歳児の保育について、その発達の特徴やかかわりの視点などについて、グループで互いに意見を出し合い探ることで、奈良市立こども園カリキュラムの理解と解説する能力を身に付ける。 ・また、より理解しやすい解説方法を追究し、実践を把握する力を身に付け、的確な根拠のもとに解説及び指導・助言を行う。 |
| 方法 | <ol style="list-style-type: none"> 1. グループに分かれ、各テーマに基づき『奈良市立こども園カリキュラム』の読み解きを行う。 <ol style="list-style-type: none"> ① カリキュラム活用方法や重要性についての確認を行う為に、互いの気付きを出し合い、話し合う。 ② 繰り返し熟読し、各年齢の特徴などについての理解を深められるようにする。 2. 第1回、2回の講義での気付きや第3回目講義の講義内容を踏まえ、意図して伝えたいことや伝え方について話し合う。 カリキュラムの理念と内容に関して、次の内容を含め考える。 <ol style="list-style-type: none"> ① 期の子供の発達の姿やめざす子供の姿の理解について、どのように伝えるのか。 ② カリキュラムを中心に据えた子供の発達を捉える為に、策定過程で出されたポイントなどを振り返り、内容についての的確に伝えられるように考える。 ③ 自分の言葉で伝達できるような解説を工夫する。 ④ 内容の精選や伝えたいことを共通理解したのち、グループ内で分担し、パワーポイントによる「伝え方を工夫する」。 ⑤ 考案した資料を互いに読み合い、再度話し合う。 3. 出来た資料を基に互いに発表し合い、内容について確認する。 4. 全ての資料を共有し、自園、他園での実践で活用する。 |

| | |
|----|---|
| 講座 | 講座4 『奈良市立こども園カリキュラム』に関する解説の実際 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・講座3のワークショップで作成した『奈良市立こども園カリキュラム』のプレゼンテーション資料と解説文を用いて、自園や研究協力園（他園）の園内研修会で、実際にカリキュラムの解説を行い、講義での学びと実践での経験との往還を図る。 ・アドバイザー講習とアドバイザー活動実習とを往還させることによって、幼児教育アドバイザーとしての専門性を高め、より確かなカリキュラム理解へと繋げる。 |
| 種別 | 実習（自園・スーパーバイザー園） |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・自園やスーパーバイザー園において、講座3で作成した資料と解説文を持参し、『奈良市立こども園カリキュラム』について、聞き手が理解を深められるように、解説を行う。 ・講座3で作成した資料は受講者間で共有し、園のニーズに応じて、①幼児期の教育と長時間保育、②幼児期の教育と特色ある活動、③乳児期の保育のいずれか、あるいは再編して解説する。 ・スーパーバイザーは、受講者を「見通しをもって傍で見守る」存在であり、受講者に適切かつ具体的に助言や指導を行う存在である。本育成プログラムについても熟知している。したがって、初めての他園での解説実践は、原則としてスーパーバイザーの勤務園の園内研修で行うこととする。 ・園内研修では、少人数で深く密な議論が可能となる。受講者にとって他園の園内研修に参加することによって、想定を超える質疑応答などを経験する可能性もある。受講者は講義やワークショップでの学びと、カリキュラム解説の現実を通して「知識と技能の連動」を図る。 <p>【参考】園内研修の意義（最終的には平成23年度の文部科学省委託研究の報告書を出典とする予定）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践を相互に見合い、検討することを通して、自らの課題を明確化し、よりよい方途を探る。 ・専門的知識と実践とが往還し、教育・保育の在りようが変わることに学びの意義がある。 ・記録を基に実践を見直し、実践者同士が共有し、実践者の協働でよりよい教育・保育の在り方を探る。 ・外部の実践者や幼児教育の専門家の参加を受け、検討を通して教育・保育を大きな視野で捉え直す。 |
| 方法 | <p>以下の手順にて取り組む。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 指導案に基づき、実践を参観する。 ② 実践者と、実習者（育成プログラム受講者）、スーパーバイザー、研究協力園の他の実践者でカンファレンスを行う。本日の実践についての振り返りを行い、課題の共有を行い、期の発達を交え研修する。 ③ カンファレンスにおいて、実習者は、実践者の課題を共有し、課題に即して、指導・助言を行う。【講座6】 ④ 実習者は、『奈良市立こども園カリキュラム』について、解説する。【講座4】 ⑤ 実習者は、カリキュラムの視点から本日の実践について解説し、指導・助言を行う。 【講座4、6】 ⑥ 実習後、担当のスーパーバイザーより、実習者が行った『奈良市立こども園カリキュラム』の解説や本日の活動について、指導を受ける。ここではスーパーバイザーより、実践者の年齢や経験の理解の違い、実践者の解説や伝わり方について等、実習者自身のキャリアに応じた具体的な指導を受ける。 ⑦ 実習者は、本日の実習を振り返り、次回への課題や改善点、手立ての工夫などを明確にイメージし、そこで発見した新たな課題を携えて、次の講習や実習に臨めるようにする。 |

(3) 実践の指導：実践者・実践園への指導・助言

| | |
|----|--|
| 講座 | 講座5 実践者・実践園への指導・助言の要点 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践に関して、実践者・実践園に対する指導及び助言の技術を向上させる。 ・実践者が教育・保育の見方や考え方を自覚し、実践上の課題を明確化させ、改善への糸口を得るためにはいかに指導・助言を行うべきか、根拠の把握と伝える技術の点から考え、実行できるようにする。 ・指導の方法や表現の仕方などについて工夫を施し、各年齢での保障する育ちやカリキュラムのねらい、子供の姿、内容、援助、環境構成について、実践に即した指導や助言ができるようにする。 |
| 種別 | 講義・ワークショップ |
| 内容 | <p>以下の内容について、講義を受けた後、ワークショップにおいて指導・助言の実際を経験する。</p> <p>1. 実践上の課題に応じて指導・助言する際の要点</p> <p>指導計画の作成から実施、評価に至るまで、下記の諸点を踏まえ、実態に応じて指導・助言を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 実践上の課題について、実践者個人の次元と、学年や園の次元の双方を勘案している。 ② 実践者の熟達をみきわめ、短期的長期的な課題を把握している。 ③ 実践者の作成する指導計画について、年齢や期、実際の子供の状態を反映しているか、また、各項目について、適切かつ簡潔に記述しているか、等について把握している。 ④ 実践において、指導計画と整合しているか、実際の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が行われているか、等について把握している。 ⑤ 実践の記録と評価について、子供の活動と、実践者自身の援助と、環境構成の在り方について、指導計画と対応しているか、具体的事実と照らしてなされているか、十分な省察がおこなわれているか、次への改善の糸口を見いだしているか、等について把握している。 <p>2. 指導・助言に向けて実践を把握する =指導・助言の根拠</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 実践の事実を捉える <ul style="list-style-type: none"> ・時間の経過に沿う。 ・活動の流れ、子供の様子、環境構成、実践者の援助、など ・誰にとっての事実であるか、把握する：子供なのか、実践者なのか、助言者自身なのか (2) 評価する（事実の把握と並行して） <ol style="list-style-type: none"> a) 円滑一停滞：活動の流れについて b) 工夫：子供の工夫、実践者の工夫 c) 課題：子供の課題、実践者の課題（環境構成や援助など） d) 実践者の意図を推測する (3) 別の対応の選択肢や解釈を考える <ul style="list-style-type: none"> ・自分ならどうするか。それは、なぜか。 ・別の対応や解釈はあるか。 ・ほかに必要な対応はあるか。 <p>3. 指導・助言の内容をまとめる =伝える技術</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 内容を焦点化する <ul style="list-style-type: none"> ・全てを言い切ろうとはしない。今、必要な内容や意味のある内容を選択する。 ・内容を絞る。あるいは、統一された課題やテーマをもたせる。 (2) 順序立てて、話を組み立てる <ul style="list-style-type: none"> ・思いつくままには提示しない。根拠や理由を示しながら、丁寧に論じる。 |

| | |
|-------------------|--|
| <p>方 法</p> | <p>上記の内容について講義（30分）を受けた後、次のようにワークショップを行う。</p> <p>1. 指導助言及びカンファレンスについて、実践者及びこ幼保合同研修会等の映像視聴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内研修での指導助言及び、こ幼保合同研修でのカンファレンスの様子をビデオで撮影しておき、実践者の実際の姿を基に研修を行う。 ・他の実践者のビデオを基に研修を行う。 <p>2. 指導・助言の立案とグループ討議</p> <p>①ビデオ視聴後、受講者それぞれが、自分なりの指導・助言の立案を行う（10分）。</p> <p>②4～5名ずつのグループにおいて、各受講者が映像の実践への見立てとそれぞれの指導・助言案を報告し、どのような指導・助言が適切か、グループ討議を行う。</p> <p>③作業は、次の観点に即して行う。</p> <p>実践の事実を捉える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の流れ、子供の様子、実践者の援助、環境構成の視点から、ビデオを視聴する。 ・誰にとっての事実かを把握する。 <p>評価する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・円滑、停滞、工夫、課題、実践者の意図の推測の観点より、評価する。 <p>別の対応の選択肢や解釈を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ場面での解釈の違い等。 ・自分ならどうするか。 ・別な対応や解釈はあるか。 <p>指導助言の内容をまとめる</p> <p>内容を焦点化する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今、必要な内容や意味のある内容を選択する。 ・内容を絞ったり、統一された課題やテーマをもたせたりする。 <p>順序だてて、話を組み立てる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜそれが必要なのかという、根拠や理由を示しながら、丁寧に論じる。 <p>伝える技術の習得</p> <p>グループ討議後、スーパーバイザーの園長職者より指導を行う。</p> <p>※指導・助言技能向上の具体的なポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導する実践者の個人の力量やキャリア、年齢に応じて、指導の内容や方法を工夫する。 ・園のテーマや課題に合わせて、どのように教育・保育を進めていくのか、各実践者に助言する。 ・研修の司会をしながら、他の実践者と一緒に、園としての課題や幼児個人の課題を明らかにし、解決方法を探る。 ・“ここで迷った、どこまで伝えるとよいのか、どのような手立てが必要であるのか” など、現場の実践者へのかかわりや戸惑いなどを記録し、分析する。 |
|-------------------|--|

| | |
|----|---|
| 講座 | 講座6 実践者・実践園への指導・助言の実際 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践に関して、実践者・実践園に対する指導及び助言の技術を向上させる。 ・講座5の講義とワークショップの経験を踏まえ、自園及び研究協力園（他園）の園内研修会に赴き、参観した実践を踏まえて、実践者に指導・助言を行うことを通して、実践者の課題に即した指導・助言の技術を向上させる。 ・アドバイザー講習とアドバイザー活動実習とを往還させることによって、幼児教育アドバイザーとしての専門性を高め、より確かなカリキュラム理解へと繋げる。 |
| 種別 | 実習（自園・スーパーバイズ園） |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・本講座では、受講者が自園やスーパーバイザー園における園内研修に参加し、実践者に実際に指導・助言を行い、その技術を向上させる。 ・スーパーバイザーは、受講者の活動の見通しをもって傍で見守り、受講者に適切かつ具体的に助言や指導を行う。 また、受講者勤務園の園長と連携を取り、自園及びスーパーバイザー園における受講者の実践の様子を互いに共有することで、指導の視点の共有化と連動を図る。 ・園内研修は、日々の実践現場以外での大切な指導の場であり、少数人数での指導を実施できる場である。受講者が講義やワークショップでの学びを活かし、指導・助言の実践と、その省察を循環させることで、実践指導についての「知識と技能の連動」を図る。 <p>【参考】 園内研修の意義（最終的には平成23年度の文部科学省委託研究の報告書を出典とする予定）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践を相互に見合い、検討することを通して、自らの課題を明確化し、よりよい方途を探る。 ・専門的知識と実践とが往還し、教育・保育の在りようが変わることに学びの意義がある。 ・記録を基に実践を見直し、実践者同士が共有し、実践者の協働でよりよい教育・保育の在り方を探る。 ・外部の実践者や幼児教育の専門家の参加を受け、検討を通して教育・保育を大きな視野で捉え直す。 <ul style="list-style-type: none"> ・指導・助言に当たっては、次の点に留意する。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 指導・助言の内容 <ol style="list-style-type: none"> ① 実践上の課題について、実践者個人の次元と、学年や園の次元の双方を勘案している。 ② 実践者の熟達をみきわめ、短期的長期的な課題を把握している。 ③ 実践者の作成する指導計画について、年齢や期、実際の子供の状態を反映しているか、また、各項目について、適切かつ簡潔に記述しているか、等について把握している。 ④ 実践において、指導計画と整合しているか、実際の展開に応じて柔軟な援助や環境構成が行われているか、等について把握している。 ⑤ 実践の記録と評価について、子供の活動と、実践者自身の援助と、環境構成の在り方について、指導計画と対応しているか、具体的事実と照らしてなされているか、十分な省察がおこなわれているか、次への改善の糸口を見いだしているか、等について把握している。 2. 指導・助言の根拠 <ol style="list-style-type: none"> ① 実践の事実を捉える ② 評価する（事実の把握と並行して） ③ 別の対応の選択肢や解釈を考える 3. 内容伝達の技術 <ol style="list-style-type: none"> ① 内容を焦点化する ② 順序立てて、話を組立てる |

| | |
|-------------------|--|
| <p>方 法</p> | <p>以下の手順にて取り組む。</p> <p>①実習園に本日の課題や研修の目的について予め尋ねておき、話合いの視点を探る。</p> <p>②実習園の実践者に、事前にカンファレンスの視点を知らせ、実践を参観する。</p> <p>③実践者と、実習者（育成プログラム受講者）、スーパーバイザー、研究協力園の他の実践者などでカンファレンスを行う。</p> <p>④カンファレンスで、実践者は、実践上の課題を参加者全員で共有し、指導・助言を行う。【講座6】</p> <p>⑤実習者は、『奈良市立こども園カリキュラム』について、視覚やわかりやすい解説を工夫し行う。 【講座4】</p> <p>⑥実習者は、カリキュラムの視点から本日の実践について解説し、期の発達を交え指導・助言を行う。 【講座4、6】</p> <p>⑦実習後、担当のスーパーバイザーより、実践者が行った『奈良市立こども園カリキュラム』の解説や指導助言について、指導を受ける。 ここではスーパーバイザーより、実践者の年齢や経験の理解の違い、実践者の解説や伝わり方についてなど、実習者自身のキャリアに応じた具体的な指導を受ける。</p> <p>⑧実践者は実習を振り返り、次回への課題や改善点、手立ての工夫などを明確にイメージし、そこで発見した新たな課題を携えて、次の講習や実習に臨めるようにする。</p> <p>⑨スーパーバイザーは、実践者の実習の様子について勤務園園長に報告し、実践者の成果を互いに共有できるようにする。</p> |
|-------------------|--|

(4) 実践の指導：カンファレンスの進行と統括

| | |
|----|--|
| 講座 | 講座7 カンファレンスの進行と統括の要点 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践研修におけるカンファレンスの進行と統括に関して、知識を習得し、技能を向上させる。 ・カンファレンスに関して、目的、内容、組織化、全体での共有の仕方などについて理解を深める。 ・上記の理解に基づき、参加者の関心や課題を生かした進行と統括の在り方について、ワークショップとして、模擬のカンファレンスを行い、カンファレンスの進行と統括に必要な技能を高める。 |
| 種別 | 公開保育参観・講義・ワークショップ |
| 内容 | <p>・下記の内容について講義を受けた後、公開保育での参観の様子を基に模擬カンファレンスを行う。</p> <p>・模擬のカンファレンスについて、スーパーバイザーから、指導と助言を受ける。</p> <p>1. 保育カンファレンスの目的と内容</p> <p>(1) 目的</p> <p>下記の内容に関して、実践者と参観者の交流を行い、①自らの実践や見方・考え方の癖を自覚し、実践上の課題を可視化し、②実践の改善の可能性を探る。</p> <p>(2) 内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 実践における「問題」の明確化：問題は何か。誰にとっての問題か ② 多方面からの情報の収集と検討：実践者と参観者の異なる立場から、事実や対案を寄せる ③ 改善の方向性を得る：今度はこうしてみよう、こちらの方がより望ましい、等 ④ 検討内容の敷衍化可能性の検討：別の課題や、別の検討への適用可能性 等 <p>2. カンファレンスの組織化</p> <p>(1) 話題の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 問題の定式化 今日の実践で何が問題となるのか、見極める ② 問題の焦点化 問題の絞り込みと優先順位付け ③ 問題相互の関連性 ④ 結論の見通し <p>(2) 時間の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 【序盤】問題の共有 ② 【中盤①】実践者と参観者との認識の異同 ③ 【中盤②】対案の可能性の検討 ④ 【後盤】敷衍化 <p>(3) 参加者の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①メンバーの組合せ ②人数 ③配置 <p>(4) 報告の組織化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①問題はどうか検討されたか【議論】 ②検討したことの意味【議論の意義】 ③全体で共有する価値のあること【拡張と敷衍】 |

| | |
|------------|--|
| | <p>3. 進行・統括における課題</p> <p>(1) 自分なりの見方や考えを自覚化する</p> <p>(2) 議論に対立軸をつくる</p> <p>(3) 生産的な議論をつくる</p> |
| <p>方 法</p> | <p>◇模擬カンファレンスは、以下の手順にて行う。</p> <p>1. 奈良市のこ幼保合同研修会に参加した経験や遊びの場面のビデオ等を生かし、そこでの子供の遊びの様子や実践者の援助、環境構成についての見取りを行い、カンファレンス・ボードを用い模擬カンファレンスを行う。</p> <p>2. ボードは書き込み方式にて使用する。</p> <p>付箋：ピンク・・・よかった援助や環境構成 クリーム・・・援助・環境構成を取り上げた理由となる姿 水色・・・明日に繋がるヒント及びプラスしたい援助や環境構成</p> <p>3. 4～5人の少人数のグループとし、グループ内にはスーパーバイザー及び経験年数の異なる受講者にて編成する。</p> <p>4. 実際の教育・保育の様子を基に話し合いを行い、期の姿を交え、受講者が互いに主体的に意見を交わしながら、カンファレンスの進め方について探る。</p> <p>5. 話し合いででた意見をボードに随時書き込み、発達の姿やその期で注視したい援助や環境構成についてまとめる。</p> <p>6. グループで話し合ったことを報告する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この模擬体験を通して、カンファレンスの進行や統括の技能を高め、カンファレンスの意義について理解を深める。 ・講義で示されたカンファレンスの内容や組織化、進め方に留意しながら、模擬カンファレンスを実施する。 ・カンファレンスのリーダー（進行・統括）の仕方を振り返り、発達に沿った遊びの場面の精選や進行の仕方などについて、相互に気付きを出し合い議論する。 ・スーパーバイザーを各グループに配置し、カンファレンスリーダーの進行や参加者の関心の捉え方、年齢に応じた遊びの捉え方、参加者間の共有の仕方などについて、具体的に指導・助言を行う。 |

| | |
|-----|---|
| 講 座 | 講座8 カンファレンスの進行と統括の実際 |
| 目 的 | <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践研修におけるカンファレンスの進行と統括に関して、知識を習得し、技能を向上させる。 ・講座7の講義や模擬カンファレンスの経験を基に、奈良市のこども園・幼稚園・保育所合同で行っている「こ幼保合同研修会」でカンファレンス・リーダーを体験し、参加者の関心と課題に即したカンファレンスの進行と統括について、技能を向上させる。 |
| 種 別 | 実 習（こ幼保合同研修会・自園・スーパーバイザー園） |
| 内 容 | <ul style="list-style-type: none"> ・自園、スーパーバイザー園で、カンファレンスを行う。 ・奈良市の主催する「こ幼保合同研修会」で、午前の公開保育を参観する。 午前の実践参観前に議論のポイントとなりそうな点を伝える。 午後から、参観者と共にその期の幼児の姿について話し合う。 グループ・カンファレンスで議論されたことを、他の参観者と共有するために、報告する。 |
| 方 法 | <p>◇カンファレンスの目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 参観者や実践者の経験年数の違いを考慮し、より主体的な話し合いがもてるようにする。 ○ 各期の発達の姿及び援助、環境構成についての理解を深める。 ○ 研修での話し合いを明日の実践に繋げる。 <p>◇付箋</p> <ul style="list-style-type: none"> ピンク・・・よかった援助や環境構成 クリーム・・・援助・環境構成を取り上げた理由となる姿 水色・・・ 明日につながるヒント及びプラスしたい援助や環境構成 <p>◇カンファレンスは次の手順で進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 実践参観の視点（カンファレンスでの話し合いのポイントとなる視点）を確認する。 2) 各参観者は、実践公開時に書いていたクリーム及びピンクの付箋を各自持っておく。 3) カンファレンスリーダーの司会進行のもと、話し合いを始める。 カンファレンスリーダーは、各年齢の期のめざす子供の姿に沿って話し合いのポイントを絞り、カンファレンスを進める。 4) 話し合いの中で随時、自分の付箋を画用紙に貼る。 5) 話し合いで出された付箋や話の内容について参観者に具体的に問い返し、話し合いを進める。 出された話の内容から、期の発達の姿や援助・環境構成のポイントとなる事項を、画用紙に書込み、話し合いの内容について（視覚的に）参観者が確認できるようにする。 ※ここでは、参観者同士が自分の意見や思いを話しやすいように、具体的な姿を交えながら話し合いを進める。 6) 4のことを繰り返しながら話し合いを進める。具体的に明日の実践へのヒントや参考となる事項について出し合う。 ※水色の付箋は、始めに記入しておいても、話し合いの途中で書込んでも可である。 7) 報告する。 |

(5) 実践研究の計画と実施

| | |
|-----|--|
| 講 座 | <p>講座 9 実践研究のテーマと方法の設定 講座 10 実践研究における記録とデータ収集と分析 講座 11 実践研究における考察とレポート</p> |
| 目 的 | <ul style="list-style-type: none"> ・実践研究の計画と実施、分析と考察に関して、実証的に実施するための知識を習得し、研究を指導し統括する技能を向上させる。 ・実践への適切な指導・助言、解説に向けて、実践を理論的に捉え分析する能力を向上させる。 ・実践研究の手法について熟知し、研究を遂行すると共に研究成果を適切に位置付けることのできる能力を向上させ、実践研究の指導・助言や統括を行える力を養う。 |
| 種 別 | 演 習 |
| 内 容 | <p>1. 概 要</p> <p>1) 講座9 研究テーマと方法の設定 4名の幼児教育アドバイザーの各自設定したテーマをもとに、研修する。 以下の内容について、テーマの設定の仕方と研究の進め方の方法について、指導助言する。</p> <p>2) 講座10 記録とデータ収集と分析 前回の指導をもとに作成された資料を用いて、具体的な分析及びまとめる方向性について、指導助言を行う。</p> <p>3) 講座11 考察と報告 作成された資料を用いて、全体から読み取れる取組を基に、考察を行い、報告書としてまとめられるよう、指導助言を行う。</p> <p>2. 実践研究の枠組み (ガイダンス資料より)</p> <p>0. 研究主題</p> <p>I. 研究の目的</p> <p>1. 研究主題の設定理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その主題が乳幼児の教育・保育全般にとって必要である理由 (奈良市や全国をみて) ・その主題が園にとって必要である理由 園や地域の状況/今の園の問題状況 (子供の姿、環境など) 実践者の考え方や資質向上における問題点 など <p>2. 自園や他園におけるこれまでの取組とその成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究主題について、これまでどのように捉えられ、考えられてきたか ・具体的にどのような取組を行ってきたか ・上記の結果、どういうことが分かったか。あるいは、問題として見えてきているか。 <p>3. 研究を通して明らかにしたいこと (実践上の仮説)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取組や実践自体の工夫なのか/カリキュラムの提案か ・子供の姿や、援助や環境構成の仕方なのか ・新しい観点や見方を提示するのか ・どうなれば「明らかになった」といえるのか |

II. 取組の方法

1. 園の概要

- ・地域状況や周囲の環境
- ・園の人的構成・規模
- ・園環境（広さ、屋外、屋内）

2. 実践や取組の工夫・特徴

- ・どういう実践や取組を行うのか

3. 研究主題の要素・観点

- ・主題に掲げた状態を捉える観点（複数が望ましい）
- ・いわゆる「コンセプト」に代わるもの（ねらいにも含まれ、評価の観点にもなる）

4. 記録方法

- ・記録や事例の収集の方法：いつ、どのように行うのか（手段を含む）
- ・記録の種類：日誌の記録、エピソードの記録、個人記録のどれを用いるのか

5. 事例選択の基準

III. 取組の経過（事例を含む）

- ・例えば、各年齢毎に、研究主題に関する1年間の取組の経過をまとめる。
- ・具体例は事例として作成する。
- ・事例は観点別または年齢別に配置
- ・事例の書式は「履歴としてのカリキュラム」に準じる。
- ・ただし、「コンセプト」に代えて、あるいは、「コンセプト」とは別に、「研究主題の要素・観点」の項目をたてて、事例から言えることを記述する。

IV. 考察

- ・事例における「要素・観点」を年齢や期に沿って並べて、全体的把握を図る。
- ・1年間、期を縦断して見えてくることは何か。
- ・「研究の目的」（特に、研究を通して明らかにしたいこと（実践上の仮説））に照らして、明らかになったことや、至らなかったことは何か。

(6) 研修の企画・運営

| | |
|-----|---|
| 講 座 | 講座 12 研修の企画 講座 13 研修の運営 講座 14 公開保育研究会の企画・運営 |
| 目 的 | <ul style="list-style-type: none"> ・異なる種類の研修を企画し、実際に運営することを通して、課題に応じた研修の企画・運営に関する総合的な技術を向上させる。 ・奈良市立こども園カリキュラム事例研究会「実践事例報告会」や、こ幼保合同研修会として開かれる公開保育研究会、研究協議において、企画・運営、司会・進行を担い、参加者の経験や課題、目的に応じて、進行や展開を工夫し、研修を円滑に実施できるようにする。 |
| 種 別 | 講座 12：ワークショップ 講座 13・講座 14：実 習 |
| 内 容 | <p>実践者の資質・能力を高め、適切で効果のある指導・助言を行うためには、園内研修や園間研修（公開保育を含む合同研修）の場で、幼児教育アドバイザーが実践者自身の課題を捉え、研修を企画・運営する能力を育むことが必要であると考えワークショップを経験後に、実際の研修会での企画・運営を経験できるようにする。</p> |

(7) 総括

| | |
|----|--|
| 講座 | 講座 15 受講の取組における熟達過程の省察 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none">異なる種類の研修を企画し、実際に運営することを通して、課題に応じた研修の企画・運営に関する総合的な技術を向上させる。奈良市内の園長及び実践者、スーパーバイザーが、実践者の企画・運営の姿や成果について確認し合い、学識経験者による講演と講評を得て、本研究の経緯と成果を共有する。 |
| 種別 | 実習 |
| 内容 | 本15講座における講義及び演習、実習の成果とし、研修の企画・運営を行う。また、本育成プログラムに参加した受講者より、「アドバイザー講習受講者としての成長過程について」やスーパーバイズより「スーパーバイザーから見たアドバイザーとしての成長の過程について」等の報告を行う。 |

2 幼児教育アドバイザー活動実習

(1) デイリー・アクティビティー

- ・園内研修では、少人数で深く密な議論が可能となる。受講者にとって勤務園での園内研修を行うことは、信頼関係の保持や実践の展開を予想できるなどの利点があり、想定を超える質疑応答などを経験する可能性も少ない。
- ・受講者が、このようなより良好な環境下で、講義やワークショップでの学びをいかしたカリキュラムの解説を積み重ねることで、受講者自身の教育・保育観や発達観を見直し、「知識と技能の連動」や専門的技術の更新を図ることを目的とする。

園内研修の意義・・・実践を相互に見合い検討することを通して、自らの課題を明確化し、よりよい方途を探る。

専門的知識と実践とが往還し、教育・保育の在り様が変わることに学びの意義がある。

記録を基に実践を見直し、実践者同士が共有し、実践者の協働でよりよい教育・保育の在り方を探る。

外部の実践者や幼児教育の専門家の参加を受け、検討を通して実践を大きな視野で捉え直す。

- ・『奈良市立こども園カリキュラム』は、3～5歳の幼児期の教育を基本とし、長時間保育及び特色ある活動、0～2歳児の保育について編集され、研修を通して活用することで、その発達の特徴やかかわりの視点等についての理解と解説する能力を身に付けるものとする。

また、より理解しやすい解説方法を探ることで、実践を把握する力を身に付け、的確な根拠をもとに解説及び指導・助言を行う。

- ①幼児教育アドバイザー講習受講者は、園内研修などで実践を行い、教育・保育への見方や考え方を自覚し、実践における問題の明確化、焦点化、問題の相互の関連性について具体的に捉え進める。
- ②『奈良市立こども園カリキュラム』について解説するとともに、実践への指導、助言ができるように取り組む。
- ③指導の方法や伝え方などについて、気づきや学びを得ることを重視し、各年齢での保障する特徴やねらい、子供の姿、内容、援助、環境構成についての指導や助言の仕方を習得できるようにする。

(2) ゲスト・アクティビティー

- ・幼児教育アドバイザー講習受講者が講義で学んだ『奈良市立こども園カリキュラム』理論を基に、推進委員園での普及及び実践者・実践園への指導・助言を率先して行うことで、学びと実践の往還が行われ、受講者の学びや指導・助言技術の更新及び、幼児教育アドバイザーとしての専門性を高めることを目的とする。

<指導・助言の根拠>

- ①実践の事実を捉える
- ②評価する（事実の把握と並行して）
- ③別の対応の選択肢や解釈を考える

<内容伝達の技術>

- ①内容を焦点化する
- ②順序立てて、話を組立てる

- ・スーパーバイザーは、受講者の活動に見通しをもって傍で見守り、受講者に適切かつ具体的に助言や指導を行う。

<取り組みの方法>

- ⑧ 実践を参観する。
- ⑨ 実践者と、実習者（育成プログラム受講者）、スーパーバイザー、研究協力園の他の実践者でカンファレンスを行う。本日の実践についての振り返りを行い、課題の共有を行い、期の発達を交え研修する。
- ⑩ カンファレンスにおいて、実習者は、実践者の課題を共有し、課題に即して、指導・助言を行う。
- ⑪ 実習者は、『奈良市立こども園カリキュラム』について、解説する。
- ⑫ 実習者は、カリキュラムの視点から本日の実践について解説し、指導・助言を行う。
- ⑬ 実習後、担当のスーパーバイザーより、実習者が行った『奈良市立こども園カリキュラム』の解説や本日の活動について、指導を受ける。

ここではスーパーバイザーより、実践者の年齢や経験の理解の違い、実践者の解説や伝わり方について等、実習者自身のキャリアに応じた具体的な指導を受ける。

3 スーパーバイズ

- ・受講者の学修過程には、他の実践者の実践への指導・助言や、研修の企画・運営など、種々の実習が組込まれている。そのため、実際に遭遇する課題はそれぞれの受講者によって異なる上、指導・助言など実際の対応には選択可能性があり、即応的一義的に是非を判断することは難しい。

そこで、受講者一人一人に対しスーパーバイザーのチームを配置し、講習や活動実習と並行して、スーパーバイズを実施した。

スーパーバイズは、受講者の学修過程や指導・助言等の場面を省察し、指導・助言の在り方や別の選択可能性を含めて検討し、受講者自ら課題に気づき、資質や技能の向上にむけてその後の取組の優先性を知ることが目的とする。

<構成員> 学識経験者、推進委員、行政関係者

スーパーバイザーのチームは、受講生一人あたり、学識経験者、園長職、行政職または行政職経験者の3～4名で編成する。職種の異なる専門家をチームとすることで、多面的な検討を可能にする。

<スーパーバイズ実施方法> 年3回（9月・12月・2月）

- ・スーパーバイズにて行われた実践者の成長や課題について、担当スーパーバイザー及び実践者勤務園園長が相互に共有し、指導の視点の共有化及び連動を図る。

① 面接形式にて実施

- ・自己評価や、反省と課題を記入したシートを事前に提出する。スーパーバイザーはそれを踏まえて一人当たり30分の面接を行い、終了後、所見を提出する。

② 担当者方式にて実施

スーパーバイザー勤務園での園内研修会実施時に、担当の幼児教育アドバイザーが実践指導できるようにする。実践参観後の研修にて、実践者が行った実践に対して、指導助言を行うことを通して、実践者の課題に即した指導助言の技術を向上させる。

3. 受講者の評価と幼児教育アドバイザーの認定

(1) 受講者の評価

①受講者自身による記録と評価

受講者は、下記の記録と評価を行う。

- ①講習については、各講座の終了後、自らの学修状況について振り返りシートを作成する。
- ②講習における実習と、アドバイザー活動実習については、実習記録を作成した。自らの指導・助言や、計画・実施や、企画・運営について、対象となる実践・実践者や研修参加者等についての状況把握と問題設定、指導・助言上の課題と方法の設定、実施時の状況と留意点、実施に関する評価等を記録した。
- ③スーパーバイズ実施時には、毎回事前に自己評価と反省・課題の記述を行う。
評価については、10点満点とし、合格点を6点とする。
- ④プログラム終了時に、上記の記録を振り返り、総合的な自己評価を行う。

②スーパーバイザーによる評価

スーパーバイザーは、上記の受講者自身による記録と評価、及び、次項の勤務園の園長及び実践者による評価を踏まえ、スーパーバイズ時に、評価を行う。

評価については、「A：十分、達成している（4点）」「B：達成している（3点）」「C：課題が散見される（2点）」「D：課題山積である（1点）」を示し、所見を記述する。

③勤務園の園長及び実践者による評価

勤務園における、受講者の実習状況等について、報告する。

(2) 幼児教育アドバイザーの認定

次の①と②を満たした者を、幼児教育アドバイザーとして認定する。

- ①受講者自身による最終評価について、四つ資質・能力のそれぞれについて、細目の評定値の平均が6.0以上であり、かつ、総合評価の評定値が6.0以上であること。
- ②スーパーバイザーによる最終評価について、四つの資質・能力のそれぞれについて、細目の評定値の返金が3.0以上であり、かつ、総合評価の評定値が3.0以上であること。

○奈良市幼児教育推進委員会委員・研究部員・事務局一覧 (H27.4.1 現在)

| 氏名 | 所属 | 推進委員会 | スーパーバイザー | 講習における指導(講座No.) |
|--------|------------|-------|----------|-------------------------|
| 本山 方子 | 奈良女子大学准教授 | 委員長 | ○ | 1・2・3・5・7・14・15 |
| 横山 真貴子 | 奈良教育大学教授 | 副委員長 | ○ | 9・10・11・15 |
| 清水 益治 | 帝塚山大学教授 | 推進委員 | ○ | 9・10・11・15 |
| 岡澤 哲子 | 帝塚山大学教授 | 推進委員 | ○ | 9・10・11・15 |
| 大西 三千代 | 都祁こども園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 鎌田 稔子 | 神功保育園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 杉本 絹子 | 都跡こども園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 中西 明美 | 朱雀保育園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 西谷 慶子 | 左京こども園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 林 陽子 | 大安寺西幼稚園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 村田 三美 | 富雄北幼稚園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 八尾谷 和美 | 京西保育園園長 | 推進委員 | ○ | 3・4・5・6・7・8・12・13・14・15 |
| 入矢 陽介 | 平城西幼稚園保育教諭 | 研究部員 | | |
| 植田 輝 | 春日保育園保育教諭 | 研究部員 | | |
| 梅田 明美 | 右京保育園副園長 | 研究部員 | | |
| 奥 晴江 | 布目保育園副園長 | 研究部員 | | |
| 奥浦 和美 | 左京こども園副園長 | 研究部員 | | |
| 田中 由佳 | 大宮幼稚園副園長 | 研究部員 | | |
| 辻 久代 | 高円保育園副園長 | 研究部員 | | |
| 辻井 美智子 | 富雄南こども園副園長 | 研究部員 | | |
| 永井 美希 | 伏見保育園副園長 | 研究部員 | | |
| 馬路 有理 | 青和こども園副園長 | 研究部員 | | |
| 松本 比登美 | 大宮保育園副園長 | 研究部員 | | |
| 山中 理恵子 | 帯解こども園副園長 | 研究部員 | | |
| 大前 睦美 | こども園推進課主幹 | 事務局 | ○ | |
| 鈴木 優子 | こども園推進課主任 | 事務局 | | |
| 荒木 啓好 | こども園推進課主任 | 事務局 | | |
| 和田 江利子 | こども園推進課主任 | 事務局 | | |
| 北田 和美 | こども園推進課 | 事務局 | ○ | |
| 宮本 克子 | こども園推進課 | 事務局 | ○ | |
| 松本 知子 | こども園推進課 | 事務局 | ○ | |

幼児教育アドバイザーの育成プログラムの開発：
『奈良市立こども園カリキュラム』に基づく質の高い幼児教育の促進に向けて
(平成27年度文部科学省委託事業「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究」報告書)

2016年3月31日発行◎

編集 奈良市幼児教育推進委員会

代表：本山方子

発行 奈良市子ども未来部

〒630-8443 奈良市二条大路南一丁目1-1

電話 (0742) 34-1111 (代表)

印刷 共同プリント株式会社
